

佐用郡佐用町

平瀬遺跡

—国道373号地域連携推進事業（特改1種）に伴う埋蔵文化財調査報告書—

平成20（2008）年3月

兵庫県教育委員会

佐用郡佐用町

平瀬遺跡

—国道373号地域連携推進事業（特改1種）に伴う埋蔵文化財調査報告書—

平成20（2008）年3月

兵庫県教育委員会



南から



西から

卷頭図版 2　円光寺遺跡石垣



上段石垣全景（南から）



下段石垣近景（南から）



全景（南西から）



近景（南東から）

卷頭図版 4　円光寺遺跡出土壁土



上、表面 下、裏面

例　　言

1. 本書は佐用郡佐用町上月円光寺平瀬に所在する平瀬遺跡・円光寺遺跡・円光寺古墳の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、国道373号地域連携推進事業（特改1種）（調査当時は（国）373号特殊改良1種事業と称した。）に伴って実施したもので、本発掘調査（当時の呼称は全面調査）は平成11・12年度の2カ年に渡って、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所が実施した。調査概要の詳細は後述の通りである。
3. 本書の執筆は山上雅弘・長濱誠司・柏原正民が担当し、編集は山上が柏原美音の協力を得て行った。各執筆分担は以下の通りである。

山上 第1・2章、第3章第1・3節、第6章、長濱 第4・5章、柏原正民 第3章第2節
4. 出土品整理は平成18・19年度の2カ年に渡って実施し、遺物写真撮影は㈱タニグチ・フォトに外部委託した。整理作業の詳細は後述の通りである。
5. 本報告にかかる遺物写真・図面は、兵庫県立考古博物館で保管している。
6. 掲図第8~11図は円光寺地区所蔵である。
掲載にあたっては古瀬清之氏の協力をえた。
7. 現地作業及び整理作業の際には、関係機関を始め以下の方々からご協力、ご助言をいただいた。御芳名を記して感謝の意を表したい。

古瀬清之・水田一治・依藤 保・井上恒雄・藤木 透（佐用町教育委員会）・中村剛彰（同左）・衣笠基宏（同左）・山崎敏昭（三田市教育委員会）・藤田忠彦（赤穂市教育委員会）・荒木幸治（同左）・萩 能幸（上郡町教育委員会）・小田 賢（同左）・千葉 肇（京都大学埋蔵文化財センター）・田中幸夫（東播磨地域史懇話会）・村上 立（同左）（以上、敬称略、順不同）

凡　　例

1. 本書で示す標高値は東京湾海水準（T.P.）を基とし、方位は座標北を指す。なお、本地域は、国土地標第V系に属す。ただし、今回報告の座標値はすべて旧座標を用いている。
2. 各遺跡の調査区の名称は後述したとおりである。
3. 本書に使用した遺跡分布図などの地図については、国土地理院発行1/25,000地形図「上月」・「佐用」図幅を使用した。
4. 遺物には通し番号を付し、本文・実測図・写真図版で統一を図った。ただし、瓦・鉄製品・石製品についてはその頭にT・M・Sを付して土器と区別し、付表として遺物の一覧表を掲載した。
5. 土器の実測図は、種別ごとに断面を表現し区別している。
6. 土層などの色調については、小山正忠・竹原秀雄編著『新版 土色誌』1992年版を使用した。



第1図 遺跡の位置

平瀬遺跡目次

巻頭図版

例言・凡例

目次（本文・挿図・表・図版・写真図版）

第1章 調査の経緯と体制

第1節 調査に至る経過.....	1
第2節 現場作業と整理作業の経過と体制.....	2

第2章 遺跡の地理的・歴史的環境

第1節 地理的環境.....	3
第2節 歴史的環境.....	4

第3章 平瀬遺跡

第1節 遺跡の概要.....	7
第2節 雄文時代～奈良時代.....	7
第3節 中世以降.....	11

第4章 円光寺遺跡

第1節 遺跡の概要.....	35
第2節 造構.....	35
第3節 遺物.....	38
第4節 小結.....	43

第5章 円光寺古墳 47

第6章 遺跡のまとめ

第1節 平瀬遺跡の集落.....	49
第2節 円光寺と千種川流域について.....	55
第3節 河川流通と集落.....	56

卷頭図版

卷頭図版1 遺跡遠景

卷頭図版2 円光寺遺跡石垣

卷頭図版3 円光寺遺跡瓦溜り検出状況

卷頭図版4 円光寺遺跡出土壁土

表 目 次

表1 調査概要表	2	表5 平瀬遺跡遺物一覧表(3)	34
表2 平瀬遺跡掘立柱建物一覧表	24	表6 円光寺遺跡遺物一覧表(1)	45
表3 平瀬遺跡遺物一覧表(1)	32	表7 円光寺遺跡遺物一覧表(2)	46
表4 平瀬遺跡遺物一覧表(2)	33		

挿図目次

第1図 遺跡の位置	ii	第6図 平瀬遺跡集落の概念図	52
第2図 円光寺周辺の遺跡分布図(1/50,000)	5	第7図 佐用郡周辺の交通路	59
第3図 石段(1/25)	22	第8図 「円光寺村絵図」(年不詳)	60
第4図 調査区配置図	36	第9図 「円光寺村地籍図」(明治5年)	61
第5図 出土土器	38	第10図 「円光寺村地籍図」(詳細図)	62
		第11図 「郷土見取り図佐用郡久崎村圓光寺」	63

図版目次

図版1 円光寺周辺地形図(1/5,000)	図版18 平瀬遺跡I区ほか溝2 (平面1/200、断面1/60)
図版2 平瀬遺跡調査区全体図(1/1,000)	図版19 平瀬遺跡II区掘立柱建物1(1/100)
図版3 平瀬遺跡調査区全体図(1/400)	図版20 平瀬遺跡II区掘立柱建物2(1/100)
図版4 平瀬遺跡I・III区全体図(1/200)	図版21 平瀬遺跡II区掘立柱建物3(1/100)
図版5 平瀬遺跡II区全体図(1/200)	図版22 平瀬遺跡II区掘立柱建物4(1/100)
図版6 平瀬遺跡IV区全体図(1/200)	図版23 平瀬遺跡II区掘立柱建物5(1/100)
図版7 平瀬遺跡面積整理調査の全体図 (上1/400、下1/50)	図版24 平瀬遺跡II区掘立柱建物6(1/100)
図版8 平瀬遺跡調査区断面図1 (横1/200、縦1/40)	図版25 平瀬遺跡II区鍛冶炉(1/20)
図版9 平瀬遺跡調査区断面図2(1/40)	図版26 平瀬遺跡IV区掘立柱建物1(1/100)
図版10 平瀬遺跡I区堅穴住居跡(1/50)	図版27 平瀬遺跡IV区掘立柱建物2(1/100)
図版11 平瀬遺跡II区焼土坑(1/20)	図版28 平瀬遺跡IV区掘立柱建物3(1/100)
図版12 平瀬遺跡I区掘立柱建物1(1/100)	図版29 平瀬遺跡IV区掘立柱建物4(1/100)
図版13 平瀬遺跡I区掘立柱建物2(1/100)	図版30 平瀬遺跡出土遺物奈良時代以前 (1/4)
図版14 平瀬遺跡I区掘立柱建物3(1/100)	図版31 平瀬遺跡出土遺物奈良時代以前 (1/4)
図版15 平瀬遺跡I区掘立柱建物4(1/100)	図版32 平瀬遺跡出土遺物中世以降I区 (1/4)
図版16 平瀬遺跡I区掘立柱建物5 (1/100)・井戸・土坑(1/20)	図版33 平瀬遺跡出土遺物中世以降II区 (1/4)
図版17 平瀬遺跡I区ほか溝1 (平面1/200、断面1/60)	

図版34	平瀬遺跡出土遺物中世以降Ⅱ区2 (1/4)	図版53	円光寺遺跡出土遺物 軒丸瓦(3)
図版35	平瀬遺跡出土遺物中世以降Ⅱ区3 (1/4)	図版54	円光寺遺跡出土遺物 軒平瓦(1)
図版36	平瀬遺跡出土遺物中世以降Ⅱ区4 (1/4)	図版55	円光寺遺跡出土遺物 軒平瓦(2)
図版37	平瀬遺跡出土遺物中世以降Ⅱ区5 (1/4)	図版56	円光寺遺跡出土遺物 丸瓦(1)
図版38	平瀬遺跡出土遺物中世以降Ⅳ区1 (1/4)	図版57	円光寺遺跡出土遺物 丸瓦(2)
図版39	平瀬遺跡出土遺物中世以降Ⅳ区2 (1/4)	図版58	円光寺遺跡出土遺物 丸瓦(3)
図版40	平瀬遺跡出土遺物中世以降金属製品	図版59	円光寺遺跡出土遺物 丸瓦(4)
図版41	円光寺遺跡調査区全体図 (1/300)	図版60	円光寺遺跡出土遺物 丸瓦(5)
図版42	円光寺遺跡北区全體図 (1/160)	図版61	円光寺遺跡出土遺物 丸瓦(6)
図版43	円光寺遺跡北区盛土断面図 (1/40)・土坑(1) (1/50)	図版62	円光寺遺跡出土遺物 丸瓦(7)
図版44	円光寺遺跡上坑(2) (1/50)	図版63	円光寺遺跡出土遺物 丸瓦(8)
図版45	円光寺遺跡南区全體図 (1/160)	図版64	円光寺遺跡出土遺物 丸瓦(9)
図版46	円光寺遺跡南区斜面堆積状況 (1/40)	図版65	円光寺遺跡出土遺物 丸瓦(10)
図版47	円光寺遺跡南区石垣平・立面図 (1/40)	図版66	円光寺遺跡出土遺物 平瓦(1)
図版48	円光寺遺跡南区上段盛土断面 下段石垣裏込め断面 (1/40)	図版67	円光寺遺跡出土遺物 平瓦(2)
図版49	円光寺古墳調査区全体図 (1/100)	図版68	円光寺遺跡出土遺物 平瓦(3)
図版50	円光寺遺跡出土遺物土器	図版69	円光寺遺跡出土遺物 鬼瓦(1)
図版51	円光寺遺跡出土遺物軒丸瓦(1)	図版70	円光寺遺跡出土遺物 鬼瓦(2)
図版52	円光寺遺跡出土遺物 軒丸瓦(2)	図版71	円光寺遺跡出土遺物 鳥衾
		図版72	円光寺遺跡出土遺物 雁振瓦(1)
		図版73	円光寺遺跡出土遺物 雁振瓦(2)
		図版74	円光寺遺跡出土遺物 雁振瓦(3) 道具瓦(1)
		図版75	円光寺遺跡出土遺物 道具瓦(2)
		図版76	円光寺遺跡出土遺物 金属製品(1)
		図版77	円光寺遺跡出土遺物 金属製品(2)

写真図版目次

写真図版 1	円光寺遺跡・平瀬遺跡全景	写真図版18	平瀬遺跡Ⅱ区掘立柱建物
写真図版 2	遺跡遠景	写真図版19	平瀬遺跡Ⅱ区掘立柱建物
写真図版 3	遺跡全景	写真図版20	平瀬遺跡Ⅱ区掘立柱建物
写真図版 4	遺跡周辺	写真図版21	平瀬遺跡Ⅱ区掘立柱建物
写真図版 5	平瀬遺跡調査区全景 (I・II区)	写真図版22	平瀬遺跡Ⅱ区掘立柱建物
写真図版 6	平瀬遺跡調査区全景 (III・IV区)	写真図版23	平瀬遺跡Ⅱ区柱穴
写真図版 7	平瀬遺跡 I 区全景	写真図版24	平瀬遺跡Ⅱ区鍛冶炉
写真図版 8	平瀬遺跡 I 区豎穴住居跡	写真図版25	平瀬遺跡Ⅱ区鍛冶炉
写真図版 9	平瀬遺跡 I 区掘立柱建物	写真図版26	平瀬遺跡Ⅱ区壁断面
写真図版10	平瀬遺跡 I 区掘立柱建物	写真図版27	平瀬遺跡Ⅲ区
写真図版11	平瀬遺跡 I 区柱穴	写真図版28	平瀬遺跡Ⅳ区
写真図版12	平瀬遺跡 I 区溝	写真図版29	平瀬遺跡Ⅳ区
写真図版13	平瀬遺跡 I 区井戸・土坑	写真図版30	平瀬遺跡Ⅳ区掘立柱建物
写真図版14	平瀬遺跡Ⅱ区全景	写真図版31	平瀬遺跡Ⅳ区掘立柱建物・石段
写真図版15	平瀬遺跡Ⅱ区掘立柱建物	写真図版32	平瀬遺跡Ⅳ区柱穴
写真図版16	平瀬遺跡Ⅱ区焼土	写真図版33	円光寺周辺の風景
写真図版17	平瀬遺跡Ⅱ区掘立柱建物	写真図版34	平瀬遺跡出土遺物中世以前

写真図版35	平瀬遺跡出土遺物中世以前		写真図版68	円光寺遺跡出土遺物	軒平瓦(3)(4)
写真図版36	平瀬遺跡出土遺物 中世土器 1		写真図版69	円光寺遺跡出土遺物	軒平瓦(5)
写真図版37	平瀬遺跡出土遺物 中世土器 2		写真図版70	円光寺遺跡出土遺物	丸瓦(1)
写真図版38	平瀬遺跡出土遺物 中世土器 3		写真図版71	円光寺遺跡出土遺物	丸瓦(2)
写真図版39	平瀬遺跡出土遺物 中世土器 4		写真図版72	円光寺遺跡出土遺物	丸瓦(3)
写真図版40	平瀬遺跡出土遺物 中世土器 5		写真図版73	円光寺遺跡出土遺物	丸瓦(4)
写真図版41	平瀬遺跡出土遺物 中世土器 6				平瓦(1)
写真図版42	平瀬遺跡出土遺物 中世土器 7		写真図版74	円光寺遺跡出土遺物	平瓦(2)
写真図版43	平瀬遺跡出土遺物 中世土器 8・石製品		写真図版75	円光寺遺跡出土遺物	平瓦(3)
写真図版44	平瀬遺跡出土遺物 金属製品		写真図版76	円光寺遺跡出土遺物	丸・平瓦(表)
写真図版45	円光寺遺跡全景		写真図版77	円光寺遺跡出土遺物	丸・平瓦(裏)
写真図版46	円光寺遺跡遠景		写真図版78	円光寺遺跡出土遺物	鬼瓦(1)
写真図版47	円光寺遺跡調査前の状況		写真図版79	円光寺遺跡出土遺物	鬼瓦(2)
写真図版48	円光寺遺跡調査区全景		写真図版80	円光寺遺跡出土遺物	鳥糞(1)
写真図版49	円光寺遺跡北区全景		写真図版81	円光寺遺跡出土遺物	鳥糞(2)
写真図版50	円光寺遺跡北区斜而部		写真図版82	円光寺遺跡出土遺物	雁振瓦(1)
写真図版51	円光寺遺跡南区全景		写真図版83	円光寺遺跡出土遺物	雁振瓦(2) (凸面)
写真図版52	円光寺遺跡南北斜面堆積状況		写真図版84	円光寺遺跡出土遺物	雁振瓦(2) (凹面)
写真図版53	円光寺遺跡南北区瓦出土状況		写真図版85	円光寺遺跡出土遺物	
写真図版54	円光寺遺跡南北区壁土片等出土状況		写真図版86	円光寺遺跡出土遺物	雁振瓦(3)・道具瓦(1)
写真図版55	円光寺遺跡南北区石垣		写真図版87	円光寺遺跡出土遺物	道具瓦(2)
写真図版56	円光寺遺跡南北区石垣		写真図版88	円光寺遺跡出土遺物	文字瓦
写真図版57	円光寺遺跡南北区石垣		写真図版89	円光寺遺跡出土遺物	壁土(1) (表)
写真図版58	円光寺遺跡南北区現存の石垣		写真図版90	円光寺遺跡出土遺物	壁土(1) (裏)
写真図版59	円光寺遺跡調査区東側現況		写真図版91	円光寺遺跡出土遺物	壁土(2)
写真図版60	円光寺古墳調査前		写真図版92	円光寺遺跡出土遺物	壁土(3)
写真図版61	円光寺古墳調査区遠景		写真図版93	円光寺遺跡出土遺物	壁土(4)
写真図版62	円光寺古墳群		写真図版94	円光寺遺跡出土遺物	壁土拡大写真
写真図版63	円光寺遺跡南北区出土遺物 土器(1)		写真図版95	円光寺遺跡出土遺物	鉄釘
写真図版64	円光寺遺跡南北区出土遺物 土器(2)		写真図版96	円光寺遺跡出土遺物	金属製品
写真図版65	円光寺遺跡出土遺物 軒丸瓦(1)(2)				
写真図版66	円光寺遺跡出土遺物 軒丸瓦(3)				
写真図版67	円光寺遺跡出土遺物 軒平瓦(1)(2)				

第1章 調査の経緯と体制

第1節 調査に至る経過

上月町円光寺周辺で（国）373号特殊改良1種事業が計画され、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所が分布調査を行ったところ、遺跡の存在する可能性が判明したため、平成10年度に確認調査が実施された。この結果、遺構・遺物が検出され中世の集落遺跡の存在が明らかになった。このため、それぞれ平瀬遺跡・円光寺遺跡として本発掘調査を行うこととした。さらに、路線内には周知の遺跡「円光寺古墳」が存在することが確認されたことから、平成12年度、確認調査が行われ、平成12年度に本発掘調査（当時、全面調査）を実施した。年次ごとの調査概要は表1の通りである。

国道373号線の改良工事に伴う調査地は、平瀬集落の西側から円光寺遺跡東背後の山腹にかかる周辺にあたる。以下遺跡ごとに経過の詳細について報告する。

平瀬遺跡

遺跡周辺の地区名は円光寺であるが、北側の佐用川の対岸の地区を特に平瀬と呼ぶ。このため地区名（旧村名）は平瀬遺跡の範囲についても円光寺に含まれるが、川の北側地区を呼ぶ場合に限って平瀬と呼んでいる。

平瀬遺跡については昭和59年度に圃場整備に伴って発掘調査が行われ（図版7参照）、存在が明らかになつた。この調査の結果、13世紀前後の集落遺跡の存在が明らかにされ、柱穴・溝・土坑などの遺構や須恵器・土師器などの遺物が出土した。なお、今回の調査地区は当時の確認調査では遺跡の存在が認められない地区として扱われていた。

その後、当該地区について国道373号線改良工事が計画され、平成10年度に確認調査が行われた。これによつて開発予定地周辺では広く遺跡の存在が確認されたため、平成11年度にI・II区の本発掘調査（当時全面調査と呼称）を実施した。この結果、遺跡がII区の東側およびI・II区間の道路下にも広がることが明らかとなつたため、確認調査を行いIII・IV区について、平成12年度に本発掘調査を実施した。

円光寺遺跡

平瀬遺跡と同じく国道373号線改良工事に伴つて調査を実施した。平成10・11年度に分けて確認調査が行われ、中世の瓦片や土器などが出土したことから、遺跡の存在が明らかにされた。このため平成12年度に平瀬遺跡とともに本発掘調査を実施した。

円光寺古墳

平瀬遺跡と同じく国道373号線改良工事に伴つて調査を実施した。当該地は周知の遺跡「円光寺古墳」の範囲内にあることから、平成11年度に確認調査を実施し、土師器・須恵器などが出土した。これを受けて平成12年度に本発掘調査が実施された。

第2節 現場作業と整理作業の経過と体制

1. 現場の作業と体制

発掘調査は平成10年度に確認調査が行われ、平成11・12年度の2カ年で本発掘調査を実施した。

平成11年度

平瀬遺跡のI・II区について本発掘調査を行い、円光寺遺跡南側半分・円光寺古墳の確認調査を実施した。
これによって、平瀬遺跡は東側に遺跡が広がることが判明した。

平成12年度

平瀬遺跡のIII・IV区について本発掘調査を行い、円光寺遺跡・円光寺古墳の本発掘調査を実施した。

2. 整理の体制

平瀬遺跡の整理作業は平成18・19年度の2カ年にかけて実施した。平成18年度に遺物接合・復元・遺物実測・写真撮影・金属器保存処理を行った。平成19年度に遺物実測・トレース・遺物写真撮影・叢集作業を行い、報告書を刊行した。

【調査関係者】

・調査員……………主査 山上雅弘・主査 長濱誠司・主査 柏原正民

・現場関係

調査補助員……………小谷義男

・整理作業

嘱託職員

実測・トレース…柏原美音・柏木明子・前山三枝子

接合・復元……吉田優子・眞子ふさ恵・西口由紀・木村淑子・小野潤子・宮野正子・三好綾子・奥野政子・又江立子・荒木由美子・藤池かづさ・嶺岡美見

金属保存処理……栗山美奈・大前篤子・藤井光代

日々雇用職員……久保昭夫・清水幸子・小谷桂加

表1 調査概要表

調査年度	調査番号	調査種別	平瀬遺跡		円光寺遺跡		円光寺古墳		調査期間
			面積	面積	面積	面積	面積	面積	
平成10年	980069	確認調査	○	236m ²	○	20m ²	—	—	平成10年5月19日～5月25日
平成11年	990007	本発掘調査	I・II区	2270m ²	—	—	—	—	平成11年5月10日～8月25日
平成11年	990007	確認調査	III・IV区	30m ²	—	—	—	—	平成11年6月1日
平成11年	990210	確認調査	—	—	○	55m ²	○	39.5m ²	平成11年7月28日～8月20日
平成12年	2000127	本発掘調査	III・IV区	930m ²	—	—	—	—	平成12年5月11日～8月24日
平成12年	2000128	本発掘調査	—	—	—	—	○	91m ²	平成12年7月8日～8月1日
平成12年	2000129	本発掘調査	—	—	○	631m ²	—	—	平成12年5月23日～8月21日

第2章 遺跡の地理的・歴史的環境

第1節 地理的環境

平瀬遺跡の所在する佐用町は兵庫県の西端に位置し、町域の西境は岡山県に接している。本町は平成17年10月1日に佐用郡域（佐用町・南光町・上月町・三日月町）の4町すべてが合併し、新に佐用町として発足した。平瀬遺跡・円光寺遺跡はこのうち旧上月町円光寺に所在する。

町域には千種川とその支流である佐用川が流れ、千種川は旧南光町・旧三日月町域を流域とし、佐用川は旧佐用町・旧上月町を流域とする。両河川は平瀬遺跡の南にある久崎で合流し、南の赤穂郡に流下する。なお、佐用川には秋里川・大日山川・幕山川などの支流があるが、遺跡西側では秋里川が合流している。

佐用町内（郡内）での交通路として重要なものは古代の美作街道が知られる。この街道は新宮から相坂峠を越えて、旧三日月町に入り、古代には中川駅から志文川沿いに土居に通じるが、中世からは卯の（宇野）乱の峠を越えて旧南光町域の林崎に入り、さらに佐用坂を通して佐用に通じていたという。街道は古代～中世まではこのまま西へ通じ杉坂峠を越えるルートとなるが、近世からは佐用川を下って上月から美作土居に抜ける万の巻越えが使われたという。一方、因幡へ向かう街道は佐用から北上して平福に至る。この道は釜坂で国境を越え、美作の大原に至っている。

現代の道路では美作街道から因幡街道へ通じるルートが国道179号線、赤穂郡から千種川を北上し佐用川沿いに進んで、佐用で国道179号線に合流する国道373号線が幹線道である。このほか、町域北部の中国縦貫自動車道、建設中の鳥取横断道などの高規格道路も重要な役割を担う。鉄道では東西にJR姫新線が通り、上郡町と鳥取県智頭町を結ぶ智頭急行が南東部を通っている。

円光寺周辺では、秋里・西新宿を通過して岡山へ抜ける街道の存在が『信長公記』などに登場する。また、南の久崎へ通じる川沿いの道や、円光寺砦と鈴ノ山城の間を通過して山越えする峠道、平瀬地区から川沿いに上月へ抜ける道、平瀬遺跡背後の片木山^{だいぎさん}を越えて上月へ抜ける道などがあった。円光寺は河川沿いに外界とつながるもの地形的には閉ざされた地形であるので、これらの道は外界をつなぐ大きな役割を担った。

江戸時代、旧上月町域には34村があり（旧高領領取調帳）、抜井・小赤松・大酒の三村は赤穂郡に、その他は、すべて佐用郡に属していた。明治22年（1889）の町村制施行により佐用郡幕山村・西庄村・久崎村が成立し、昭和15年（1940）久崎村が町制を施行している。同30年には久崎町に赤穂郡赤松村（一部は現上郡町）の大酒・小赤松および旭日内抜地（現大字大釜）が合併。同年幕山村と西庄村が合併して上月町となる。同33年上月町に久崎町が合併して合併以前の上月町が成立する。つまり、旧上月町のうち久崎は南側の中心として要衝を占めた村であった。

遺跡が所在する円光寺はこの久崎を佐用川沿いに北に通った最初の村である。村名は中世に建立された円光寺に由来すると推定される。この寺は集落東背後の丘陵中腹にあったとされ、今回の遺跡調査地周辺がその比定地である。

慶長国絵図に円光寺村が見え、正保郷帳では田方九〇石余・島方一二一石余。延宝七年（1679）の検地帳（円光寺村文書）によれば検地面積二〇町八反余・高二一五石余、田畠名請人八三・屋敷名請人三八。天保郷帳では高二二四石余と推移しており、江戸中期以降ほぼ石高は変化がない。この他、元和元年（1615）の高瀬舟数定（圓嶋家文書）によれば、上月村とともに当村にも高瀬舟所持が定められ、明治初年まで舟着場が置かれ舟運が存続していたという。舟着場は平瀬の南側、調査地点周辺と、円光寺の南側にあったという。

第2節 歴史的環境

上月町の南部にあたる遺跡周辺は調査事例が少ないこともあって、多くのことが分かっているわけではない。ただ近年では、上月合戦に伴う城や陣城、早瀬の瓦窯が発見されるなど大きな発見もみられた。ここでは時代を追って遺跡の概要を説明する。

旧石器時代・縄文時代

金屋遺跡中土居下地区で旧石器時代の石器が、柳田遺跡原土居I地区では縄文土器が出土しており、わずかではあるが痕跡をたどることができる。

弥生時代

弥生時代の遺跡は中期～後期にかけての集落を中心に知られている。中期の集落としては早瀬遺跡・カジ屋遺跡・下山脇遺跡で竪穴住居跡が検出された。この他、柳田遺跡奥村土居地区からは石器の工房跡の可能性がある竪穴住居跡が検出されている。中期～後期の集落では大酒相の原遺跡、後期の集落では金屋遺跡・早瀬遺跡で竪穴住居跡が検出されている。

このほか、金屋遺跡では前期の壺や石庖丁、坊主山遺跡で中期の土器、さらに小赤松地区では時期は不明であるが土壙墓、大酒相の原遺跡で鉄鏃、本郷遺跡でも詳細は不明であるが弥生土器が出土するなど、断片的な資料であるが地域的な様相をわずかながら窺うことができる。

古墳時代

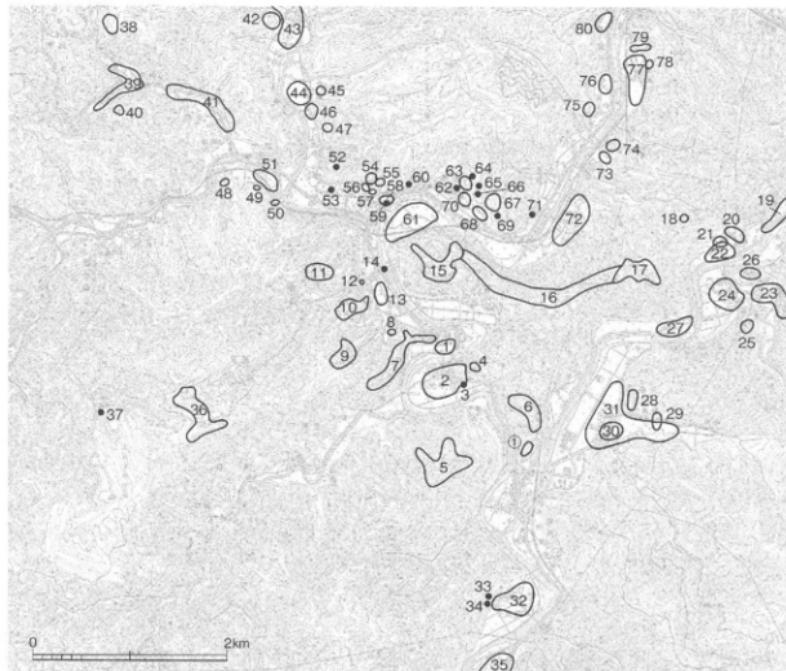
古墳は多くはないが上月地区周辺に比較的まとまって知られている。発掘調査されたものはないが、上月地区の上月古墳・芦谷古墳・丸山古墳群・早瀬地区の早瀬古墳・同群集墳・坂古墳群などがある。遺跡周辺では円光寺古墳が知られるのみであるが、今回の調査によって破壊されていたことが判明した。

上月古墳は中期墳の円墳で直径30m、高さ2.5mの規模を持つ。昭和23年（1948）に陶棺の一部が発見されたという。このほかの古墳はすべて後期から終末期のものといわれ、直径は10～20m前後のものである。なお、丸山群集墳の1号と芦谷古墳は主体部が竪穴式石室であるという。

古代

古代では佐用に所在する長尾沖田遺跡が知られ、この時期の都内の中心が佐用周辺にあったとされる。このためか町内の他地域では、当該期の成果が今のところあまり多く見られない。ただし、上月町内では早瀬地区と円光寺地区において大きな成果が見られた。注目を集めた早瀬瓦窯跡の調査は早瀬地区にあった奈良時代の早瀬廃寺に関する瓦窯と推測される。早瀬廃寺は早瀬廃寺塔芯礎（市史跡）が比定地に残されることや、圓場整備に伴う調査で布目瓦が出土するなど、廃寺の存在が指摘されてきた。これらの廃寺の存在や瓦窯の発見により、早瀬地区の歴史的意義が見直されつつある。また、円光寺遺跡では今回の調査のほか、昭和59・60年度に圓場整備に伴う調査が行われている。調査地点は円光寺地区の現集落の西側一帯にあたる。この調査では掘立柱建物や土坑（土器溜り遺構）・溝が検出され、輪の羽口・鉄滓・須恵器（稜腕）・土師器などが出土し、有力な集落が営まれていた可能性が高い。

このほかでは、原土居遺跡には福円廃寺跡が比定され堂宇の基壇部・布目瓦片が出土したとされる。生産遺跡の金屋遺跡で7世紀中頃の製鉄遺跡、炉跡3基と炭堆積層の検出が知られていることなど重要な調査成果も幾つか見られる。



第2図 円光寺周辺の遺跡分布図 (1/50,000)

遺跡一覧表

No.	遺跡名	所在地	No.	遺跡名	所在地	No.	遺跡名	所在地
1	平瀬遺跡	上月町円光寺平瀬	2	円光寺遺跡	上月町円光寺	3	円光寺古墳	上月町円光寺
4	円光寺砦	上月町円光寺	5	浅瀬山城跡	上月町円下秋里	6	瓶ノ山城跡	上月町円光寺
7	円光寺山城跡	上月町円光寺	8	山下古墳	上月町上月	9	大龜山城跡	上月町中上月
10	上月城跡	上月町上月	11	上月古城跡	上月町上月	12	真野遺跡	上月町仁位
13	古戸敷遺跡	上月町上月	14	上月首塚	上月町上月	15	仁位山城跡	上月町仁位
16	高倉遺跡	上月町御田・仁位	17	高倉山城	上月町御田ほか	18	陣城	南光町中島
18	高倉山城跡	上月町御田	20	西山方城跡	南光町多賀	21	譲田古墳群	南光町多賀
19	栗手遺跡	南光町中島	23	上々遺跡	南光町多賀	24	門脇遺跡	南光町多賀
22	葛田遺跡	南光町多賀	26	秋浦遺跡	南光町多賀	27	石井遺跡	上月町御田
25	秋浦ノ横跡	南光町多賀	29	奥村遺跡	上月町御田	30	権円魔寺	上月町御田
28	柳田城跡	上月町御田	32	小赤松遺跡	上月町小赤松	33	小赤松經塚I	上月町御田
31	柳田遺跡	上月町御田	35	相の原遺跡	上月町大酒	36	目高の築地	上月町日高
34	小赤松經塚II	上月町小赤松	38	宇根山城跡	上月町宇根	39	宇根遺跡	上月町宇根
37	久木原古墳	上月町西大島	41	須安遺跡	上月町須安	42	比久尼城跡	上月町金屋
40	宇根古墳	上月町宇根	44	中土居遺跡	上月町金屋	45	金屋赤谷遺跡	上月町金屋
43	上土居遺跡	上月町金屋	47	天水タタラ遺跡	上月町金屋	48	金谷遺跡	上月町須安
46	下土居遺跡	上月町金屋	50	力万遺跡	上月町力万	51	力万遺跡	上月町力万
49	力万經塚	上月町力万	53	上月古墳	上月町上月	54	芦谷家ノ瀧り遺跡	上月町上月
52	上月横瀬古墳	上月町字横瀬	56	フルワン遺跡	上月町上月	57	芦谷古墳	上月町上月
55	芦谷遺跡	上月町上月	59	丸山古墳群	上月町上月	60	早瀬古墳	上月町早瀬
58	丸山城跡	上月町上月	62	早瀬瓦窯跡	上月町早瀬	63	早瀬城跡	上月町早瀬
61	早瀬南谷遺跡	上月町早瀬	65	早瀬の谷遺跡	上月町早瀬	66	早瀬遺跡	上月町早瀬
64	鍋冶屋谷遺跡	上月町早瀬	68	早瀬遺跡	上月町早瀬	69	波遺跡	上月町早瀬
67	坂古墳群	上月町早瀬	71	才ヶ鼻遺跡	佐用町早瀬	72	下山脇遺跡	佐用町早瀬
70	早瀬古寺	上月町早瀬	74	菜草遺跡	佐用町山脇	75	福原遺跡	佐用町山脇
73	カジ屋遺跡	佐用町山脇	77	大坪散布地	佐用町佐用	78	大坪遺跡	佐用町佐用
76	福原城跡	佐用町佐用	80	下吉福遺跡	佐用町佐用			

①大慈神社コヤスノキ社叢林 上月町久崎

中世

中世前半の遺跡はあまり多くはない。真野遺跡（上月）で13世紀前半の柱穴群や土師器・須恵器が出土したほか、柳田遺跡（掘立柱建物）や金屋遺跡（掘立柱建物・集石墓）で若干の成果が見られる。一方、昭和59年度には平瀬地区において謹湯整備に伴う発掘調査が行われ、12～15世紀前後の掘立柱建物数棟・柱穴群・溝などが検出されたという。これらの成果は、今回の調査地点につながる集落遺跡のものとして注目される。なお、平瀬遺跡の謹湯整備調査については詳縦を後述した。

戦国時代

遺跡周辺では戦国時代の上月城跡周辺に多くの山城が分布する。特に近年の動向としては上月城跡に関わる遺構群の発見と、上月合戦に伴う陣城などの発見が相次いでいる。これまで合戦の規模の割に小規模とされていた上月城跡であるが、実は日高集落の背後にあら日高の築地までを視野に入れると広大な陣所群で構成され、織田期の城郭構造の1つの特徴を表していることが明らかにされつつある。また、高倉山城跡や南の坂の山城跡までを広げて地域を観察してみると、この合戦に関わる城塞群と推測される遺構群が高密度に分布することも改めて評価されてきている。

これらの遺構群について近年では山下晃誉・中村剛彰両氏による調査が行われ、佐用郡の城郭遺構の詳細が明らかにされつつある。

戦国時代の城館の発掘調査では殿町構・福原城跡・仁位山城跡の調査がある。殿町構では居館内部および南辺の調査が行われ掘立柱建物や石組井戸・土坑などが検出され多くの遺物が出土するとともに、南辺の土塁・堀の調査が行われている。福原城跡では郭内部の調査が行われ、櫓跡などが出土している。仁位山城跡では東側尾根で段上遺構が検出され、陣城構造の一端が明らかにされている。

参考文献

上月町『上月町史』1988年

高橋美久二「古代の美作道」『歴史の道調査報告書第四集 美作道』兵庫県教育委員会 1994年

『兵庫県の地名II』平凡社 1999年

兵庫県教育委員会『製鉄遺跡I（佐用郡）』1999年

佐用郡地域史研究会『播磨古道をさぐる－佐用郡編－』2002年

佐用郡教育委員会『平成13年度埋蔵文化財調査年報』2003年

佐用郡教育委員会『平成6年度埋蔵文化財調査年報』2004年

佐用郡教育委員会『平成14年度埋蔵文化財調査年報』2004年

佐用郡教育委員会『平成15年度埋蔵文化財調査年報』2005年

山下晃誉『上月合戦～織田と毛利の争奪戦～』上月町 2005年

佐用町教育委員会『早瀬瓦窯跡』2006年

第3章 平瀬遺跡

第1節 遺跡の概要

平瀬遺跡では、平成11・12年度の2年度に渡ってI～IV区の合計3200m²を調査した。この結果、縄文時代・弥生時代・古墳時代・奈良時代・中世～近世の遺構・遺物が検出された。特に中世段階の集落跡は掘立柱建物53棟を検出し、調査区全域が集落域であることが確認されるなど、遺跡の最も中心となる時期であることが判明した意義は大きい。

縄文時代・弥生時代については僅かに遺物が出土したに留まったが、付近に遺跡の存在を示唆した意義は大きい。古墳時代は堅穴住居2棟がI区から検出され、小規模ながら集落の存在が見出された。

奈良時代は遺物の出土のみに留まるが、南側の円光寺遺跡では圓場整備の調査で、土坑や溝などから大量の土器・須恵器が出土しており、平瀬遺跡にも遺跡の広がりを推測させた。

中世は後述の通り、川津と思われる集落の存在が明らかになった。そして、この集落は14～17世紀を中心とした時期に最も拡大し、発達した構造を持った。

第2節 縄文時代～奈良時代

1. 遺構

中世の遺構面と同一面で検出された。堅穴住居・焼土坑・溝・土坑・ピットなどがある。いずれも後世の削平によって上部を削平され、遺存状態はよくない。

堅穴住居

S H 1 (図版10、写真図版8)

I区の調査区西端に位置する。調査区内において検出できたのは北東隅を中心とした約半分で、北辺は河コーナーが検出された。また東辺も南端で屈曲を見せ始めており、南北3.2m×東西2.8mの小規模な方形の住居址と見られる。

検出した床面は平坦で、ほぼ水平な状態であった。周壁の高さは最も残りがよい周壁沿いで10cm程度、底部付近のみが残存する状態で検出された。埋土は、暗褐色シルト質細砂の單層であった。

屋内施設として、周壁溝と柱穴がある。周壁溝は北東と北西隅付近の周壁沿いで検出した。幅10cm・深さ5cmとほぼ一定の規模を持つ。主柱穴は南北の主軸に近い位置で1基検出した。小規模であることから、2本柱によって屋根を支持する構造の可能性を考えておきたい。柱穴の掘り方は円形で、直径40cm・深さ70cmを測る。なお北西隅において、浅い土坑状の落ち込みを検出した。内部からは須恵器・土師器が数点出土している。

床面付近の埋土から出土した須恵器の杯蓋(11～13)は、6世紀末～7世紀初頭の特徴を有し、住居址の機能した時期を示すと考えられる。

S H 2 (図版10、写真図版8)

I区の調査区西端に位置する。やや歪な方形の堅穴住居で、東西7.2m×南北3.7mを測る。調査区内において検出できたのは北東部の約半分である。

後世の削平による影響が大きく、周壁の遺存状況は極めて悪い。高さは最も遺存する北辺でも3～5cmを測

るにすぎず、床面付近の埋土がわずかに残存する状態で検出された。床面は平坦で、暗褐色シルト質細砂が埋土として堆積していた。

屋内施設は周壁溝・柱穴である。周壁の基部に沿って、周壁溝を1条検出した。幅は10~15cmで、検出した南東部分で途切れている。住居址に伴う柱穴は東隅の1基で、直径50cm・深さ60cmを測る。内部からは柱の根固めに用いた人頭大の礫が検出された。対応する北隅の柱穴は、溝により失われている。

出土遺物は、床面に近い埋土から土師器の壺(14・15)、須恵器の壺(16)、土錘などがあり、これらの年代感から6世紀後半の時期に営まれていたと考えられる。

焼土坑

不定長方形の土坑を2基検出した。上部を大きく削平され、底部付近が残存すると考えられる。長軸を合わせて南北方向に並列する位置にあり、両者の間は削平によって分断されるが、形状などから個別の造構として記述する。

S X 1 (図版11、写真図版16)

II区の南調査区端で検出された。南北1.6m・東西0.8mの長楕円形で、南部と中央を後世の水田暗渠によつて失っている。船底状に深くなり、最深で0.15mを測る。

上面も削平による影響を受ける。埋土は1層：にぶい赤褐色シルト質細砂で、続く2層：暗褐色シルト質細砂が著しい還元を帯びていた。遺物はすべて1層で出土していることから、2層の上面が本来の床面をなすと考えられる。3層以下は被熱による堆積がより鉢状に認められた。埋土および底部には炭化物が含まれるが、少量で底部でも局部的であった。底面ならびに側面は全面に被熱による赤化が認められた。

製鉄関連の造構を推定しているが、関連遺物や原料、廃滓等は出土しなかった。出土遺物は須恵器・土師器で、団化できたものとして、土師器の壺(23)がある。

S X 2 (図版11、写真図版16)

II区の調査区南端、S X 1の南2mに位置する。南北1.9mに赤化する範囲が認められる。平面は亞みの大きい楕円形を呈し、最大幅は0.9mである。深さは0.05mで側面がレンズ状、底面は起伏を持つ。上面が大きく削平された結果、底部付近のみが残存すると考えられる。

埋土はにぶい赤褐色シルト質細砂で、炭化物を含む。炭化物は中央付近の床面直上で、顕著な集積が見られた。床面直上では火を受けたことによる赤化が認められるものの、表層近くが変質するのみであった。

残存状態がよくないものの、小鍛冶炉などの製鉄遺構を想定している。後世の削平によって、底部付近のみが検出されたものであろう。

遺物は、須恵器・土師器が埋土から数点出土している。小片で団化できたものはないが、器壁の状況などから、古墳時代の所産と考えられる。

2. 遺物

中世に先行する時期の遺物を一括して報告する。全体の遺物量は少なく、包含層から出土した遺物が全体の半数以上を占めている。

以下、団化できたものを種別・器種ごとに記述する。

縄文土器 (1~10) (図版30、写真図版34)

ほとんどが、わずかな残存であり、器種の同定について不明な点を残す。団化できた破片の多くは平口縁の鉢と考えられ、外面口縁直下に貼り付け突帯をめぐらすものが多い。突帯には継方向の刻み目を付する。器壁

は内外ともに黒褐色を呈し、表面に摩滅は見られるものの焼成は良好である。

1は浅鉢の口縁部と見られ、「の」字形の突帯部分のみが残る。外面には、線刻による文様を有する。

10は深鉢の口縁部で、平口縁の外面に2条の沈線を配する。内面・外面とも摩滅が激しい。

弥生土器（17～19）・土師器（14・15・23）（図版30、写真図版34・35）

壺の一部と考えられる破片を6点図化した。胎土の状況から弥生土器・土師器と考えられる破片を含めても、出土総量に占める割合は須恵器の半分程度にとどまっている。

弥生土器は口縁部付近がわずかに遺存する壺3点を図化した。いずれも大きい体部から短く「く」字形に外反する口縁を持つ。口縁端部は、17が上下に拡張し端面をヨコナデ、18は内側へ折り返し縁状に形成する。19も上方へ折り返す意識はあるものの、丸くおさめて縁は明瞭ではない。器壁の摩滅が著しく、口縁付近にヨコナデ、体部外面にハケメの痕跡をわずかにとどめる。体部内面は17でハケメ、19でヘラケズリの痕が認められる。

土師器は小型の壺3点を図化した。頸部のしづりが少なく、緩やかに外反する口縁をもつ。口縁端部はいずれもまるくおさめるが、14・15が外から巻き込むのに対して、23は外反気味になる。外面調整は、体部外面がハケメ、内部がヘラケズリで、頸部内面には指頭痕をとどめている。頸部はヨコナデで仕上げている。

須恵器（11～13、16、20～22、24～40）（図版30・31、写真図版34・35）

当該時期の出土遺物において、半数近くを占めている。古墳時代と奈良時代の所産に大別される。

図化できた遺物で最も多い器種が、たちあがりを有する杯身と、それに対応する杯蓋で、竪穴住居址やピットのほか、包含層からも出土している。包含層出土の遺物は、細片化して一部が残存している。

杯蓋はドーム形の天井から体部で屈曲して、垂直気味に口縁に至る。11・12では体部と口縁部の境界で鈍い凹線が認められた。口縁端部はいずれも内傾して、11・12・31では段をなす。

天井部の外面はいずれも回転ヘラ切り痕をとどめ、内面には複数回の同心円スタンプ痕をとどめるものがある（11・31）。口縁部付近は回転ナデで仕上げるが、22・31では、外面に装飾風に施したハケ痕が認められた。

杯身は、多くが平坦な底部から緩やかに渋曲して受部に至る形態のものが多い。たちあがりは内湾気味に口縁へ至り、口縁端部をまるくおさめる。たちあがり高にはばらつきがあるが、器形や調整の手法に大きな差異はなく、まとまった時期に所産されたものと見られる。

底部外面の調整は、回転ヘラ切り後に回転ヘラケズリを加えるもの（21・33）、回転ヘラ切り後にナデを加えるもの（28）が見られた。28では底部外面の中央付近に「ノ」字形のヘラ記号がある。口縁部外面から内面にかけては回転ナデで調整している。28・33では、底部内面の中央に不定方向のナデを施す。

高杯は2点出土した。30は杯部のみが遺存する。底部から緩やかな傾斜を持って口縁端部に至る。たちあがりは短く、受部のつくりも鈍磨した印象を受ける。柱状は基部から欠損して、底部外面の痕跡から3方向の透かしが推定される以外に詳細は不明。34は低脚の高杯で、脚部は裾に向かって「ハ」字形に聞く。裾端部付近には焼成時の歪みが見られる。脚中央では円孔が3カ所残存するが、本来は4方向配置と考えられる。

大型器種として、壺・壺が出土した。16は短頸壺で、ソロバン形の体部から口縁部が短く直立する。肩～体部外面にはカキ目を施し、体部の最大径部のみヘラによるナデを加える。37は平底の壺で、底部付近のみが残る。底部外面は粗いヘラケズリ、内面は指押さえの後で粗いナデを加えて整形する。壺の体部と考えられる破片も數点出土しているが、図化できたものは24のみである。帶状に肥厚する口縁部のみが遺存する。外部には緩方向の条線を均等に配置して装飾を施す。

宝珠ツマミを付す形態の杯蓋に対応する時期の遺物も少量ながら出土している。杯蓋は36で、扁平な体部から内側に鋭く折り返して口縁を形成する。頂部ならびにツマミの形状は不明。外器面は焼成で痛み、体部内面

に重ね焼き痕が環状に残る。対応する杯身のうち、35は宝珠ツマミ杯蓋出現時に対応する形態で、扁平な底部から斜め上方に緩やかに湾曲する体部を持つ。口縁端部は丸くおさめる。底部外面にはヘラ切りの痕跡が認められる。体部外面から口縁および内面は同軸ナデ、中央には一方向の仕上げナデを施す。

奈良時代に属する底部に高台を付す杯身（39・40）は、いずれも高台周辺が残るのみで全容に不明な点が多い。38は、直線的に外へ開く口縁付近が残る。復元径に対して器高が高く、楕の可能性が高い。底部の大半は欠損しているため、高台の有無も含めて詳細は不明である。

3. 小結

検出された遺構には堅穴住居、焼土坑がある。堅穴住居はI区の西端部で2棟検出した。いずれも方形住居で、調査区外へと続いており全容は明らかにできなかった。残存状況や同時期の遺物が包含層から出土している状況から、消滅した住居の存在を考慮に入れても、大規模に展開していたとは考えがたい。出土遺物の年代感が近接していることから、ほぼ同時期に営まれたと考えられる。

焼土坑はII区の西端で検出した。底部付近および焼成によって赤化した部分のみが残る。2箇所に分かれて検出されたが、主軸方向や位置関係から本来は同一の遺構と考えられる。状況から小規模な製鉄炉と考えられる。良好な出土遺物は少ないが、古墳時代後期と考えられ、堅穴住居と近い時期に営まれたものであろう。

溝・土坑からも縄文・弥生時代の遺物が出土しているが、幅広い時期の遺物が混在して出土している状況にあり、集落等を推量できる手がかりを得るには至らなかった。ピットは、II区において須恵器の出土した遺構が比較的多く存在するものの、この時期の遺構は把握できなかった。

遺構については以上であるが、次に出土遺物をまとめる以下のとおりである。遺物には縄文土器・弥生土器および古墳時代～奈良時代の須恵器・土師器がある。

縄文土器の残存状態はよくないが、断片的な状況からいずれも晩期の所産と考えられる。弥生時代の遺物も壘の破片がわずかに出土するに過ぎない。

古墳時代の須恵器が、出土量としては最も多い。杯蓋は口縁部と体部の境界をなす稜線が退化して、凹線に変化または消失している。また対応する杯身は口縁端部を丸くおさめ、たちあがり高が低く受け部付近の形態も鋭さを失う特徴から、6世紀末～7世紀初頭の遺物が中心を占めるとみられる。

続く古墳時代末から奈良時代の形態の遺物も出土しているが、数量は少量である。

第3節 中世以降

1. 遺構

中世段階では集落に關わる遺構が多數検出された。検出遺構には掘立柱建物・鍛冶炉・溝・土坑・井戸・石段がある。出土遺物には13～17世紀前半の500年間に渡るものが含まれ、長期間に渡って遺跡が存続したことことが確認された。特に、集落が中世から17世紀段階（江戸時代前期）まで継続して検出された事例は、県内では未だに類例が少なく貴重な成果となった。

また、今回の調査では稠密に柱穴が検出され、遺構の90%以上を占める点が特筆される。検出された柱穴はI区で950基、II区で1,100基余、III区で50基、IV区で800基余りを数え、総計3,000基弱にのぼった。

調査で検出された建物はI区16棟（SB1～16）、II区20棟（SB20～39）、III区0棟（但しI区のSB16は本地区にもまたがる。）、IV区17棟（SB50～66）の総計53棟である。

ただし、今回復元した建物には柱穴の選択に苦慮したものがあり、復元例について妥当性に不安を残すものも含まれる。しかし、建物や集落の構造について検討を行うためには、単なる柱穴群としての扱いでは議論ができないと考え、あえて不安が残る復元例も提示した。なお、建物の記述に際しては長辺を桁行、短辺を梁行とし、面積については単純に行行×梁行として計算している。さらに建物および柱穴の名称については現場作業で用いたものをそのまま踏襲した。また、柱穴名についてはすべてを掲載しておらず、本報告に必要なものに限って名称を付した。

調査区の土層は基本的には耕作土・床土を除去すると黄褐色シルトないし細砂層の遺物包含層（黒褐色シルト質土）が検出され、その直下に黄色シルトないし礫層の遺構面が検出された。調査区の北側では包含層が全くないか存在しても薄く、南側でやや存在する程度であった。やはり昭和59年度に実施された圃場整備による工事の影響が大きく、遺跡の保存状況は良好とはいえないかった。調査区の大半、特に北側2/3は遺構面上の土砂の搅乱が著しい上、遺構面も削平を受けている印象が強い状況である。柱穴などの遺構の深度も浅く、部分的には重機などによる掘削痕跡が確認された。このように、それは単純に包含層の問題のみではなく、遺構面の残存状況にも大きな影響を残していたのである。

平瀬遺跡では昭和58年度に圃場整備事業に伴って断崖接地の調査が行われている。この調査については図版7に調査区と遺構全体図を掲載した。今回の調査と同様多数の柱穴を中心とする遺構が検出された。ただし、圃場整備前の調査であったため包含層が良好で、出土遺物はコンテナ数十箱分におよんだという。この調査についても概要を後述した。

平瀬遺跡周辺は佐用川が開削した狭隘で蛇行する谷地形の河岸に位置する。川は遺跡の東側で北側から大きく蛇行して流れ、遺跡付近で西流し、円光寺集落を大きく廻りながら流れている。調査地点周辺は西流する流れの北側にあたり攻撃面の対岸に位置する。このため多少流れは緩やかな場所に立地しているといえる。

地形を観察した結果、遺跡が所在する平地は河川が形成したポイントバーが東西方向に何列か並行して堆積し、最終的に全体が平地化した地形であった。このため微高地間に小さな谷状の地形もしくは窪地が残されたようである。SD1～3などの平行した溝は、この地形に人為的な加工を加えて排水を目的に掘削されたものである。遺跡周辺は河床から0.5～0.7m前後の高低差しかなく、河川増水時には洪水による灾害を免れることはできなかったと推定される。このため、溝を利用した排水は切実な問題であっただろう。

I 区の遺構

遺跡の西側にあたる地区である。北側の山裾に当たり、調査区の北側からは緩やかに登る地形となり、現集落背後で片木山への傾斜変換点となる。調査区はほぼ平坦地であるが、東から西南にむけてやや下る傾斜地形となる。調査の結果、柱穴を中心とする遺構が稠密に検出された。復元できた掘立柱建物は16棟であるが、他に多くの柱穴が検出されたため、実際にはかなりの数の建物が存在したと思われる。

建物に関係しない柱穴から出土した遺物にはP294土師器中皿(50)、P432土師器中皿(53)、P355青磁碗(54)、P420須恵器鉢(55)、P4備前焼擂鉢(57)、P370備前焼擂鉢(56)がある。

掘立柱建物

S B 1・2 (図版12、写真図版9)

S B 1・2はI区の北東隅で重複して検出された建物である。P29の柱穴の切り合いからS B 2がS B 1よりも新しい。西側にS B 3、南側にS B 13が接続して並ぶ。

S B 1・2の2棟は純柱構造となり、調査区北外側へさらに伸びる可能性がある。S B 1は南北3間以上、東西4間、建物寸法は南北5.2m以上、東西6.8mを測る。S B 2は南北3間以上、東西4間で、建物寸法は南北5.8m以上、東西8.3mがそれぞれ検出された。柱並びや柱間はやや不規則で、柱穴は平面円形ないし梢円形のものが多く直径30~60cmのものまでさまざまである。

遺物はS B 1 P29から土師器小皿(41)、S B 2 P56から須恵器鉢(42)、同じくP107から土鍤(43)が出土した。42は14世紀前後のものであるが、建物内から検出(並びには聞わない)されたP 4からは16世紀代の備前焼擂鉢(57)が出土している。そして、P29・52など本建物周囲の柱穴には複数の柱穴が重なるものが目立つことから、1回の建替えに止まらず、複数回の建替えが行われた可能性がある。これらのことから考えると、建物は14世紀頃から、井戸S E 1(15~16世紀)と同一時期まで存在した可能性があり、おそらく建替えは継続して行われ、長期間にわたってこの場所に屋敷が維持されたのである。このような傾向は本集落の建物には顕著である。

S B 3 (図版12、写真図版9)

S B 1・2の西側に並んで検出された建物で、さらに西側にはS B 14が建つ。身舎の範囲は桁行4間、梁行2間で東と南北面には庇が付く。建物寸法は身舎で桁行8.6m、梁行5.4m、庇を含めると桁行9.5m、梁行7.3mを測る。東西棟で身舎内側に東柱が並ぶため純柱構造となる。南北の庇面は柱並びが不均等であるが密な間隔で柱痕跡が残る。柱穴はおおむね平面円形で直径30~40cm前後のものが大半を占める。遺物はP206から出土した土鍤(44)がある。

S B 4 (図版13、写真図版10)

III区の道路に面して建てられた建物である。南北棟で純柱構造となる、本遺跡では中規模の建物で、桁行4間、梁行4間となる。建物寸法は桁行7.7m、梁行6.5mを測る。平面形状は南北側にやや長い構造となり、柱並びは良好であるが、柱間は最長1.3~2.7mと狭長の差が大きいため、東西辺の方が短くなる。柱穴はおおむね平面円形で直径30~40cm前後のものが大半を占めるが、P518は長軸長が70cmと大型になり、平面形状も梢円形で他のものと異なる。

S B 5・6 (図版14、写真図版10)

I区中央で検出された建物で主屋S B 5に付属する建物としてS B 6が西側に建つ。2棟で1つの屋敷を構成したものと考えられる。S B 5は東西棟で中抜けの純柱建物、規模は桁行5間、梁行3間で、建物寸法は桁行8.3m、梁行6.0mを測る。S B 6は南北棟で桁行4間、梁行2間、建物寸法は桁行6.2m、梁行2.9mを測る。

S B 5は中央2間分の東柱を欠く。全体に西側がやや直な平面形をもち、柱並びも少し不均等である。S B 6についても平面形が北側に開き、柱並びも不均等な印象を持つ。柱穴平面は直径15~40cm前後で円形のものが多い。遺物はS B 5のP300から出土した土錐(45)がある。

S B 7 (図版14、写真図版10)

S B 4・5・11に重なって検出された建物で、東西棟の御柱建物である。S B 5・6との前後関係はS B 5のP297がS B 7の柱穴を切るためにS B 5が新しく、S B 7のはうが古い。建物の規模は桁行4間、梁行2ないし3間で、建物寸法は桁行8.1m、梁行6.4mを測る。平面形はほぼ長方形となるが、柱並びはやや不均等である。柱穴は平面円形で、直径は15~50cmを測る。遺物はP494から出土した土師器小皿(46)がある。

S B 8 (図版4、写真図版10)

調査区中央西隅で検出された御柱建物で、棟方向が大きく傾く。本遺跡ではおおむねⅢ区道路方向に沿う建物が多いが、特異な存在である。規模は桁行2間、梁行1間で、建物寸法は桁行4.5m、梁行3.0mである。柱間は桁行側が2.1~2.3m、梁行側が3.0mと狭長の幅が大きい。遺物はP455から出土した土師器中皿(47)がある。

S B 9 (図版15、写真図版10)

I区の南側で検出され、東側はⅢ区(道路)に面し、南側にはS B 10が建つ。南西隅は調査区外に伸びる。規模は桁行3間・梁行2間で東・北面に庇が付く。棟方向は東西棟となり、総柱構造である。建物寸法は桁行で7.5m、梁行で5.6m(庇を含む)を測る。柱穴はおおむね平面円形で直径30~40cm前後のものが大半を占める。大半の柱穴で柱芯が検出できた。柱芯の観察から柱の直径は10~15cm程度と推定される。

遺物はP649から出土した土師器羽釜(48)がある。

S B 10 (図版15・写真図版9・10)

I区の南端で検出された建物で、東側はⅣ区(道路)に面し、北側にはS B 9が建つ。さらに、西辺は調査区外に伸びる。規模は桁行3間以上・梁行2間で南面に庇が付く。東西棟で身舎内側に東柱が並ぶため総柱構造となるが、北辺の柱穴1基が検出できなかった。建物寸法は桁行7.0m、梁行6.6m(庇を含む)を測り、庇の柱間は1.6mである。柱穴はおおむね円形で直径50~60cm前後のものが大半を占める。柱芯は北西隅の柱穴を除いて検出できた。柱芯の観察から柱の直径は15~18cm前後と推定される。

S B 11 (図版13)

I区の中央で検出された建物である。建物の棟方向は東西棟で、S B 1・2と同じく東辺をⅢ区の道路に面する建物である。建物の規模は桁行5間・梁行2間で、建物寸法は桁行9.9m、梁行6.1mである。西辺の中央と北辺の2辺は柱穴の残りが悪く、柱穴が大きく削平された可能性がある。

柱並びや柱間の間隔はおおむね良好であるが、梁行の柱間が2.9mと他の建物に比べ広いのが特徴である。柱穴は円形で直径20~45cm前後のものが多い。遺物はP599から出土した釘(M3)がある。

S B 12・13 (S B 12 図版4、S B 13 図版16)

調査区中央、東寄りで見つかった建物で、S B 12は建物寸法が桁行4.6m(東西辺)、梁行3.9m(南北辺)とわずかではあるが東西方向が長い。このため、本報告では長辺を東西方向とし東西棟とした。S B 13は東西棟で南辺に庇を持つ。身舎の規模は桁行3間・梁行2間で、建物寸法は桁行7.0m、梁行7.0m(庇を含む)を測る。庇は南辺東側が半間分短くなる構造である。南辺の身舎との柱間建物寸法は1.5mを測る。遺物はS B 13のP369から出土した土師器小皿(49)がある。13世紀頃の製品である。

S B 1 4 (図版4)

調査区西北隅で見つかった建物である。規模は南北2間以上、東西2間で、建物寸法は南北7.2m、東西7.0mを測る。内部に焼土痕跡が確認された。遺物はP191から出土した土師器中皿(51)がある。遺物からする建物の時期は14~15世紀頃と考えられる。

S B 1 5 (図版4)

調査区北端で検出された、東西2間、南北1間分がある。建物寸法は東西3.6m以上、南北1.3mである。

S B 1 6 (図版4)

唯一、I・Ⅲ区にまたがって検出された建物である。東西棟で側柱構造となり、S B 8と同じく他の建物と大きく異なる方向をもつ。規模は桁行4間、梁行2ないし3間で、建物寸法は桁行8m、梁行4.8m、を測る。

井戸

S E 1 (図版16、写真図版13)

調査区の北側で検出された井戸で、石組み構造を持つ。掘方は平面円形で直径1.2m、深さ40cmである。非常に浅く掘削されるもので、掘前面は下層の礫層までは及んでいない。石組みは乱雑に積まれ、使用された石材も大小さまざまである。ただし、後世の破壊も影響して石組みの旧状は不明確である。内部からは備前焼捲鉢片などが出土した。細片のため図示できなかったが、田土を使用し発色も赤褐色の独特のもので、中世5・6期前後の製品である。このため、遺構の時期は15~16世紀と考えられる。

土坑

S K 3 8 0 (図版16、写真図版13)

調査区西端で検出された土坑で、平面円形、直径0.9m、深さ0.19mを測る。中層及び壁際で焼土痕跡を顯著に残し、内部には炭を大量に含んでいた。II区SK1・2同様、鍛冶関係の土坑の可能性がある。

溝

S D 1 ~ 5 (図版17・18、写真図版12)

I・Ⅲ・Ⅱ区を横断して流れる溝SD1~3は、東西方向に平行して検出された。溝の方向はほぼ河川に沿うものである。遺跡の立地する微高地背後の後背地を利用しながら掘削されたもので、西側では形状が明確ではなくなる。

溝のうちSD1・3は圃場整備時の調査区につながる。SD1は幅1.5m、深さ0.3m前後のもので、I区の西側で連れなくなる。途中SE1に切られ、掘立柱建物より古い。SD3は幅3m前後、深さ0.5m(II・Ⅲ区では幅2.2m、深さ0.45m)である。東側は人工的に掘削された痕跡が明瞭に検出されたが、西側では浅くなり人工的な溝というよりは自然流路に近い形状となる。これに比べSD2は小規模で幅1~1.5m、深さ0.2m前後である。ただし、SD2はII・Ⅲ区側ではSD1はSD3と重なってしまう。遺物はSD1から瓦質土器壺(52)が出土した。

このほか、溝ではSD4・5がある。SD4はⅢ区で直角に曲がり南側に向かって下る。I区側では幅0.8~1.2m、深さ0.2m前後である。IV区側では深さは0.2m前後であるが、幅が2m前後と広くなる。ただし、南側では0.6~0.8mと幅が狭くなっている。SD5はSD4に切られる溝で両溝とも西端はSH2を切っている。SD5は東側では、さらにII区を横断してのびている。幅1~1.3m前後で深さは0.1~0.2m前後である。断面はU字形で形状はおおむね一定である。人為的に掘削された痕跡が観察される。

II区の遺構

今回の調査地点の中央に位置する。北東側は昭和59年に行われた圃場整備時の調査区に隣接し、南側は佐用川の河床に接している。IV区の状況と、本地区南側の断ち割り調査の状況から、河床との境には約50~70cm前後の崖地形が形成されることが判明した。ただし、本地区調査時にはこの崖地形を全体的に検出していなかったため、詳細については不明とせざるをえない。しかし、状況からすると図版3のように東側から西側に向かってやや北側に入り込むような形で河床と集落の境界が存在するものと推測される。

II区で検出された遺構には柱穴・溝・土坑・鍛冶土坑などがある。また、掘立柱建物は20棟が検出され長期間継続して集落が営まれたことが明らかとなった。

建物に復元できなかったもので、柱穴から出土した遺物は以下の通りである。P10土錘(91)、P195備前焼壺(102)、P248白磁小杯(99)、P280瓦質土器羽釜(89)、P338土師器小皿(81)、P483須恵器碗(97)、P544土師器小皿(87)、P538土師器小皿(86)・土錘(96)、P589志野焼碗(98)、P798土師器中皿(90)、P834土師器杯(88)、P853土錘(94)、P896土錘(95)がある。この他、護岸周辺から出土した遺物群として103~127の25点がある。

掘立柱建物

S B 2 0 (図版19、写真図版15・19)

調査区の北側で検出され、S B 21と重なる。構造は総柱建物で、東西棟となる。面積は 78.4m^2 を測り、平瀬遺跡で検出された建物の中では比較的大型である。

規模は桁行5間、梁行3間で、建物寸法は桁行10.9m、梁行8.0m（庇を含む）を測る。南辺の東側3間分はさらに1間南側に延びる構造となるが、柱間が1間分（1.9m前後）となる。このためこの部分は庇よりは身舎の一部と判断するほうが妥当と思われる。ただし、西側の柱穴の遺存状況が悪いため、南辺西側の柱穴が削平された可能性も考えられる。柱穴は平面円形のものが主流で直径50~70cm台となる。柱間は桁行2.1~2.65m、梁行1.8~2.4mとなる。桁行の柱間がやや広いことと、桁行中央の柱間が広くなることが特徴的である。出土遺物はP231から土師器小皿(80)、P1001から備前焼碗(67)、P180から土錘(68)が出土している。備前焼碗は焼成や器種から16世紀代のものと推定されるため、建物の時期もこの頃であろう。

S B 2 1 (図版24、写真図版15)

調査区北側で検出されたもので、面積 74.4m^2 を測る大型の建物である。基本的に総柱構造と思われるが北西側が削平のため、柱穴の詳細がわからない。S B 20と同規模で重なることから、前後関係は不明であるが建替えと推定され、屋敷の主屋として建った建物であろう。

南辺がやや歪であるがその他はほぼ整った柱配置となる。建物は南北棟で、規模は基本的に桁行4間、梁行4間で、建物寸法は桁行9.0m（西辺）、梁行8.5mを測る。柱間は桁行が1.75~3.0m、梁行が1.95~2.4mを測る。柱穴は他の建物に比べやや大型のものが多く、平面は円形ないし梢円形で、直径50~70cmのものが多い。

S B 2 2 (図版23、写真図版15)

調査区中ほどで検出された東西棟で規模は桁行3間、梁行3間となる。建物寸法は桁行6.8m、梁行6.0mを測る。柱間は桁行が1.7~3.0m、梁行が1.35~2.4mを測る。北側の東柱は検出されたが、南側は東柱が検出されなかつた。柱並びは比較的良好であるが、柱間隔はやや不揃いである。重なり合う柱穴が多いことから建替えが1回以上行われたと推定される。出土遺物はP419から出土した備前焼擂鉢(101)、P268から出土した土錘(73)がある。

S B 2 3 (図版19)

調査区中央付近で検出された東西棟で、S B 20・22・26に重なって検出された。S B 22のP 416がP 417を切るため、本建物はS B 22より古い。面積58.3m²を測る比較的大型の建物である。

規模は桁行5間、梁行3間で、建物寸法は桁行10.8m、梁行5.4mを測る。基本的に側柱建物であるが部分的に東柱をもつ。柱穴はやや小ぶりで直径20~40cmで円形を呈する。柱並びは比較的整っている。しかし、柱間は桁行1.8~2.9m、梁行1.6~1.95mと狭長の差がある。P 418から須恵器椀(72)が出土した。

S B 2 4 (図版22、写真図版20)

調査区の北東隅で部分的に検出された。このため規模や詳細は不明であるが、総柱構造の建物になる可能性が大きい。検出範囲は南北3間、東西3間分である。検出範囲での建物寸法は南北7.0m、東西6.0mを測る。柱間は南北が2.1~2.5m、東西が1.5~2.3mを測る。ただし、西辺の1間分は柱間が1.5mと短いため、庇になる可能性があるが、詳細が不明であるため結論できなかった。今回は一応身舎に含めて報告した。

なお、この建物の側通りには多くの柱穴が並ぶ、復元ではどれを本建物のものとするか判別が難しい。遺物はP 456から出土した釘(M 2)がある。この他、復元では採用しなかったが、建物西辺の並びにあるP 1006からは土錐(74)が出土した。

S B 2 5 (図版21、写真図版17・20)

調査区の中央で検出された総柱構造の南北棟である。北辺のP 669がS B 26のP 668に切られ、検出状況からP 599がS B 35のP 600の上面で検出された。このため、本建物はS B 26より古く、S B 35より新しい。

建物の規模は桁行5間、梁行3間で、西辺には北から3間分の庇(庇幅1.2m)が付く。建物寸法は桁行10m、梁行7.6m(庇を含む)を測る。柱間は桁行1.65~2.5m、梁行1.55~2.15mとなり、南側に柱間が広がる構造となる。桁行北側の2間分の範囲は柱並びや柱間隔は比較的整っているが、南側はやや歪になる。全体的に北側と南側で大きく構造が異なる。このため南側は河川に向かって建つ簡易な建物であったと思われる。出土遺物にはP 599の備前焼壺(69)・土錐(92)、P 641の土師器壺(71)がある。さらに、建物南側のSK 640からは土師器小皿(85)・土錐(93)が出土した。遺物からすると69が15~16世紀のものであるため、建物の時期はこの頃と考えられる。

S B 2 6 (図版23)

調査区中央寄りで検出された総柱建物で、南北棟である。東辺のP 668がS B 25のP 669を切る。このため本建物はS B 25より新しい。

建物の規模は桁行5間、梁行2附で、建物寸法は桁行8.7m、梁行3.8mである。柱間は桁行1.6~3.0m、梁行1.7~2.85mを測る。平面構造が細長い建物である。桁行の北側がやや柱間が広くなるがその他は、ほぼ整っている。柱並びも雑な印象はない。建物北側には内部に土坑SK 3・4とこれを方形に埋む柱穴(P 399・888・427・1050)が検出された。建物の構造や、これらの状況からすると工房的な建物であった可能性が高い。

遺物はP 531から土師器小皿(84)・備前焼鉢(100)、SK 4から土師器小皿(66)が出土している。

S B 2 7 (図版23、写真図版21)

調査区南よりの東端で見つかった建物で、東辺はIV区側に延びる。建物の棟方向は東西を軸にもつ。規模は桁行4間、梁行4間で、建物寸法は桁行8.9m、梁行7.4mを測る。柱間は桁行1.9~2.3m、梁行1.5~2.0mを測る。東西にやや長い建物であるが、方形に近い平面形状をもつ。身舎の東側と南側に東柱が検出されたが、西辺は削平のためか柱穴の残存状況が悪いので、詳細は不明である。基本的に総柱建物であった可能性が高い。

S B 2 8 (図版22)

調査区の北東隅で検出された東西建物で、S B24に重なって検出され、東側はIV区側に伸びる。南西隅のP479はS B32のP480を切る。このため本建物はS B32より新しい。桁行3間、梁行2間分が検出されたが、さらに調査区外へと続くため桁行きの規模は不明である。検出された範囲での建物寸法は桁行6.9m、梁行6mを測る。柱間は桁行1.8~2.3m、梁行2.8~3.0mを測る。

S B 2 9 (図版20、写真図版21)

調査区南東端、河川際で検出された総柱建物で南北棟である。建物規模は桁行3間、梁行2間で、桁行5.7m、梁行3.1mを測る。柱並びや柱間は比較的良好であるが、小型の建物である。柱間は桁行1.6~2m、梁行1.4~1.6mである。西辺のP695はS B31の柱穴と重なるが、柱の形状からS B29の柱穴と推定したが確実ではない。同一場所での掘削のために痕跡が残らなかったと考えられる。

S B 3 0 (図版20、写真図版18)

調査区南東端で検出された総柱建物で、南北棟である。東辺のP562がS B27のP563を切る。建物の規模は桁行3間、梁行2間で、建物寸法は桁行6.1m、梁行3.9mを測る。柱並びや柱間は比較的良好であるが、S B29と同じく小型の建物である。柱間は桁行1.7~2.25m、梁行1.8~2.05mを測る。

S B 3 1 (図版20、写真図版18)

調査区中央東寄りの河川際で検出された建物である。基本的に東西棟で総柱建物である。規模は桁行3間、梁行2間であるが、南辺に部分的な庇が張り出し、平面L字形を呈する建物である。建物寸法は桁行5.1m、梁行3.0mで、庇が南北1.2m、東西2.9mを測る。小型の建物で、平面形が歪で柱並びも不揃いであることから、簡素な構造の建物と推測される。P695についてはS B29のとおりである。

S B 3 2 (図版22)

調査区の東端で検出された廻柱建物である。南北棟で建物の規模は桁行4間、梁行2間で、建物寸法は桁行9.1m、梁行4.9mを測る。柱並びは比較的整っているが、桁行の柱間はやや不揃いとなる。北辺妻側の柱が検出されなかつたが、S B28の南辺と重なるため柱穴の遺存状態が悪いことが原因であろう。西辺の隅柱P480はS B28南西隅のP479に切られる。このためこの建物はS B28よりも古い建物である。柱穴は平面円形で直径30~50cm前後でやや小型のものが多い。柱間は桁行1.5~2.6m、梁行2~2.8mを測る。

遺物はP574の土師器小皿(75)・須恵器碗(76)・中国産の白磁皿(78)がある。これらの白磁皿や土師器小皿からすると、遣構の時期は14世紀頃に比定される。

S B 3 3 (図版20、写真図版22)

S B31と同様の構造を持つ建物であるが、やや大型となる。基本的に東西棟で総柱建物である。規模は桁行3間、梁行2間であるが、南辺に庇が張り出し、平面L字形を呈する建物である。建物寸法は桁行5.4m、梁行2.7mで、庇が南北2.2m、東西4.1mを測る。小型の建物であるが、平面形がやや歪で柱並びも不揃いであることから、雑な構造の建物と推測される。S B31に共通する建物である。

出土遺物は建物を構成する柱穴ではないが、おそらく本建物に関係すると思われるP753から出土した備前焼擂鉢(79)がある。これから遣構の時期は16世紀後半に比定される。

S B 3 4 (図版21、写真図版17・22)

調査区の中央南寄りで検出された。河岸に面した位置に建つ。総柱建物で、東西棟になる。建物の規模は桁行2間、梁行2間で、建物寸法は桁行6.1m、梁行3.6mと小規模なものである。柱並びなどは比較的整っているが柱穴は直径30cm前後と小型のものである。柱間は桁行2.9~3.2m、東西1.6~2mを測る。

出土遺物はP521土錐（77）、P527土師器小皿（82・83）がある。

S B 3 5（図版21）

調査区の南端で検出された側柱建物である。棟の方向は南北棟である。西側の柱並びが歪む。建物の南西側は河川による流失のため詳細は不明である。規模は桁行3間、梁行2間で、建物寸法は桁行5.9m、梁行3.2mを測る。柱間は桁行1.5~2.0m、梁行1.8~2.0mである。柱の並びは比較的整っているが、柱穴は直径30cm前後と小型のものが多い。出土遺物はP600の土錐（70）がある。

S B 3 6（図版24）

調査区の北端で検出された総柱建物でS B 37・38と重なって検出された。面積80m²を測る本遺跡最大の建物であるが、北東隅の一部が調査区外に延びる。東西棟で、一部は調査区東側に延びている。S B 37・38を含め本建物はⅢ区に面して建てられた建物で、西側のI区S B 4・13などに面するものと考えられる。規模は桁行4間、梁行4間で、建物寸法は桁行10.0m、梁行8.0mを測る。溝S D 3が埋没後構築された建物で、溝の上に柱穴P 27・35・39が掘削される。

側柱の通りは比較的整っているが、東柱はやや不揃いである。また、上面の削平が著しいためか柱穴の深さは検出面から20cm前後と浅い。柱穴は直径40~60cm前後で平面円形のものが多い。柱間は桁行1.8~2.2m、梁行1.9~2.0mを測る。

S B 3 7（図版5）

S B 36と同じくさらに東側に延びるが、S B 36より少し北に移動して建てられる。大半が調査区の外側に伸びるため全容は不明である。ただし、柱間の状況からすると東西棟の可能性が大きい。西側は東柱が検出されているため総柱構造になる可能性が高い。P 36・P 29はS D 2の上に掘削される。

検出範囲での規模は南北3間以上、東西4間以上で、建物寸法は南北6.0m、東西7.6mを測る。柱間は南北1.8~2.0m、東西1.9~2.0mを測る。

S B 3 8（図版5）

S B 36・37と同じくⅢ区の道路に面した建物と思われるが、道路から7m控えた位置に建つ。この空間は柱穴が稠密に分布することからると本建物がさらに西側に延びるか、もしくは別棟が建っていた可能性が大きい。西側に延びるため結論はできないが、本建物は柱間の間隔からすると東西方向に軸を持つ構造である可能性が高い。検出範囲での規模は南北3間以上、東西3間以上で、建物寸法は南北6.0m、東西9.0m以上を測る。柱間は南北1.7~2.0m、東西2.0~3.0mを測る。

S B 3 9（図版5）

S B 29と同じく、やや東に振れる方向に建つ南北棟である。側柱構造であるがP 704は本建物の東柱を構成する可能性もある。Ⅳ区側のS B 60・61と同じく川に面して建つ建物と考えられる。

建物の規模は桁行3間、梁行2間で、建物寸法は桁行5.6m、東西3.7mを測る。柱間は桁行1.5~2.5m、梁行1.5~2.2mを測る。

銀冶炉

S K 1（図版25、写真図版24）

II区で検出された土坑で、平面円形の銀冶炉である。壁面にはわずかに焼土痕跡が確認され検出面付近には炭層が検出された。

規模は直径0.69m、深さ0.19mである。炉の断面形はU字形で底部は水平に掘削される。特徴的なのは炉の縁に小規模な突起状の痕跡が2箇所あることである。長さ5~6cmほどのもので、内部の埋土には炭が少量混

じっていた。出土した遺物には備前焼壺（64）がある。16世紀代のものである。

S K 2（図版25、写真図版25）

II区で検出された土坑で、平面は長楕円形の鍛冶炉である。壁面にはわずかに焼土痕跡が確認され、検出面付近には炭層が検出された。規模は長さ1.05m、幅0.6m、深さ0.29mを測る。遺物は中国産青磁皿（65）が出土した。16世紀代のものである。

護岸遺構（図版3・5）

II区南端ではIV区同様、崖状地形が形成されていたことが、調査最終段階での断ち割り調査で明らかになった。

河床との段差は0.8m前後を測る。護岸周辺から河床側には砂が厚く堆積するが、崖状地形の壁面周辺には疊混じりの土砂が堆積していた。この土砂に混入して遺物が出土したため、護岸裏込めとして報告した。

この護岸裏込めから出土したものはII区から出土した遺物の3割を占める。瓦質土器羽釜（103）・須恵器甕（106）・備前焼鉢（105・107・108）・同壺（109～116）・同甕（117～127）・中国産天目碗（104）がある。

III区の遺構

I・II区の間の農道部分の調査区である。検出面の高さは北側で72.6m、南側で72.1mと南側に向かって傾斜する地形である。検出面は大半が黄色シルトの安定した基盤層であるが南側では疊混じりないし、砂混り層となり安定した表土層は検出できなくなり、遺構も確認できない。このため、南側は河床の影響を受けて不安定な場所となる。おそらく調査区の南側ではそのまま河床に繋がっていると思われる。

調査区周囲には密集する柱穴群が確認されたが、他の調査区に比べ本調査区では希薄である。検出された遺構は柱穴・溝などがある。また、本地区で復元できた建物にはSB16があるが中心はI区側（詳細はI区）で、当地区にかかる部分は建物東側の一部にすぎない。

溝は北側でSD1～3が検出された。規模はI・II区と同じである。このほか、溝SD4があるがI区で東西方向に流れるこの溝は、当地区で屈曲し南側、つまり佐用川方向へ流下する。流末は末広がりとなり、溝の形状をなさない。SD4からは釘（M5）が出土している。

なお、遺構の密度が希薄で、建物がほとんど建たず、I・II区間に本地区に面して掘立柱建物が並ぶ状況からすると、本地区は道路であったと評価される。この道路は南側の円光寺集落を通る旧道に通じており、かつての円光寺地区の中心道であったと推定される。さらに、調査区から北側の片木山中腹には大日庵が建つが、この道路はその小堂へと通じている。道路幅は4m前後で、長さ30mに渡って検出した。

IV区の遺構

今回の調査区の東端に当たる。II区と同じく南側は佐用川の河床に接し、河床との境には約1m前後の崖地形が形成される。調査範囲は東側が斜辺となる三角形状の地区である。

検出された遺構には柱穴・溝・土坑などがある。この調査区においても掘立柱建物17棟が検出され、長期間継続して集落が営まれたことが明らかとなった。本調査区で興味がもたれるのは、この河床に降りるために石段が見つかったことである。立地やこのような遺構の発見は、本集落が川津としての性格を持つことを表している。

IV区の建物に関係しない柱穴からの出土遺物はP23土師器中皿（166）・土錐（177）、P34石臼（S1）、P43須恵器甕（170）、P96須恵器小皿（169）、P118釘（M9）、P149瓦質土器壠（171）・土錐（179）、P157土

師器中皿（165）、P165土師器杯（167）がある。

据立柱建物

S B 5 0（図版27、写真図版31）

調査区の中ほど北側で検出された建物で、東側にさらに延びる。このため建物構造の詳細を知ることはできなかった。建物の規模は南北3間以上、東西4間以上で、建物寸法は桁行7.6m以上、梁行5.0m以上を測る。南側は基本的に東柱を伴うが、北側では確認できなかった。

建物の全体像は不明な部分が多いが南辺の柱並びが密である一方で、西辺の柱間が3m前後あるなど特徴的である。県内の中世遺跡では類例が乏しい遺構である。西辺の柱間は2.5~2.65mと広いが、南辺は1.1~1.5mと狭い。東柱のうちP104は直径0.6m、深さ0.4mと他の柱穴に比べ突出している。さらに、柱穴の深さも東辺が深いなどの構造をもつ建物である。遺物はP256から出土した唐津焼皿（155）がある。これから本建物の時期は17世紀に下ることが確認された。

S B 5 1（図版26）

調査区の北端で検出された總柱建物で、東側が調査区外に伸びることから、東西棟と判断した。S B52・53・54・55・63と重なって検出された。周辺は柱穴が稠密に錯綜するため、さらに多くの建物が存在するとと思われる。

検出された建物の規模は桁行3間以上、梁行2間以上で、南辺に庇が付く。建物寸法は桁行4.7m以上、梁行4.2m（庇を含む）以上である。柱穴は平面円形ないし不定形を呈し直徑25~40cm前後、柱間は南北1.0~1.7m、東西1.4~1.8mを測る。なお、本建物は部分検出のため、建物の軸方向の詳細は不明である。遺物はP251から出土した土錐（156）がある。

S B 5 2（図版28）

調査区の北端で検出された總柱建物であるが、さらに西側にのびるため、棟方位などの詳細は不明である。P41がS B53の北西隅の柱穴に切られる。このため本建物はS B53より古い。建物の規模は南北3間、東西3間以上で、建物寸法は南北4.8m、東西5.0m以上である。柱間は南北1.5~2.0m、東西1.5~1.8mで比較的狭いものが多い。

S B 5 3（図版26、写真図版30）

調査区の北端で検出された側柱建物である。北西隅の柱穴がS B52のP41を切る。このため本建物はS B52より新しい。南北棟で建物の規模は桁行3間（西辺は4間）、梁行2間（北辺は3間）で、建物寸法は桁行4.9m、梁行4.1mを測る。平面長方形の小型建物であるが、柱並びや柱間は比較的整うものの、南側の梁行の並びが悪い。柱穴は直徑20~40cm前後でおおむね平面円形のものが占めている。柱間は桁行1.2~1.7m、梁行1.1~1.9mを測る。遺物はP66から唐津焼碗（158）が出土した。

S B 5 4（図版28、写真図版30）

調査区の北寄りで検出された側柱建物で南北棟となる。北側でS B53・55、南側でS B56・57・59と重なる。また、P304がS B51のP254を切る。このため本建物はS B52より新しい。他に柱穴の切り合いからS B56より古い建物である。

建物の規模は桁行4間、梁行2間で、西辺の北側2間分に庇が付く。建物寸法は桁行8.5m、梁行4.1mを測る。庇は西辺から柱間1.5m張り出し、北側から2間分3.9mの長さがある。平面長方形の小型建物である。柱間は桁行1.9~2.4m、梁行1.9~2.2mを測る。

S B 5 5 (図版26、写真図版30)

調査区の北側で検出された偶柱建物である。南西隅のP52がⅡ区S B27の柱穴を切る、P38がS B52の東柱を切る。このためⅡ区S B27・S B52より本建物は新しい。

建物の規模は桁行3間、梁行3間で、建物寸法は南北4.9m、東西4.7mを測る。平面形が方形となるため、棟の軸方向は不明確である。全体に東辺の柱穴の残りが悪いことや、柱穴や土坑との切り合いが激しいため、復元案が妥当でない可能性もある。柱間は桁行1.2~1.8m、梁行1.2~1.7mを測る。

S B 5 6 (図版27、写真図版30)

調査区中ほどで検出された東西棟で総柱構造となる。P303がS B54のP302を、南辺のP84がS B58の北辺の柱穴を、南西隅P79がS B57のP80をそれぞれ切る。このため本建物はS B54・58・57より新しい。また、S B57・59と重なるが、規模から見ると、これらの建物とは建替えの関係にあると見られる。

建物の規模は桁行3間、梁行3間で、建物寸法は桁行5.8m、梁行5.1mを測る。桁行中央の柱間が2.1~2.5mと長いことなど、柱並びや柱間は歪で、全体に雑な印象の構造である。柱穴は平面円形で直径20~40cmを測る。柱間は桁行1.5~2.5m、梁行1.2~2.0mを測る。遺物はP168の唐津焼碗(162)・P69の土鉢(157)がある。

S B 5 7 (図版28、写真図版30)

調査区の中ほどで検出された側柱建物で、南北棟となる。P80がS B56のP79に切られる。このため本建物はS B56より古い。建物の規模は桁行3間、梁行3間(歪なため詳細は不明)で、建物寸法は桁行5.6m、梁行4.6mを測る。ただし北辺は隣柱以外には検出できず、南辺についても柱位置がやや疑わしい。建物の平面は基本的に長方形であるが、梁行きの長さは南辺が大きくやや歪な平面構造を持つ。柱間は桁行1.1~2m、梁行は不明である。

S B 5 8 (図版29、写真図版30)

調査区南西端で検出された偶柱建物で、南北棟である。北辺の柱穴がS B57のP84に切られる。このため本建物はS B57より古い。川に面して建つ建物でS B61・62と重なって見つかった。これらの建物は建て替えと推定される。建物の規模は桁行4間、梁行2間で、建物寸法は桁行6.5m、梁行3.9mを測る。平面長方形であるが、削平のためか一部柱穴が不明確な部分がある。桁行は柱間が0.9~2.2m、梁行1.9~2mと南側がやや広くなる。遺物にはP87から備前焼擂鉢(159)が出土した。これからすると、建物の時期は16世紀後半となる。

S B 5 9 (図版28、写真図版30)

調査区の中ほどで検出された側柱構造の南北棟になる建物である。なお、南辺のP84は並びから見るとS B57とどちらにも復元可能である。建物の規模は桁行3ないし4間(西辺は3間)、梁行3間で、建物寸法は桁行5.2m、梁行4.2mである。ただし、復元案の建物としたが、柱穴が稠密に重なるため正確かどうかについては不安も残る。さらに、東柱の存在については柱穴の密集度から明確に出来なかった。柱間は基本的に1.2~1.3m前後であるが、西辺はやや揃いが悪く狭長の差が大きい。

S B 6 0 (図版29、写真図版29)

調査区南西側で検出された側柱建物で、東西棟になる。P301がS B62のP131より古ないと判断される。建物の規模は桁行3間、梁行2間で、建物寸法は桁行6.0m、梁行4.5mを測る。平面長方形であるが、削平のためか一部柱穴が不明確な部分がある。柱間は桁行1.8~2.2m、梁行1.8~2.6mとなる。

S B 6 1 (図版29、写真図版29)

調査区南西隅で検出された側柱建物で南北棟となる。建物の規模は桁行4間、梁行2間で、建物寸法は桁行7.2m、梁行3.9mを測る。

柱間は桁行1.6~2.3m、梁行1.6~2.2mである。削平のため南側の柱並びや柱穴の状況がやや不明確であるが、いずれにしても簡素な建物である。

S B 6 2 (図版29、写真図版29)

調査区の南西隅で検出された側柱建物である。西辺隅のP125がS B61の柱穴に切られる。このため本建物はS B61より古い。川岸に隣接して建てられたもので南北棟となる。建物の規模は桁行3間、梁行2間で、建物寸法は桁行4.8m、梁行3.1mを測る。平面長方形で、小型の建物である。柱間は桁行1.4~1.7m、梁行1.5~1.6mと短い。柱穴は平面梢円形で内側に小さく膨らみ、瓢箪型になるものが多い。規模は直径50~70cm前後と比較的大型のものである。このほか、遺物はP120の染付椀(161)がある。この時期からすると建物の時期は16世紀後半となる。

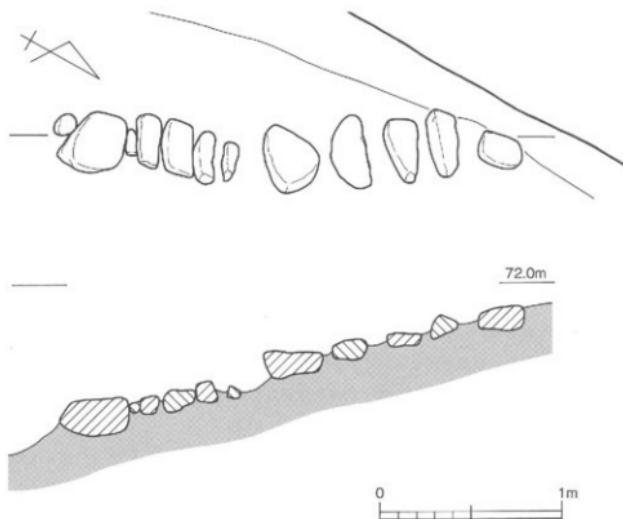
S B 6 3 (図版6、写真図版29)

調査区の北端で検出された側柱建物で、西側はⅡ区に伸びる。建物の方向は東西棟で、規模は桁行4間以上、梁行2間である。ただし、北東隅は調査区外になるため全体は検出できなかった。建物寸法は桁行7.7m以上、梁行3.6mを測る。平面長方形の小型建物である。柱間は桁行1.4~2.0m、梁行1.8~2.0mである。

遺物はP10から出土した上師器小皿(160)がある。この時期からすると建物の時期は13世紀前後である。

S B 6 4・6 5・6 6 (図版6、写真図版29)

いずれも川に面して建てられた簡素な構造の建物である。S B64は1辺2間の東西棟で総柱構造になる。建物寸法は桁行6.0m、梁行5.7m、柱間は南北2.7~3.2m、東西2.8~3.2mである。S B65は東西棟で側柱構造、



第3図 石段 (1/25)

桁行3間、梁行2ないし3間で、建物寸法は桁行7.1m、梁行5.9m、柱間は桁行2.0~3.0m、梁行1.8~2.1mである。S B66は南北2ないし3間、東西2間、建物寸法は南北5.0m、東西3.6mを測る。ただし、柱穴の並びが悪く、稠密に検出されたため建物構造については疑問も残る。

遺物にはS B65がP95の土師器小皿（163）・P165の土師器杯（167）がある。S B66ではP139の土師器羽釜（164）の1点がある。

石段（第3図、写真図版31）

IV区の南北隅には段差1m前後の崖地形があって、河床と集落域を分けており、この崖地形に平石を並べた遺構が検出された。状況からこの遺構は河床に下りるために石段と考えられる。石段は北西から南東に向けて下る構造で、据えられた平石は長辺が40~50cm前後である。すべて、平面を上に向けて水平に据えるもので、基本的に砂層の上にそのまま据えられている。石段の周囲は拳大前後の石材が集積され、崖地形がこの部分のみやや緩やかにされている。

検出された石段は10段、一段1石ずつ石が据えられ、全体の高低差は0.7mほどで、一段ごとの蹴上の高さが5~10cm前後となる。据えられた石はすべて長辺を横位に置くもので、周囲の川原石を集めたものである。

石段の裏込めからは土師器小皿（150）、瓦質土器羽釜（153）、瓦質土器壺（154）、釘（M12）が出土した。これらの遺物から石段の構築は14世紀以降と判断される。

土坑群（図版6）

IV区の南側川岸付近には平面椭円形ないし隅丸方形の土坑が多く検出された。II区、IV区などの南側にあるものがそれである。埋土は黒褐色シルトが多く、内部から遺物はあまり出土していない。土坑の性格は不明であるが、川岸の荷揚げに関係するものの遺構の可能性がある。

この他、北端のSK1からは土師器小皿（147~149）、西辺中央よりのSK7からは土師器小皿（151）・同杯（152）が出土している。

昭和59年度の圃場整備調査（図版7）

この調査は昭和59年3月に確認調査が行われ（試掘坑の15箇所）、遺跡の存在が明らかとなったため同年度に本発掘調査（当時全面調査と呼称）が行われた。発見の契機は遺跡周辺に散布した鉄滓片の採取からであったという。その後、遺跡が存在する範囲のうち、削平を受ける部分について本発掘調査が実施された。調査面積は435m²である。

調査の結果、多数の柱穴などの遺構が検出され、中世の集落が広範囲かつ稠密に遺構が分布することが明らかにされた。実績報告書に挙げれば5棟以上の掘立柱建物が検出されたほか、溝・土坑などが出土したという。また、出土遺物についてもコンテナ数十箱に及ぶもので、土師器皿・杯の類を中心に須恵器、瓦質土器壺・甕、貿易陶磁青磁・白磁、常滑焼甕などの土器類のほか鉄滓などが出土している。

現在残された図面から建物を復元することはできないが、東西に伸びる溝と柱穴が密集する状況からすると、今回の調査地点に似た状況であったことが窺える。ただし、遺物群を仔細に観察すると土師器杯・皿の類が圧倒的に多く、常滑焼甕等も出土しており、時期的には13・14世紀を中心とする遺物が大半を占める。須恵器は糸切底の碗・皿が一定量出土している。東播系を中心とする須恵器は碗・皿の類は13世紀、鉢の類は14世紀まで存続する。土師器は杯・皿が多く遺物の大半を占めているが糸切底のものが圧倒しており、時期的には14世紀前後のものが主となる印象を受けた。一方、手づくね手法の皿は少なく、また、京都系土師器も認められない。この他では、中国産の磁器は少量であるが青磁・白磁が混じる。時期的には13世紀前後のものであろう。

表2 平漸遺跡掘立柱建物一覧表

地区名	建物名	建物方位		桁 行		梁 行		庇	面 積		柱 間			
		株方向	方位	間	(m)	間	(m)		身余 (m ²)	合計 (m ²)	桁 行 (m)	梁 行 (m)	最小	最大
I区	SB1	-	10°E	4	6.8	3以上	5.2			(35.4)	1.4	2.0	1.5	1.8
I区	SB2	-	8°W	4	8.3	3以上	5.8			(48.1)	1.7	2.5	1.7	2.1
I区	SB3	東西棟	1°E	4	8.6(9.5)	2	5.4(7.3)	南北・東庇	29.3	46.2	1.9	2.8	2.4	3.1
I区	SB4	南北棟	1°E	4	7.7	4	6.5			50.1	1.6	3.3	1.5	1.9
I区	SB5	東西棟	88°E	5	8.3	3	6.0			49.8	1.4	2.2	1.2	2.0
I区	SB6	南北棟	2°E	4	6.2	2	2.9			18.0	1.2	3.1	0.9	1.7
I区	SB7	東西棟	87°E	4	8.1	2・3	6.4			51.9	1.7	2.3	1.7	3.5
I区	SB8	-	45°W	2	4.5	1	3.0			13.5	0.9	2.8	1.9	2.7
I区	SB9	東西棟	88°W	3	6.4(7.5)	2	4.4(5.6)	北・東面庇	28.2	42.0	2.0	2.1	2.0	2.1
I区	SB10	東西棟	87°W	3以上	7.0	2	5(6.6)	南面庇	35.0	(46.2)	2.0	3.0	2.5	2.5
I区	SB11	東西棟	84°W	5	9.9	2	6.1			60.4	2.0	2.4	1.4	3.0
I区	SB12	東西棟	89°W	2	4.6	2	3.9			17.9	1.9	2.6	1.6	2.3
I区	SB13	東西棟	89°E	3	7.0	2	5.5(7.0)	南面部分庇	38.5	47.0	1.7	2.6	2.6	2.8
I区	SB14	南北棟	16°W	2以上	7.2	2	7.0			(50.4)	3.0	4.0	3.5	3.5
I区	SB15	-	3°E	2以上	3.6	1以上	1.3			(5.0)	1.6	2.0	1.3	1.3
I区	SB16	東西棟	59°E	4	8.0	2・3	4.8			38.4	1.5	2.3	1.5	2.6
I区	SB17	東西棟	89°E	5	10.9	3	6.0(8.0)	南面部分庇	65.4	78.4	1.9	3.1	1.8	2.4
I区	SB18	南北棟	1°W	4	9.0	4	8.5			76.5	1.8	2.5	2.0	2.4
I区	SB19	東西棟	79°E	3	6.8	3	6.0			40.8	1.7	3.0	0.7	2.4
I区	SB20	東西棟	81°W	5	10.8	3	5.4			58.3	1.8	2.9	1.4	2.0
I区	SB21	-	4°W	3以上	7.0	3以上	6.0			(42.0)	2.1	2.5	1.5	2.3
II区	SB25	南北棟	7°E	5	10.0	3	6.5(7.6)	西面部分庇	65.0	71.2	1.7	2.5	1.6	2.6
II区	SB26	南北棟	7°E	5	8.7	2	3.8			33.1	1.5	2.0	2.0	2.9
II区	SB27	東西棟	81°E	4	8.9	4	7.4			65.9	1.9	2.3	1.5	2.0
II区	SB28	東西棟	90°E	3	6.9	2	6.0			(7.8)	1.8	2.3	2.8	3.0
II区	SB29	南北棟	10°E	3	5.7	2	3.1			17.7	1.6	2.0	1.4	1.6
II区	SB30	南北棟	7°E	3	6.1	2	3.9			23.8	1.7	2.3	1.8	2.1
II区	SB31	東西棟	82°W	3	5.1	2	3.0(1.2)	南面部分庇	15.3	18.8	0.9	2.2	1.3	1.6
II区	SB32	南北棟	4°E	4	9.1	2	4.9			44.6	1.6	3.0	1.7	2.9
II区	SB33	東西棟	84°W	3	5.4	2	2.7(2.5)	南面部分庇	14.6	23.6	1.5	2.4	1.4	1.9
II区	SB34	東西棟	82°E	2	6.1	2	3.6			22.0	2.9	3.2	1.6	2.0
II区	SB35	南北棟	2°E	3	5.9	2	3.2			18.9	1.5	2.0	1.8	2.0
II区	SB36	東西棟	89°E	4	10.0	4	8.0			80.0	2.0	3.0	1.9	2.0
II区	SB37	-	2°E	4以上	7.6	3以上	6.0			45.6	1.8	2.0	1.9	2.0
II区	SB38	-	3°E	3以上	9.0	3以上	6.0			(54.0)	1.7	2.0	2.0	3.0
II区	SB39	南北棟	11°E	3	5.6	2	3.7			20.7	1.5	2.5	1.5	2.2
II区	SB40	南北棟	2°E	3以上	7.6	4以上	5.0			(38.0)	1.5	2.0	1.5	1.8
II区	SB51	東西棟	88°E	3	4.7	2以上	3.2(4.2)	南面庇	(15.0)	(19.7)	1.4	1.8	1.0	1.7
II区	SB52	-	4°E	3	4.9	3以上	5.0			(24.5)	1.5	2.6	2.7	3.4
II区	SB53	南北棟	1°E	3・4	4.9	2・3	4.1			20.1	1.0	1.8	0.8	1.8
II区	SB54	南北棟	3°E	4	8.5	2	4.1(5.6)	西面部分庇	(34.9)	41.0	1.9	2.4	1.9	2.2
II区	SB55	-	13°E	3	4.9	3	4.7			23.0	1.2	1.8	1.2	1.7
II区	SB56	東西棟	88°W	3	5.8	3	5.1			29.6	1.2	2.0	1.5	2.5
II区	SB57	南北棟	16°E	3	5.6	3?	4.6			25.8	1.1	2.0	4.2	4.6
II区	SB58	南北棟	7°E	4	6.5	2	3.9			25.4	0.9	2.2	1.9	2.0
II区	SB59	南北棟	2°E	3・4	5.2	3	4.2			21.8	1.0	2.0	1.0	1.6
II区	SB60	東西棟	85°E	3	6.0	2	4.5			27.0	1.8	2.2	1.8	2.6
II区	SB61	南北棟	3°E	4	7.2	2	3.9			28.1	1.6	2.3	1.6	2.2
II区	SB62	南北棟	2°E	3	4.8	2	3.1			14.9	1.4	1.7	1.5	1.6
II区	SB63	東西棟	87°W	4以上	7.7	2	3.6			27.7	1.4	2.0	1.8	2.0
II区	SB64	東西棟	59°W	2	6.0	2	5.7			34.2	0.8	1.9	1.1	1.7
II区	SB65	東西棟	82°E	3	7.1	2・3	5.9			41.9	1.8	3.0	1.8	3.0
II区	SB66	南北棟	28°E	3以上	5.0	2	3.6			(18.0)	1.0	2.0	2.1	1.6

2. 遺物

平瀬遺跡から出土した土器はコンテナ10箱分である。中世関係の遺物には13世紀から17世紀のものが含まれる。遺物の器種には土師器小皿・中皿・杯・羽釜・壺・甕、瓦質土器羽釜・壺、須恵器碗・皿・片口鉢・甕、備前焼碗・擂鉢・鉢皿・甕・甕、瀬戸焼天目碗・唐津焼皿・碗、不明陶器、貿易陶器白磁皿・杯・碗・青磁碗・皿、染付碗・天目茶碗がある。また、これらの土器類の他、土製品の土錘・石製品の石臼・瓦の平瓦・鐵製品・鐵類の鉄滓・釘などがある。以下、本稿では地区ごとに中世関係の遺物について報告する。

今回の2ヵ年の調査で出土した中世関係の遺物は、この規模の集落遺跡の割には余り多くない。図示できた遺物は210点と限られており、遺構出土の遺物は大半が柱穴と護岸裏込めとした地点のものである。

I 区の遺物（図版32、写真図版36~43）

I区出土遺物の内、図化したものは23点である。本地区は耕作土直下で遺構面が検出され、包含層がほとんど存在しないため、遺物量は少數であった。

土師器

土師器は小皿（41・46・49・58）、中皿（47・50・51・53）、羽釜（48）がある。

小皿には手づくね手法の41・46と、糸切り手法の49・58の2種がある。手づくねの小皿は絶じて丸底になるもので、器高の低い41と、体部が丸くなる46の2種がある。これらの皿は基本的に内面および口縁端部を横ナデし、外面の底部は未調整で、指頭痕跡を残す。46は器高が高く器形全体が丸い印象を持つ個体である。糸切手法の49・58は器高に対して底径が大きく、体部は短く直立気味に立ち上がる。口縁端部は丸く終えるもので、内外面は横ナデする。13世紀前後の製品である。

中皿には47・50・51・53がある。いずれも器壁は3~4mm前後で、口縁端部のみをつまむように横ナデする。体部はハの字形に開き外面は成形時の指オサエ痕跡を残すものが多い。51は口縁端部をやや内渦させる。

羽釜（48）はやや内傾気味に立ち上がる体部をもち、口縁端部上面に面を持つ。鈍は貼付けで、断面は長方形になる。内面には板ナデの痕跡を顕著に残す。

瓦質土器

瓦質土器は羽釜（62）と壺（52・63）がある。

羽釜（62）は口縁部を内傾させるもので口縁部外下面に小さな鈍を貼付ける。口縁端部上面には面を持つがナデによって若干凹線状に窪む。壺（52）は口縁部を外方に屈曲させる個体でやや厚手の体部を持つ。壺（63）は口縁部を屈曲させて受け蓋にする。体部外間に指頭痕跡が観察される個体である。

須恵器

須恵器は鉢（42・55・61）がある。

42は体部下半および底部の破片である。内面は摩滅しており使用痕跡を残す。胎土や体部の角度から14世紀に下る個体と思われる。55は口縁部の断面はやや上方に拡張するが基本的に三角形の形状を残すものである。

東播系の須恵器と考えられる。61は口縁部が拡張し、縁帯状をなす。縁帯外面は丸く仕上げられる。

備前焼

備前焼は擂鉢2点（56・57）を図示した。

56は口縁端部が少し上方に拡張するもので注ぎ口周辺の破片である。中世4期a段階と考えられる。57は底部片である。7本単位の擂目をもつもので、内面の使用痕跡が顕著に残る。口縁部がないため詳細は不明であるが、中世5期前後の個体と推定される。

中国産磁器

中国産磁器は青磁碗（54）がある。口縁部の細片で、わずかに薺弁文が観察される。

土製品

土製品は土錘5点（43～45・59・60）がある。いずれも管状土錘で、筒状内部に縦通し穴を持つ。長さは3.2～4.6cmで、幅1cm前後である。

瓦

瓦は平瓦2点（T1・2）を図示した。いずれも破片で全体の形状は不明である。T1は凸面縁部に型の痕跡が観察される。

II区の遺物（図版33・37、写真図版36～43）

II区から出土した中世関係の遺物は遺構・包含層を含めて多くない。図示できた遺物は各地区の中では最も多い81点であるが、やはり少ないといわざるを得ないだろう。遺構出土遺物の大半は柱穴からのものである。この他、南側の護岸に投棄された土器群がある。この土器群の時期は15世紀前後に限られたもので、まとまつた出土を見ており、一括性が高い。これを護岸裏込めとして報告した。（図版3参照）

土師器

土師器は小皿（66・75・80～87・128・129）・中皿（90）・杯（88・130・131）・甕（171）・羽釜（132）がある。

小皿には手づくね手法（76・80～85・128）と糸切り手法（66・86・87・129）のものがある。手づくね手法のものは器高が低く、底体部の境が明瞭でない80～83・128と、底部が丸底となり器高がやや高くなる76・84、さらに器高が高く、体部中位にナデによる屈曲が観察される85の3種がある。一方、糸切り手法は66・86・87・129の4点がいずれも体部が外開きに短く立ち上がるものである。手づくね手法の85は13世紀後半～14世紀、糸切り手法の4点は13世紀、その他の手づくね手法のものは15～16世紀頃と推定される。

中皿（90）は、丸底になる個体で体部に指頭痕跡を顕著に残す。

杯（88・130・131）は、糸切り手法で、「ハ」の字に開く体部を持つ。13世紀後半前後のものであろう。

甕（71）は、受け口状の口縁部をもつもので、内面は横方向、外面は縱方向のやや密なハケ目調整を施す。器壁は薄く2～3mm前後で、器形は長胴になると推定される。

132はやや外傾する個体で、口縁部下半に鈎が付く。鈎は断面長方形で貼付け痕跡を確認できる。

瓦質土器

瓦質土器は羽釜（89・103）がある。89・103は口縁部直下に断面台形の小さな退化した鈎が付く個体である。103では外面を軽くナデ調整するが、成形時の指頭痕跡が比較的多く残る。口縁部は内傾するもので、口縁部の端面を内側に向ける。また、内面には器面調整のための板ナデ痕跡が顕著に残る。

須恵器

須恵器には椀（72・77・97）、甕（106）がある。椀は72が内湾する体部を持ち、77・97は斜め上方に直線的に立ち上がる体部をそれぞれ有する。甕（106）は胴部の細片である。外面に格子目タタキを施すが、1辺1～2mmのものと、3mmの格子目の2種がある。

備前焼

備前焼は碗（67）・鉢（79・100・101・105・107・108・144）・壺（64・69・109～116）・甕（102・117～127・145・146）がある。

碗（67）は口縁部の小片で、薄い器壁を持つ。

擂鉢は護岸裏込め（105・107・108）とその他のもの（79・100・101・144）様相が異なる。

護岸裏込め周辺から出土した107・108は内傾しながら立ち上がる体部をもつ。口縁部は若干肥厚するが目立った拡張ではなく、断面四角形に近く上端に面を持つ。108の擂目は7本単位で間隔が広く施される。107は擂目が観察されない。注ぎ口はどちらも小さく付く。これらは中世3期a段階前後に比定される。

79・100・101・144の4点は赤褐色ないし灰赤色のもので粘性のある胎土をもつ。擂目は10本前後で幅が広い。100は口縁部が拡張する個体で外面に波状文を観察できる。中世5期b段階の製品である。79・101もこの前後の製品と考えられる。144は口縁部が拡張し、かつ肥厚するため近世1期b段階前後に下るものである。

壺は10点を固化した。胴径に比べ、口縁部がすばまるものを壺とした。口径11.8~23.4cmとさまざまである。64・69以外は護岸裏込め周辺から出土したものである。64は肩部に2条の撚描文と間に波状文を入れる。肩が丸く立ち上がり、口がすばまつた器形で、頸部を長く立ち上げる。69は器壁の薄い小壺で、短い頭部を持つ、口縁部はやや肥厚するが完全な玉縁にはならない。

護岸裏込めから出土したものでは、116は口縁部を欠くが、他はすべて玉縁を持つ。110・111・114~116は肩部に撚描文を施す。110では2条の撚描が2単位施されるが、他の個体は肩部周辺までの残存であるため、1単位のみが観察できる。全体に焼成は良好であるが、数cm前後の砂粒を含むものや、粘性の悪い土を使うものがある。玉縁は小さく丸いもので、112を除いて頸部は外聞き気味に立ち上がる。内面は粘土紐の接合面が観察されるものも多いが、指ナデや板ナデによって粗く器面調整を施す。外面も横ナデによる器面調整を施すが、114では成形時の指頭痕跡が残る。釉は茶褐色ないし赤褐色のものである。116では釉だけが胴部下半まで達している。これらは15世紀代の製品と考えられ、16世紀代の製品に比べると個体差が大きい。

壺は14点（102・117~127・145・146）ある。大半が口縁部の破片であるが、126は底部のみの破片である。壺と同じく口縁部はすべて玉縁を持つ。玉縁の断面は小さく玉状になるもので拡張されたものはない。ただし、120・124・125は断面がやや角張り特徴的である。内面は器面調整のためのナデが比較的丁寧に施され、粘土紐の接合痕跡などの凹凸が消されているものが多い。118・120~122・124・126では内外面に板ナデの痕跡が観察されるが、詳細に見るとすべての個体で板ナデないしケズリが観察された。特に胴部・頸部の周辺では顕著にケズリ痕跡や指頭痕跡を観察できる個体が多い。また、120・121では板ナデ状の痕跡が撚描状の条痕となって観察される。これらは器面調整のための調整痕跡と考えられる。色調は茶褐色・灰色・赤褐色などバラエティーに富む。釉は薄い自然釉で口縁部から肩部を中心に観察される。126は底部片であるが、ややゆがみを持つ個体で、器壁は体部下端がやや厚くなるものの、全体的には1~2cm前後と薄い。外面を縱方向に顕著なケズリ調整する個体である。他の遺物と同じく護岸裏込め出土のものは15世紀代に収まる。

中国産磁器

中国産の磁器は白磁小杯（99）・皿（78）、青磁皿（65）、碗（134）、天目碗（104）がある。

白磁小杯（99）は口径9.0cmの口縁部片である。斜めに立ち上がる体部から、口縁部を外反させて端部をやや尖り気味におえる個体である。白磁皿（78）は口禿の皿で、14世紀前後のものである。青磁皿（65）は後花皿である。厚い濃緑色の施釉を施す。腰を「く」の字に折り大きく外反させる体部を持つ。青磁碗（134）は口縁部の破片で、僅かに蓮弁文が観察される。天目碗（104）は口縁端部を欠くが、概ね4/5が残る。厚手でガラス質の褐色釉を施釉する。高台周辺は露胎となるが薄く鉄輪が掛かるために暗褐色を呈する。日本産のものに比べ器壁が厚く、重量感のある個体である。釉の発色は均質で光沢を持つ。

唐津焼

唐津焼は碗（133）がある。基筒底のものである。高台周辺はケズリによって成形される。

志野焼

皿（98）がある。小片のため詳細は不明であるが、軟質の白濁釉が観察される個体である。

土製品

土製品は土鍤（68・70・73～75・91～96・135～141）がある。全体的に小さく軽いものが多い。いずれも管状土鍤で、長さは3.0～5.0cm、幅1.0cm前後である。ただし、141はやや大型でざんぐりした形状を持つ。長さ7.1cm、幅2.7cmである。

III区の遺物（図版37、写真図版39）

II区から出土した遺物は細片が大半である。図示できたものは唐前焼擂鉢（142・143）の2点である。柱穴など遺構から出土した遺物で、時期や器種を明らかにできるものはなかった。

142は近世1期b段階の擂鉢で、口縁部の縁帯が拡張され、5条の凹線が入る。口縁部の上下の拡張に比して、器壁の肥厚が進まず、口縁帯が内傾する。擂目は放射状のものが施される。143は口縁部が上下に拡張し、かつ器壁が肥厚する個体である。近世2期a段階の個体と考えられる。

IV区の遺物（図版38・39、写真図版36～43）

IV区でも他の地区同様で、多くの遺物が出土したが、総じて細片が多いこと、遺構出土の遺物が少ないなど共通する傾向を持っている。出土した遺物の内、図示できた中世関係のものは43点である。遺構出土の遺物ではやはり大半が柱穴からのものである。このうち土師器皿ないし土師器のみが出土する柱穴が多く占める傾向は他の地区と同様である。

土師器

土師器には小皿（147～151・160・163・172）、中皿（165・166・173・174）、杯（152・167）、壺（182）、羽釜（164）がある。

小皿は手づくね手法（149・172）と糸切り手法（147・148・150・151・160・163）がある。手づくね手法の皿は器高が低く丸底で、口縁端部のみを横ナデする149と、器高が高く口縁から体部上半までを横ナデする172がある。172の内面には細かなハケ目が観察される。糸切り手法のものは器高が総じて低く、体部が底部から短く立ち上がるもので、口縁端部を丸く仕上げる。

中皿（165・166・173・174）は手づくね手法のものに限られる。内面および体部外面上半を横ナデし、外面体部下半から底部にかけて指頭痕跡を顕著に残す。体部が大きく立ち上がり器高がやや高い165・166・173と、器高が低くなり体部が開き気味の174がある。前者は14世紀のもので、後者は13世紀代のものである。

杯（152・167）は底部糸切りのもので、体部を斜め上方に立ち上げ端部を尖らせ気味におえる。152は底径が小さく椭形に近いと推定される。

壺（182）は外開き気味になる鉄かぶと様の形状をもつタイプのものである。細片であるため詳細は不明であるが、外面に平行タタキ痕跡が僅かに観察され、口縁部は断面台形状になる。16世紀代に下るものである。

羽釜（164）は口縁部下に斜め上方に伸びる鶴を貼付ける。内面には板状工具によるナデ調整痕跡が顕著に残される。

瓦質土器

瓦質土器には堀（154・171）・羽釜（153・183）がある。

堀（154・171）は口縁部を屈曲させて、蓋を受けるための段を内面に設けたタイプである。内面には板状工具によるハケ目状の痕跡が観察され、外面には指頭痕跡が顕著に残される。154では指頭痕跡の上にハケ目調整が施され、僅かに器面を整えたことが観察される。

羽釜は口縁部の直下に小さな鋤を持つもので、体部が湾曲しながら立ち上がり、口縁部を大きく内湾させて終える。堀と同じく内面に板ナデ状のハケ目調整を施すが、外面は183は指頭痕跡を消すようにハケ目調整を施す。一方、153は左方向のケズリ調整が顕著に観察され個体によって最終調整にバリエーションが見られた。

須恵器

須恵器は小皿（169・175）・椀（170）・鉢（184）がある。

小皿（169・175）は糸切り手法のもので体部が小さく立ち上がる。

椀（170）は底部の破片である。底部には低い輪高台が観察され、体部は斜め上方に立ち上がる。

鉢（184）は口縁部が断面三角形状を呈するもので、やや縁帯が膨らむ。口縁部外面の体部との境は横ナデによって丸く仕上げている。

備前焼

備前焼には杯（185）・鉢皿（186）・擂鉢（159・187・188）がある。

杯（185）は口径9.4cmと小型の製品で斜め上方に立ち上がる体部を持ち、底部には糸切り痕跡が観察される。器壁は2mm前後と薄いが、焼成は堅緻な仕上がりである。外面は赤褐色の備前焼独特の発色であるが、器肉は灰白色を呈する。これらのことから16世紀後半頃の製品と思われる。

鉢皿（186）は口縁部に比して底径が大きく、体部がハの字に開き口縁部上端に面を持たせておれる。器高が高く鉢に近い形状を持つ個体で、内面に格子状の擂目が観察される。

擂鉢は3点があるが、159は体部の細片、187・188も口縁部の小片である。159は斜め方向の擂目が入るもので、16世紀後半の製品である。187は口縁端部をやや上方に尖らせるもので、中世4期a段階に比定される。188は口縁部が拡張し縁帯を持つが、明確な凹線が認められない個体である。口縁端部内面の段も不完全である。中世6期a段階に比定される製品である。

唐津焼

唐津焼には皿（155）・碗（158・162）がある。

皿（155）は内面見込みに鏡をもち、蛇の目状に釉剥ぎする。見込みに胎土目の輪トチン痕跡を残す。内面に草花文を描く。体部は腰部を湾曲させながら立ち上げ、「ハ」の字に開くことで口縁端部を僅かに外反させる。碗162は腰部が張るもので体部は直線的に上方に立ち上がり、端部を少し外反させる。碗（158）は口縁の破片である。

瀬戸・美濃焼

瀬戸・美濃焼には天目碗（168）がある。体部は内湾しながら立ち上がり、口縁部は天目碗独特の形状をもつが、やや端部の屈曲が弱く完成されていない。黒褐色の施釉で体部下端は露胎となる。

中国産磁器

中国産磁器には白磁碗（176）・染付碗（161）がある。白磁碗は白磁IIないしIV類の碗底部と思われる。小片であるため詳細は不明であるが、緻密な胎土に薄い透明釉を施すもので、外面腰部下半は露胎となる。染付碗（161）は底部が上方向に膨らみ気味の個体で、饅頭芯碗の可能性がある。内面に絵付けが、底部外面には

館が観察されるが、いずれも部分的なもので詳細は不明である。16世紀後半の製品と考えられる。

土錘

土製品には土錘（156・157・177～181）がある。すべて管状土錘で細長いものが大半である。長さ3.2～5.2cm、幅1cm前後である。

石製品（図版39、写真図版43）

IV区から石製品1点が出土した。石臼S1は上臼の破片である。上面は使用に伴う摩滅が著しい。破片縫にはものくぼり穴の一部がかろうじて残され、底面には歯受けの穴、側面には取っ手の受け部となる方形の穴がそれぞれ認められる。下面には稚拙であるが5ないし6分割された鉗目が引かれる。

鉄製品（図版40、写真図版44）

錢貨（M1）・鉄釘（M3～18）がある。鉄釘はすべて和釘で頭巻釘になる。M3～18の16点がある。M4・18は3寸、M9・10・16・17は2寸前後、他は1寸ないし1寸半である。ただし、下縁を欠損するものが多いため寸法は正確にはわからないものが多い。この他、M2は槍鉤の先端、M19は鉄鍋の底の可能性があるが細片のため結論はできなかった。

各個体の出土場所は以下の通りである。I区からはM1（包含層）・M3（P566）・M4（P494）、II区からはM2（P456）、III区からはM6・7（包含層）・M5（SD4・5）、IV区からはM8（SK17）・M9（P118）・M12（石段）・M10・11・13～19（包含層）から出土した。

3. 小結

遺構のまとめに関しては第6章で報告したので、ここでは遺物に関して簡単に述べておきたい。

今回の調査ではIII区を除いてI・II・IV区で一定量の遺物が出土した。これらの遺物の出土場所は、前述のとおり柱穴内とII区の護岸裏込め周辺からのものが大半を占める。特に護岸裏込め周辺の遺物は備前焼を中心であるが、時期的にまとまったもので一括性が高い。柱穴の遺物は粗片や単品での出土が多く、前述のように固化できたものに他の時期を判別できる遺物はほとんどない。

土師器では皿が目立つが、小皿が多く、中皿はやや少ない。さらに製作技法から見ると手づくね手法が多くを占める。これらの皿は中世前半の13～14世紀前後のものと、15～16世紀前後のものとに大きく大別される。

糸切り手法の皿はすべて中世前半のもので、須恵器皿と同一の技法で製作されている。糸切り手法で杯タイプの皿になる中世後半の皿は本調査では含まれなかった。

手づくねタイプでは粗製のものが多くを占める。これらは底部が丸く湾曲し内湾する体部をもつタイプと、器高の低いものに分けられる。播磨では置壺城跡などに類例が求められ、中世後半に位置付けられる。

煮炊具では土師器羽釜・瓦質土器壺・羽釜などがある。瓦質土器では口縁部直下に小さな鋲が付く102・152がある。このタイプは護岸裏込め周辺からも出土しているため時期的には15世紀前後のものと考えられる。

須恵器は全体的には量が少なく、碗・皿・鉢などが少量ずつ出土している。碗には169のように高台がしっかり残るもの、鉢には口縁部の肥厚しない段階のものもみられ、12～14世紀までのものが含まれる。ただし、いずれにしても少量であるため、12～13世紀の遺物に関しては遺構に帰属する年代のものかどうかは疑わしい。

備前焼は擂鉢・甕・壺を中心に出土した。護岸裏込め周辺のものは中世3～4期のもので15世紀前半に比定される。これに対してその他の地区から出土した遺物の大半は、中世6期ないし近世1期のものである。ただし、一定量の16世紀代の遺物を含むが、この時期に増加する徳利や水屋甕、その他様々な器種のバラエティーに関しては杯や鉢など限られた点数に絞られ、やや乏しい印象を持つ。この点は平瀬遺跡の機能もしくは地

域性を反映している可能性が高い。

中国産磁器は白磁・青磁の類が主流を占め、染付・天目碗が若干含まれた。

青磁碗の54・134は蓮弁文碗でいずれも鍋の退化したもので14～15世紀前後の製品である。65は青磁皿で葵花になるものであるが16世紀の製品である。白磁は176のⅣないしⅡ類の碗、78の口禿のものや白濁色の98・99がある。176は12～13世紀前後のもの、口禿は13～14世紀を中心とするもので、後者は高台が切高台となるタイプで14世紀を中心とする時期のものである。

唐津焼はⅡ・Ⅳ区を中心に川岸に面した場所からの出土が多いが、図化したものではⅡ区南端の包含層(133)とⅣ区S B50・P 138の155、同S B65・P 168の162など少數である。おおむね17世紀前半頃のもので占められ、少數であるが遺構出土のものも見られた。

個々の器種ごとに検討したが、以上からすると平瀬遺跡の今回調査地点では14～17世紀前半頃の遺物が中心となる。柱穴など遺構の出土遺物との対比からすると、遺構の存続時期の中心もこの期間と考えてよさそうである。特に、検出された遺構群の中では15・16世紀代の遺物が多く、この時期に集落が発展した可能性が高い。

*遺物の記述に当たっては下記の文献によった。

・備前焼に関しては桑岡実「備前焼播鉢の編年について」『第3回中近世備前焼研究会資料』2000及び2001「備前焼大臺編年レクチャー資料」『関西近世考古学研究Ⅸ』2001による。

・貿易陶磁に関しては小野正敏「15・16世紀の染付碗、皿の分類とその年代」『貿易陶磁研究No 2』貿易陶磁研究会1982による。

・瓦類については田中幸夫「中世播磨の瓦」を参考にし、田中幸夫氏から御教示を受けた。

表3 平瀬遺跡遺物一覧表(1)

土器

報名番号	地区	出土遺物	種別	器種	法量(cm)		
					口径	器高	底径
1	I区	S O 3	縄文土器	浅鉢	—	(5.2)	—
2	I区	包含層	縄文土器	鉢	—	(3.9)	—
3	I区	包含層	縄文土器	鉢	—	(3.5)	—
4	I区	包含層	縄文土器	鉢	—	(3.2)	—
5	I区	包含層	縄文土器	鉢	—	(5.7)	—
6	I区	包含層	縄文土器	鉢	—	(4.4)	—
7	I区	包含層	縄文土器	鉢	—	(3.7)	—
8	I区	S K 3 8 0	縄文土器	鉢	—	(3.7)	—
9	I区	S D 4	縄文土器	鉢	—	(3.9)	—
10	I区	S D 4	縄文土器	深鉢	—	(4.9)	—
11	I区	S H 1	須恵器	杯蓋	15.2	4.8	—
12	I区	S H 1	須恵器	杯蓋	(14.9)	(2.9)	—
13	I区	S H 1	須恵器	杯蓋	14.0	(4.4)	—
14	I区	S H 2	土師器	甕	(12.4)	(9.3)	—
15	I区	S H 2	土師器	甕	(13.5)	(4.1)	—
16	I区	S H 2	土師器	短颈甕	(8.4)	(3.5)	—
17	I区	S O 3	弥生土器	甕	(14.9)	(4.3)	—
18	I区	S D 4	弥生土器	甕	(15.0)	(3.6)	—
19	I区	S D 4	弥生土器	甕	(13.7)	(5.2)	—
20	II区	S S 2 4 P 4 7 0	須恵器	杯身	(14.0)	(2.7)	—
21	II区	S S 2 3 P 4 0 1	須恵器	杯身	(13.6)	(3.7)	—
22	II区	P T 8 0	須恵器	杯蓋	(13.7)	(3.3)	—
23	II区	S X 1	土師器	甕	(14.6)	(9.7)	—
24	II区	P 5 9 3	須恵器	甕	(42.5)	(6.6)	—
25	III区	S O 5	須恵器	杯盤	(13.4)	(14.3)	—
26	IV区	S K 4	須恵器	杯身	(12.4)	(3.2)	—
27	IV区	P 2 1 0	須恵器	杯身	(13.4)	(4.3)	—
28	I区	包含層	須恵器	杯身	(11.9)	(3.9)	—
29	I区	包含層	須恵器	杯身	(13.0)	(3.2)	—
30	I区	包含層	須恵器	高杯	(12.1)	(4.1)	—
31	II区	包含層	須恵器	杯蓋	(14.1)	(3.6)	—
32	III区	包含層	須恵器	杯身	(13.3)	(2.6)	—
33	III区	包含層	須恵器	杯身	(12.3)	4.6	(10.2)
34	IV区	包含層	須恵器	高杯	—	(4.2)	(10.6)
35	IV区	包含層	須恵器	杯G	(11.6)	3.8	8.9
36	II区	包含層	須恵器	杯蓋	(13.1)	(2.2)	—
37	II区	P 6 0 7	須恵器	甕	—	(5.5)	(10.0)
38	II区	P 5 7 0	須恵器	杯B	(15.0)	(5.4)	—
39	II区	包含層	須恵器	杯B	—	(2.6)	(13.7)
40	II区	包含層	須恵器	杯B	—	(2.4)	(8.5)
41	I区	S B 1 P 2 9	土師器	小皿	(7.8)	(2.3)	(11.6)
42	I区	S B 2 P 5 6	土師器	鉢	—	(7.2)	—
43	I区	S B 2 P 1 0 7	土製品	土鍤	—	幅1.3	厚1.2
44	I区	S B 3 P 2 0 5	土製品	土鍤	長(3.2)	幅1.0	厚1.0
45	I区	S B 5 P 3 0 0	土製品	土鍤	長(3.6)	幅1.0	厚0.9
46	I区	S B 7 P 4 9 4	土師器	小皿	(7.6)	(2.5)	—
47	I区	S B 8 P 4 5 5	土師器	中皿	(11.2)	(2.3)	—
48	I区	S B 9 P 6 4 9	土師器	羽釜	(14.9)	(2.6)	—
49	I区	S B 1 3 P 3 6 9	土師器	小皿	(8.4)	1.4	(6.6)
50	I区	S B 1 1 P 2 9 4	土師器	中皿	(12.7)	(2.2)	—
51	I区	S B 1 4 P 1 9 1	土師器	中皿	(11.7)	(2.3)	—
52	I区	S D 1	瓦質土器	壺	(28.5)	(2.6)	—
53	I区	P 4 3 2	土師器	中皿	(11.7)	(2.6)	—
54	I区	P 3 5 5	青磁	碗	(11.6)	(1.3)	—
55	I区	P 4 2 0	須恵器	鉢	—	(7.0)	—
56	I区	P 3 7 0	鶴前燒	擂鉢	(25.3)	(3.3)	—
57	I区	P 4	鶴前燒	擂鉢	—	(5.7)	(13.5)
58	I区	包含層	土師器	小皿	(7.0)	1.4	(6.0)
59	I区	包含層	土製品	土鍤	幅3.4	幅1.1	厚1.0
60	I区	包含層	土製品	土鍤	長4.3	幅1.1	厚1.1
61	I区	包含層	須恵器	鉢	(24.3)	(4.5)	—
62	I区	包含層	瓦質土器	羽釜	(21.2)	(3.8)	—
63	I区	包含層	瓦質土器	壺	(31.4)	(5.2)	—
64	II区	S K 1	鶴前燒	甕	(12.9)	(10.4)	—
65	II区	S K 2	青磁	和	(11.1)	(7.9)	(6.3)
66	II区	S B 2 6 S K 4	土師器	小皿	(7.3)	(1.6)	(5.1)
67	II区	S B 2 0 P 1 0 9 1	鶴前燒	碗	(11.4)	(2.0)	—
68	II区	S B 2 0 P 1 8 0	土製品	土鍤	長4.6	幅1.2	厚1.2
69	II区	S B 2 5 P 5 9 9	鶴前燒	小皿	(11.8)	(4.9)	—
70	II区	S B 3 5 P 6 0 0	土製品	土鍤	長3.7	幅1.4	厚1.4
71	II区	S B 2 5 P 6 4 1	土師器	甕	(28.7)	(7.0)	—
72	II区	S B 2 3 P 4 1 8	須恵器	碗	(14.4)	(3.1)	—

表4 平瀬遺跡遺物一覧表(2)

土器

遺物No.	地区	出土遺構	種別	器種	法量(cm)		
					口 徑	器 高	底 径
73	II区	S B 2 2 P 2 6 8	土製品	土錐	長(3.5)	幅(0.9	厚(0.9
74	II区	S B 2 4 P 1 0 0 6	土製品	土錐	長5.0	幅(1.7	厚(1.2
75	II区	P 5 2 1	土製品	土錐	長4.9	幅(1.1	厚(1.0
76	II区	S B 3 2 P 5 7 4	土製品	小皿	(7.9)	(2.2)	(5.1)
77	II区	S B 3 2 P 5 7 4	廣口器	碗	—	(3.3)	—
78	II区	S B 3 2 P 5 7 4	白磁	皿	(9.0)	(2.1)	—
79	II区	P 7 5 3 (S B 3 3)	備前焼	壺	—	(4.4)	(12.8)
80	II区	P 2 3 1	土製品	小皿	(7.2)	1.6	(2.9)
81	II区	P 3 3 8	土製品	小皿	(9.4)	1.6	(4.6)
82	II区	S B 5 4 P 5 2 7	土製品	小皿	(7.5)	1.5	(4.0)
83	II区	S B 5 4 P 5 2 7	土製品	小皿	(7.6)	1.5	(4.2)
84	II区	P 5 3 1	土製品	小皿	(9.4)	(2.5)	—
85	II区	P 6 4 0	土製品	小皿	(9.2)	(2.7)	—
86	II区	P 5 3 8	土製品	小皿	(7.7)	1.1	(6.3)
87	II区	P 5 4 4	土製品	小皿	(7.3)	(1.6)	(6.4)
88	II区	P 8 3 4	土製品	杯	(11.7)	3.4	(4.3)
89	II区	P 2 8 0	瓦質土器	羽釜	(26.0)	(3.0)	—
90	II区	P 7 9 8	土製品	中皿	—	(3.3)	—
91	II区	P 1 0	土製品	土錐	長(2.4)	幅(1.0	厚(1.0
92	II区	S B 2 5 P 5 9 9	土製品	土錐	長3.5	幅(1.1	厚(1.0
93	II区	P 6 4 0	土製品	土錐	長6.0	幅(1.1	厚(1.1
94	II区	P 8 5 3	土製品	土錐	長4.1	幅(1.2	厚(1.2
95	II区	P 8 9 6	土製品	土錐	長4.9	幅(1.3	厚(1.3
96	II区	P 5 3 8	土製品	土錐	長4.3	幅(2.2	厚(2.1
97	II区	P 4 8 3	須恵器	楕	(11.1)	(3.1)	—
98	II区	P 5 8 9	志野焼	皿	(9.4)	(1.7)	—
99	II区	P 2 4 6	白磁	楕	(9.0)	(2.4)	—
100	II区	P 5 3 1	備前焼	壺	—	(8.7)	—
101	II区	P 4 1 9	備前焼	壺	—	(6.2)	(12.0)
102	II区	P 1 9 5	備前焼	甕	(46.2)	(5.5)	—
103	II区	海岸裏込め	瓦質土器	羽釜	(24.1)	(3.8)	—
104	II区	海岸裏込め	中國式磁器	天目碗	(5.8)	—	(4.0)
105	II区	海岸裏込め	備前焼	壺	(30.0)	(6.6)	—
106	II区	海岸裏込め	須恵器	甕	幅6.7	幅(5.5	厚(1.3
107	II区	海岸裏込め	備前焼	壺	(27.6)	11.3	(14.6)
108	II区	海岸裏込め	備前焼	壺	(31.8)	(16.2)	13.3
109	II区	海岸裏込め	備前焼	甕	(12.4)	(4.6)	—
110	II区	海岸裏込め	備前焼	甕	(13.3)	(7.7)	—
111	II区	海岸裏込め	備前焼	甕	(18.6)	(7.1)	—
112	II区	海岸裏込め	備前焼	甕	(14.7)	(9.2)	—
113	II区	海岸裏込め	備前焼	甕	(23.5)	(4.5)	—
114	II区	海岸裏込め	備前焼	甕	(20.3)	(6.3)	—
115	II区	海岸裏込め	備前焼	甕	(18.9)	(9.8)	—
116	II区	海岸裏込め	備前焼	甕	—	(25.2)	—
117	II区	海岸裏込め	備前焼	甕	(39.7)	(5.6)	—
118	II区	海岸裏込め	備前焼	甕	(30.2)	(12.4)	—
119	II区	海岸裏込め	備前焼	甕	(29.5)	(8.6)	—
120	II区	海岸裏込め	備前焼	甕	(36.0)	(9.3)	—
121	II区	海岸裏込め	備前焼	甕	(33.1)	(15.6)	—
122	II区	海岸裏込め	備前焼	甕	(33.1)	(16.5)	—
123	II区	海岸裏込め	備前焼	甕	(33.3)	(14.4)	—
124	II区	海岸裏込め	備前焼	甕	—	(12.5)	—
125	II区	海岸裏込め	備前焼	甕	(43.9)	(8.3)	—
126	II区	海岸裏込め	備前焼	甕	—	(8.9)	36.1
127	II区	海岸裏込め	備前焼	甕	(45.1)	(28.0)	—
128	II区	包合層	土錐	小皿	7.35	1.6	4.1
129	II区	包合層	土錐	小皿	(8.2)	1.5	(5.8)
130	II区	包合層	土錐	杯	(11.9)	(2.3)	(6.0)
131	II区	包合層	土錐	杯	(12.4)	(3.8)	(6.6)
132	II区	包合層	土錐	羽釜	(25.0)	(3.3)	—
133	II区	包合層	土錐	碗	—	(2.8)	(4.2)
134	II区	包合層	青磁	碗	(15.7)	(3.7)	—
135	II区	包合層	土製品	土錐	長3.4	幅(1.5	厚(1.4
136	II区	包合層	土製品	土錐	長3.3	幅(1.1	厚(1.0
137	II区	包合層	土製品	土錐	長4.1	幅(1.4	厚(1.3
138	II区	包合層	土製品	土錐	長3.9	幅(1.3	厚(1.2
139	II区	包合層	土製品	土錐	長(4.4)	幅(1.2	厚(1.1
140	II区	包合層	土製品	土錐	長4.4	幅(1.1	厚(1.1
141	II区	包合層	土製品	土錐	長7.1	幅(2.7	厚(2.5)
142	II区	包合層	備前焼	壺	(27.0)	(6.6)	—
143	II区	包合層	備前焼	壺	(26.4)	(4.7)	—
144	II区	包合層	備前焼	壺	—	(4.4)	—
145	II区	包合層	備前焼	甕	(36.2)	(4.3)	—

表5 平瀬遺跡遺物一覧表(3)

土器・石製品・瓦

器物名	地 区	出土場所	種 別	器 種	法 量 (cm)		
					口 径	器 高	底 径
145	II 区	包含層	偏前後	甕	—	(9.9)	(30.4)
147	IV 区	S K 1	土師器	小豆	(7.5)	1.5	(4.9)
148	IV 区	S K 1	土師器	小豆	6.8	1.4	5.0
149	IV 区	S K 1	土師器	小豆	7.9	1.7	—
150	IV 区	石袋裏込め	土師器	小豆	(7.5)	(1.3)	(6.3)
151	IV 区	S K 7	土師器	小豆	7.6	1.3	6.0
152	IV 区	S K 7	土師器	杯	—	(2.5)	(5.1)
153	IV 区	石袋裏込め	瓦質土器	羽釜	(25.1)	(6.9)	—
154	IV 区	石袋裏込め	瓦質土器	壺	(25.4)	(4.1)	—
155	IV 区	S B 5 0 P 1 6 8	鹿津後	皿	13.2	3.7	4.2
156	IV 区	S B 5 1 P 2 5 1	土製品	土錐	長3.2	幅1.3	厚1.3
157	IV 区	S B 5 6 P 6 9	土製品	土錐	長4.4	幅1.3	厚1.3
158	IV 区	S B 5 3 P 6 6	鹿津後	錐	(10.7)	(3.2)	—
159	IV 区	S B 5 8 P 8 7	偏前後	鑄鉢	—	(4.6)	—
160	IV 区	S B 6 3 P 1 0	土師器	小豆	(8.4)	1.6	(6.1)
161	IV 区	S B 6 2 P 1 2 0	秦竹器	皿	—	(1.0)	—
162	IV 区	S B 5 6 P 1 6 8	鹿津後	碗	(10.9)	6.2	4.4
163	IV 区	S B 6 5 P 9 5	土師器	小豆	(7.2)	1.4	(5.6)
164	IV 区	S B 6 6 P 1 3 9	土師器	羽釜	(25.2)	(5.3)	—
165	IV 区	P 1 5 7	土師器	中豆	(12.1)	(2.7)	—
166	IV 区	P 2 3	土師器	中豆	11.5	3.4	5.2
167	IV 区	S B 6 5 P 1 6 5	土師器	杯	(12.4)	2.8	(7.4)
168	IV 区	P 2 3	鶴戸美濃焼	火皿	(12.2)	(4.6)	—
169	IV 区	P 9 6	須恵器	小豆	(9.6)	1.3	(5.6)
170	IV 区	P 4 3	須恵器	碗	—	(1.7)	(4.0)
171	IV 区	P 1 4 9	瓦質土器	壺	(23.7)	(5.7)	—
172	IV 区	包含層	土師器	小豆	(9.3)	(2.5)	(5.6)
173	IV 区	包含層	土師器	中豆	(10.7)	(2.6)	(6.6)
174	IV 区	包含層	土師器	中豆	(11.3)	2.2	(5.3)
175	IV 区	包含層	頭巾器	小豆	(7.7)	(3.3)	(5.1)
176	IV 区	包含層	白磁	碗	—	(2.2)	(4.8)
177	IV 区	P 2 3	土製品	土錐	長3.5	幅1.3	厚1.2
178	IV 区	P 1 3 2	土製品	土錐	長5.2	幅1.2	厚1.2
179	IV 区	P 1 4 9	土製品	土錐	長(3.3)	幅1.3	厚1.2
180	IV 区	包含層	土製品	土錐	長4.3	幅1.1	厚1.0
181	IV 区	包含層	土製品	土錐	長5.2	幅2.4	厚(2.1)
182	IV 区	包含層	土製品	壺	—	(3.4)	—
183	IV 区	包含層	瓦質土器	羽釜	(25.1)	(4.6)	—
184	IV 区	包含層	須恵器	鉢	(24.8)	(4.0)	—
185	IV 区	包含層	偏前後	杯	(3.4)	(2.7)	(5.0)
186	IV 区	包含層	偏前後	鉗	(22.1)	(5.2)	(17.7)
187	IV 区	包含層	偏前後	擂鉢	(21.8)	(5.4)	—
188	IV 区	包含層	偏前後	擂鉢	(30.1)	(5.3)	—
S 1	IV 区	P 3 4	石製品	臼臼	径(30.2)	(9.9)	ふくみ(1.4)
T 1	I 区	G D 4	瓦	平瓦	—	—	—
T 2	I 区	包含層	瓦	平瓦	長(15.1)	幅(11.5)	厚1.0

金属製品

器物名	地 区	出土場所	種 別	器 種	法 量 (cm)		
					長さ	幅	厚さ
M 1	I 区	包含層	銅製品	錢貨	直径2.4	—	厚0.2
M 2	II 区	P 4 5 6	鐵製品	釘	2.9	1.2	—
M 3	I 区	P 5 6 5	鐵製品	釘	4.2	1.3	—
M 4	I 区	P 4 9 4	鐵製品	釘	(10.2)	1.2	—
M 5	III 区	S D 4	鐵製品	釘	(3.6)	1.3	0.5
M 6	III 区	包含層	鐵製品	釘	(2.6)	0.8	0.6
M 7	III 区	包含層	鐵製品	釘	(4.4)	0.9	0.5
M 8	IV 区	S K 1 7	鐵製品	釘	(2.9)	1.0	0.4
M 9	IV 区	P 1 1 8	鐵製品	釘	(6.2)	0.9	0.5
M 10	IV 区	包含層	鐵製品	釘	(5.8)	0.7	0.5
M 11	IV 区	包含層	鐵製品	釘	(4.9)	(0.9)	0.5
M 12	IV 区	石袋裏込め	鐵製品	釘	(5.6)	1.1	0.5
M 13	IV 区	包含層	鐵製品	釘	(5.2)	0.7	0.5
M 14	IV 区	包含層	鐵製品	釘	(4.3)	0.6	0.5
M 15	IV 区	包含層	鐵製品	釘	(4.4)	0.6	0.4
M 16	IV 区	包含層	鐵製品	釘	(5.2)	0.9	0.8
M 17	IV 区	包含層	鐵製品	釘	(6.1)	1.2	0.7
M 18	IV 区	包含層	鐵製品	釘	(9.3)	0.9	0.5
M 19	IV 区	包含層	鐵製品	釘?	—	—	—

*釘の幅は頭幅

第4章 円光寺遺跡

第1節 遺跡の概要

円光寺遺跡は、平瀬遺跡の対岸に所在する円光寺集落を含め、西側の水田部分（宇岡の辻）から東側の愛宕山西麓（宇松山）付近まで広がる、弥生時代以降の遺跡である。このうち、今回の発掘調査の対象となったのは遺跡の東端にあたる愛宕山西麓部分である。佐用川に面した山腹に太田八幡宮があり、その南側に平坦面がある。この平坦面は東端を頂点とする平面三角形状を呈し、南北約70m、東西約60mを測る。東端付近には井戸と室町時代と推定される五輪塔残欠がある。平坦面上は標高88m前後であり、集落との比高差は約10mを測る。調査区はこの平坦面の西端とその法面、そして裾部までの範囲である。調査対象地の現況は山林であるが、1960年代までは畠地であったという。

第2節 遺構

調査区のほぼ中央を切り通し状に里道が東西に通過し、調査区を南北に2分割する。そこで便宜的にこの里道を境界として北区・南区と地区分けした。

1. 北区

平坦面西端には神社参道へ続く里道が南北方向に通過し、コンクリート製の井戸が現存する。造構面は標高87.5m前後を測り、中央付近をピークとして南北にわずかに傾斜する。調査区北端付近は西側へ緩やかに傾斜する。調査区内で検出した平坦面の幅は約5mである。西端は崖状となり、裾部との比高差は約2.5~4mである。崖面では石列を断続的に検出した。

調査は平坦面上で造構検出を行うとともに、断ち割りにより土層の堆積状況を観察した。土層はその締まり具合から上下2層に大別できる。上層は、現平坦面を構成するものであり、疊混じりで締まりの弱いものである。厚さは0.7mを測り、それによって西側へ約1.5m拡張している。この盛土によってなされた平坦面上では柱穴、土坑、礫石の可能性のある礫などの造構を検出した。出土遺物から上層の造成は近世頃と推定する。下層は標高86m以下のものであり、愛宕山側からの流土が自然堆積したものと思われ、上層と比較して締まりがある。本来の地形は東から西への緩斜面であったと思われる。自然堆積層内、標高84m付近から土師器小皿片が出土している。下層については調査区の制約により断面観察にとどめて面的には調査を行っていない。

石列

石列1（図版41、写真図版50）

調査区南半部で検出した。標高84.5m前後の斜面で検出し、北区南端から等高線方向に約10m延びる。20~80cm大の礫を並べるもので石積みは行っていない。礫は南半が大きく、北半は小さくなる傾向がみられる。

石列2（図版41、写真図版50）

調査区中央部で検出した。標高85.5m前後で列をなし、長さ1.8m程度を検出した。80cm以下の礫を2、3段積んだものである。平坦面沿いにのびる里道の路肩を保護するものとして設けられたものであろう。

土坑

S K 1（図版44）

調査区北端に位置する。平面は不整円形を呈する。南北1.1m、東西0.8m以上を測り、東側調査区外へ続く。



第4図 調査区配置図

遺構検出面からの深さは0.4mである。土師器小皿（204）、唐津焼皿（205）、備前焼擂鉢（206）が出土している。

S K 2 (図版44)

調査区西半部、S K 1に南接する。平面は不整な隅丸方形を呈し、北西隅付近から溝状にのびる部分をもつ。東側調査区外へ続き、全容は不明である。南北1.0m、東西0.5m以上を測る。遺構検出面からの深さ0.3mである。土師器碗（207）が出土した。

S K 3 (図版42)

調査区西半部、S K 2に南接する。全容は明らかにしえないが、本来の平面形は南東—北西方向に主軸をもつ楕円形になるものと思われる。

S K 4 (図版42)

S K 3と同じ南東—北西方向に主軸をもつ平面楕円形の土坑である。規模は、長径0.3m、短径0.2mを測る。検出面からの深さ10cm程度である。土師器小皿（208）が出土した。

S K 5 (図版43)

全容は明らかにしえないが、本来の平面形は南東—北西方向に主軸をもつ楕円形になるものと思われる。規模は、長径0.7m以上、短径0.5m以上である。検出面からの深さ0.2mである。土師器小皿（209）が出土した。

2. 南区

調査区は、平坦面の端部から崖面におよぶ範囲である。崖面は岩盤が露出している。調査区東側は、里道をはさんで古い石垣が残り、南側は円光寺集落の墓地となっている。平坦面は標高87.0～87.8mであり、南半部にピークをもつ。この平坦面の調査区内での幅は約2.5mである。平坦面の大半は地山であり、盛土により造成されたものではない。上面では遺構は検出できなかった。北端付近で本来の谷部の肩を検出し、谷を埋めるように上下2段にわたり構築された石垣を確認した。またこの石垣は、黄色または黄褐色系細砂、極細砂によつて埋められ、標高86.6～86.8mの平坦面を造りだしている。断面観察では、この整地土層は、南半は水平な堆積状況をみせるが、北半は石垣上から搔き落としたような堆積状況をみせる。この土中からは多量の瓦、土器、鉄器、壇土・炭に混じって出土している。

石垣 (図版47・48、写真図版53～57)

上段

南北方向に2.2m、東西方向に2mで弧状を呈する。50cm以下の角礫、一部川原石と思われる礫を用いて4～5段ではほぼ垂直に積み上げる。高さは最大1mを測る。積み上げられた石積みの他にも、ほぼ同レベルで法面に遊離した礫が散布しているが、崩れたものか、単独のものか明らかではない。裏込め土は地山である岩盤片が多く含み、地山削平の際発生した土を利用しているようである。後述する下段石垣とは一部で重複するが、直接接することはないため、ある程度の時間差をもって構築されたものと考える。

下段

長さ4.5m、西端付近の高さは1.1mを測り、径60cm以下の礫を用いる。東半は30～40cm大の礫を2段、西半は20cm前後の礫を積み上げている。石垣によって得られた平坦面の標高は85.5m前後である。石垣裏込めの土砂は、地山の岩盤を破碎したものが混じる。裏込め内から土師器杯（189）、小皿（196）が出土し、構築は14世紀以降と考える。

第3節 出土遺物

1. 土器 (図版50、写真図版63・64)

189～203は南区北端の瓦淵り付近から出土したものである。189～191は土師器の杯で、回転糸切り底である。底部から口縁部への形状は、内湾ぎみに立ち上がる190と直線的に立ち上がる191がある。189は底部のみだが平高台ぎみに突出している。193～196は土師器の小皿である。底部は回転糸切りで、平底の底部から口縁を短く立ち上げる。193・194は底部を平高台のように突出させている。197は土師器の小皿であり、丸底ぎみの底部から外反ぎみに立ち上がり口縁部に至る。198は色調が他よりも白く、器壁も薄い。京都系土師器であろう。口縁部を1段のナデで仕上げる。199は瓦質の火鉢の破片と思われる。端部に面をもち、外面に菊花文をスタンプする。200～202は備前焼擂鉢。口縁上部を上方に立ち上げて拡張、体部は斜め方向に直線的にのび、内面には放射状に飾られた撻目を施す。200・201の内面は体部と口縁部の境界が不明瞭、202は境界付近に沈線が巡る。203は龍泉窯系の青磁皿である。口縁端部を輪花調に整形する。

204～209は北区土坑から出土したものである。204は土師器の杯である。糸切りの平底から内湾ぎみに口縁部が立ち上がる。205は唐津焼皿である。内面に砂目跡が残る。206は備前焼擂鉢の底部である。撻目による撻目を施す。207～209は土師器で、207は平底の底部のみ残存する。208・209は平底の底部から口縁を短く立ち上げる。

210～214は北区包含層から出土。210は土師器培燒である。底部を欠くが、屈曲して内傾する体部に続き、口縁端部は面をもつ。211は丹波焼を模倣した蜜と思われる。体部に鉄釉を施し、底部付近は無釉である。212・213は備前焼擂鉢である。212の口縁部は直立させ厚みをもつ。外面には沈線が2条巡る。213は底部付近のみ残存し、底部から斜め方向に体部が立ち上がる。内面は使い込まれて摩滅する。214は京焼風の灯明皿で、内面に白濁釉を施す。

215～218は確認調査および周辺採取遺物である。215は須恵器碗である。糸切りの平底から体部が内湾ぎみに立ち上がる。216は須恵器底部、218は弥生土器底部であり、周辺に時代の異なる遺構が存在する可能性を示す遺物である。217は龍泉窯系青磁碗で口縁端部が外反する。無文で器壁は薄い。



第5図 出土土器

2. 瓦

軒丸瓦（T 3～12）（図版51～53、写真図版65・66）

いずれも文様は左巻三巴文であり、珠文の有無で2型式に分類される。ほぼ完存するのは、T 3・4のみで、他は瓦当部のみが出土している。

T 3・5・6は、外区に珠文を施らせるもの。瓦当面の径13.5cmを測る。珠文はその配置から15個前後に復元できる。T 3の凹面側は、玉縁部との境界付近に滑り止めを貼り付ける。周縁の幅1.5cm、高さ1.3cmである。巴頭部は互いの頂部が向き合うように配され、丸みをもって内湾し尾部へ続く。尾部は細長くのび、互いの尾部に接し圓錐状となる。丸瓦部は有段で全長31.1cm、幅13.8cmを測る。凸面は縱方向にミガキ、凹面は縱横10本／1cm前後の単位の布目が見られる。側面は凹面側を大きく面取りする。

T 4・7～12は瓦当面の径13.6cm前後である。周縁は幅1.6cm前後、高さ0.6cm前後と浅い。巴文は盛り上がりに乏しい。巴頭部は互いが背中合わせになるように配され、丸みをもって内湾する。尾部は細長くのびるが、隣接する尾部とは接しない。丸瓦部は有段で全長19cm、幅12.9cmを測る。凸面は縱方向のミガキを施す。凹面はナデを施すが布目や糸切り痕がわずかに残存する。側面は凹面側を大きく面取りし、瓦当部側は軒平瓦の水切りを挟み込むようになっている。また玉縁側には滑り止めを貼り付けた痕跡がある。瓦当部と丸瓦部との接合は、丸瓦部にカキヤブリおよび刺突を行い、接合後に横方向に丁寧にナデを施す。滑り止めの貼り付けも同様で、接合部分にヘラによる斜格子状のカキヤブリと刺突を施し、接合後は粘土を盛り、横方向にナデを施す。

軒平瓦（T 13～17）（図版54・55、写真図版67～69）

瓦当部に「佛日山」と記されたもの、唐草文のあるものの2型式に分類される。完存するものはない。

T 13～16は瓦当部に山号と思われる「佛日山」を記したもの。周縁の高さは0.5cm前後である。平瓦部は、凸面は横方向にナデを行い、滑り止めを貼り付ける。凹面は縱方向にナデを行い、左右の側面に水切りの跡を貼り付ける。T 16は隅軒平瓦である。平瓦部に釘穴があり、その周囲を堤状に盛り上げる。側面には低い水切りがつく。裁断面は未調整である。凹面、凸面とも横方向にナデを施すが、凸面の裁断面付近は縱方向に丁寧なナデを施す。

T 17は瓦当部の一部のみ残存し、全容は不明。下から上へのびる唐草文の配置から左脇区と思われる。

丸瓦（T 18～40）（図版56～65、写真図版70～73・76・77）

有段（T 18～31・34・39）と無段（T 32・33）に大別できる。さらに有段の瓦は、筒部の幅が13cm程度の小型のものと16cm程度の大型のものに分類できる。

小型の瓦は、胴部の長さが22.3cm（T 28）～26.2cm（T 23）と規模に差がある。凸面は縄目タタキの後、縱方向にナデを施すが、4本／1cm程度の縄目が部分的に残存する。凹面には布目と糸切り痕跡が認められ、T 23・36は吊り紐痕が認められる。T 24・28～30・39は型台から取り外した後に、径2.0cm前後の工具を用いて棒タタキを施している。いずれの瓦も広端面側に面取りを行う。側面は凹面側を面取りしているが、全長の長い瓦は面取りの規模が小さい傾向が見られる。T 25は最小の瓦で、復元幅11.9cm、長さ22.0cmである。凹面の玉縁側に滑り止めを貼り付けるものがあり、T 37～39を圓化した。丸瓦の接合部分に刺突を施し、接合後は粘土を盛り、貼り付け後横方向にナデを施す。

大型の瓦は、胴部の長さがほぼ30cm前後である。凸面は縄目タタキ後縱方向にナデを行っているが、部分的に縄目が残存する。凹面には布目や糸切り痕が認められ、T 31には垂れた吊り紐痕が残る。広端面側の面取りはわずかに削る程度である。側面も凹面側の面取りの規模は小さい。このタイプでは凹面に滑り止めを貼り付けたものは確認していない。

無段の丸瓦は、狹縫面側がわずかに残存するだけで、広縫面側を欠き全容は不明であるが、規模から幅13cmの丸瓦の狹縫面側をすばめたものと思われる。ただし出土した2点は端面の幅などが異なっている。凸面は縱方向にミガキ、すばまる狹縫面側は横方向のナデを施す。凹面は、T32は布目が残るもの縱方向にナデを施し、T33は布目と弧状の糸切り痕が残る。側面は凹面側を面取りする。

平瓦（T41～53）（図版66～68、写真図版73～77・87）

出土したものに完形品はないが、長さ30cm程度、厚さ2cm程度を測るものが多い。凹凸両面ともナデで仕上げているが、凸面に撻目タタキ（T43・47）、糸切り痕が残るもの（T45）などがあり、凹面型台を用いて製作されたと思われる。側面は不調整のものも見られるが、概ね凹面側が鋭角をなす。T52は凸面側に滑り止めを貼り付けたもので、軒平瓦の平瓦部かもしれない。

T53は小片であるが、凹面に2行にわたり文字を線刻する。左の3文字は「南無阿□」と判読でき、「南無阿弥陀仏」と六字の名号を記したのである。右の行は1文字のみ確認できるが、判読できない。

鬼瓦（T54～63）（図版69・70、写真図版78・79）

破片が10点出土しているが、接合できるものはない。鬼面は左右の頭部、目・鼻部、下顎部に分けて成形し、地板に貼り合わせて成形しているものと推定する。

T54・55は周縁部付近で、鬼面部分の大半は剥離し、側辺に連珠文が残る。規模から大棟に用いたものとは考えられず、降棟に用いたものであろう。側辺はいずれも直線的で、隅がT54は面取り状、T55は丸みをもつて上辺へつながる。底辺は隅付近が残存するのみだが、浅い削り状となるようである。連珠文の区画上部の形状は、隅の形状に平行している。連珠文の区画は、ヘラ状工具により彫り込み、側辺は直線的、底辺は山型に切り込む。いずれも珠文は7個を数え、竹管によるスタンプである。裏面は周縁部の土手を貼り付け、縱および横方向のナデで仕上げている。この2点は隅部の形状は異なるものの規模や連珠文の形状から同一工人の製作と考える。

T56も周縁部の右下隅である。底辺を欠くが側辺は反りをもって右下隅へ続くと思われる。鬼面部分の大半は剥離しているが、貼り付け前に下地を荒らして粘土の食いつきをよくするよう作業している。上唇の一部と思われる部分と、牙の基部が残存している。連珠文は3個残存する。いずれもヘラ状工具で描き、周囲の区画はない。珠文の間にはヘラによる沈線で髪を表現している。裏面は縱方向にナデ、その後上半部は横方向にナデを施す。

T57は鬼面の右頭部であろう。目の上部にヘラにより眉毛、線刻による花を表現し、角を貼り付ける。その後ヘラで髪を表現し、角の周囲に粘土塊を貼り付けて花に加工する。花の貼り付け前に下地をヘラで荒らして粘土の食いつきをよくしている。

T58は鼻から下顎部の破片である。鼻から歯の部分と、下顎部を貼り合わせたものである。鼻、唇、歯は成形後、丁寧に横方向にミガキを施して仕上げる。下顎部は横方向のナデにより成形した後、ラフな縫ながら、左右均等を意識してヘラによる彫り込みで髪を表現している。

T59・60は髭あるいは髪の一部であろう。T59の表面は、ケズリの後放射状に線刻する。T60の表面は縦方向にナデを施した後、3段に分けて短く縫刻して表現している。いずれも裏面は指頭による荒いナデである。

T61・62は角、T63は牙であろう。いずれも縦方向のナデにより整形し、一部はミガキで仕上げる。

鳥糞（T64～66）（図版71、写真図版80・81）

T64は雁振部を一部欠くもののほぼ完形である。長さ34.8cm、高さ20.0cmを測る。雁振部は復元幅19.8cmで断面形は「く」字状をなし、高さ8.2cmである。雁振部から反りぎみに鳥体部へ続き瓦当部に至る。瓦当は徑

14.3cm、外縁幅2.4cm、高さ0.5cmである。文様は左巻三巴文であり、巴頭部は互いの頂部が向き合うように配され、丸みをもって内渦し尾部へ続く。尾部は細長くのびるが、隣接する尾部とは接しない。外面は雁振部から瓦当部へ縱方向に丁寧にミガキを施す。雁振部の内面は弧状に糸切り痕が残る。

T65・66は瓦当部の破片である。T65の文様は左巻三巴文である。尾部は細長くのびるが、隣接する尾部とは接しない。外縁は幅1.8cm、高さ0.7cmを測る。突出部外面は縱方向にミガキを施す。T66は瓦当外縁の一部が残存する。幅2.0cm、高さ0.5cmを測る。突出部は粘土紐巻上げで製作し、その痕跡が顕著である。

雁振瓦（T67～73）（図版72～74、写真図版82～85・87）

すべて破片であり、玉縁が残存するのはT67のみである。断面はすべて「く」字状を呈し、側面は凹面側が鋭角をなす。凸面は縱方向にミガキ、凹面は布目と糸切り痕が認められる。凹面の広端付近は面取りを行う。高さは6～7cmであるが、T68は8.5cm、T67は9.6cmある。

T67は長さ27.0cm、復元幅18.1cmを測る。また凹面中央付近に入名と思われる4文字程度の文字が縱方向に線刻されるが、破損のため判読不可能である。玉縁寄りの文字は「大」の可能性があり、瓦大工の名を記しているのかもしれない。T72は鳥衾の可能性がある。広端面の側面付近に径0.8cmの釘穴を1孔有つ。

道具瓦、その他（T74～80）（図版74・75、写真図版85～87）

T74・75は種別不明である。いずれも破片であり、全容はうかがえない。いずれも端面の隅を「L」字状に切断し、裁断面をナデで仕上げる。T74は、凸面はタタキを縱方向のナデを施して消している。また離れ砂が認められる。凹面は布目を縱方向のナデを施し消し、端面は面取りを行う。側面は凹面側が鋭角をなす。T75の調整もT74とはほぼ同様である。

T76は細片であり、種別や全容は不明である。表面は縱方向と端面に平行する方向にナデを行い、その後暗文状に文字を記している。文字は2行にわたり、

（　　）郎

□□久

と判読でき、人名を記したのであろう。表面は縦・横方向の粗いナデを施している。

T77～79は面戸瓦であろう。横断面は「く」字状を呈し、一端を屈曲させる。もう一端は丸くおさめるもの（T77）と、面取りを行うもの（T78）の2種がある。凸面は縦または横方向のミガキ、凹面はナデで仕上げている。

T80は種別不明である。両端面を欠くが現存長45.9cmを測る大型の製品である。長方形に伸ばした粘土を断面「コ」字状に折り曲げている。凹面は長軸方向にケズリを行い、立ち上がり部分をナデで仕上げる。凸面は長軸方向にナデを施す。

3. 金属製品

鉄釘（図版76・77、写真図版95・96）

M20～58は南区北端の瓦溜りより出土したものである。完存するものは少ないが、状態のよいものを図化した。いずれも断面方形の角釘で、頭部を折り曲げるものである。

長さは1寸程度の短いもの（M20～26）、3寸程度の長いもの（M27・28・53・57）があるが、2寸程度のものが量的に多い。断面は一辺0.4cm、0.5cm、0.7cmに大別でき、0.5cmのものが多い。

M65～68は北区より出土したものである。いずれも断面は一辺0.4cmを測り、残存状態のよいM67は残存長6.5cmを測る。

その他の金属製品（図版77、写真図版96）

M59～64は鉄釘などの遺物とともに南区北端の瓦溜りから出土したものである。M59は不明鉄製品。下半部は板を縦方向に「く」字状に曲げ、上半部はねじりが認められる。M60は火打金である。山形を呈するタイプで両端が上方に反り上がる。打撃部は直線状である。M61は不明鉄製品。錯影により明確ではないが、断面は三角状を呈するとみられ、なんらかの刃部の可能性がある。M62の側面はねじ状にらせん状の溝がある。M63は楕円形の板の中央に円形孔がある。M64は金槌と思われる。断面形は方形を呈する。

M69・70は北区より出土した。M69は毛抜きと思われる。先端をやや屈曲させ、断面形は長方形を呈する。M70は銅鏡で、表面に「寛永通寶」銘が良好に残存する。背面は無文である。

4. 壁土（写真図版88～94）

南区北端の瓦溜りからは、建物に用いられた可能性のある壁土片が多数出土している。

破片は最も大きなもので $110 \times 85 \times 30$ mmを測る。壁土に関しては、実測は行っていないが、木舞の痕跡が残るもののが多数あり、残存状態の良好なものを選別し、計測と写真で記録した。なお壁土で天地が判別できる破片がないため、白色土の残存する面（外側）に最も近い木舞を縦方向と仮定して観察・記録している。

壁の構造

壁は、壁土と木舞の痕跡が残存し、壁土は内側から荒壁、中塗、上塗の3層で構成される。

残存する木舞は少なくとも3重になっており、その厚みは2.5cm程度と推定できる。したがって残存する壁土と木舞を挟んだ反対側（内側）にも壁土があるはずであり、壁土の厚みを反転すれば、本来の壁の厚さは少なくとも5cm程度はあったと推定する。

荒壁は最も外側となる木舞から0.8～1.3cmの厚さで塗られるものが多いため、厚さは均等ではなく、最も薄い部分で0.5cm、厚い部分で2cmを測るものがある。色調は橙色（7.5YR7/6）で砂粒を含む。また肉眼観察では薬などの混和材の痕跡が認められる。

中塗は、白色土の下地となるもので荒壁の上にきめの細かい土を塗る。色調はにぶい黄橙色（10YR7/4）で厚さは0.2～0.4cmある。

上塗として白色土を塗っている。白色土は最も残存するもので0.2cmの厚みをもつ。白色土の成分について分析を行ったが、その成果については後述する。

木舞

一般的に木舞は竹材が用いられる。しかし今回出土したものは断面形が長方形を呈すること、木目の痕跡が確認できるものがあることから、樹種不明ながら木質の角材が用いられたと判断する。

溝状に残る痕跡の断面は長方形を呈する。横方向の材の幅は1～2cmあり、1、1.5、2cmに集約することが可能かもしれない。ただし残存部分を見る限りでは、その配列は無作為的であり、意図的に使い分けされているようには見えない。縦方向の材の幅は剥離により不明瞭なものが多いが、計測可能なものは0.3～0.8cmである。ただし少數だが1cmを超えるものがある。

木舞の間隔は、縦方向では、最も狭いもので0.5cm、最も広いもので3.5cmある。横方向では、1cm前後を測るものが多いが、1.5cm以上開くものがあり、最大で2.5cm開く。交差部は、縦横の木舞が直接接するものと、木舞を壁土が包み込み、縦横材が接していないものがある。縦横材が接するものについては、ごく一部で紐の痕跡が残るものがあるが、大部分は紐の痕跡が認められない。

白色土

上塗に用いられた白色土について、その成分を知るため当機関の保存処理担当職員岡本一秀が、奈良国立文化財研究所（当時）の機器を使用して、蛍光X線分析およびX線回析分析を実施した。

まず蛍光X線分析により、試料に含まれている元素の定性分析を行った。その結果、珪素（Si）、カリウム（K）、鉄（Fe）の元素が検出された。このうち珪素と鉄は、土に由来すると思われるため、白色土はカリウムの化合物であることが予想された。

次に白色土の結晶質物質を明らかにするためにX線回析分析を行い、最も結晶構造が似ているものを同定していくたが、土に由来する珪素のピーク値の影響からか、はっきりこれといえるものが見つからなかった。して一番近いと思われたのは「白土」（珪酸アルミニウム）であった。

自然科学的分析でも壁土の上塗である白色土の材質は明確にできなかった。白駆としては漆喰が知られるが、これは近世城郭建築の隆盛にあわせて一般的となるもので、本遺跡出土の白色土は地域的、時期的にみて漆喰とすることは困難と思われる。分析試料においても漆喰の主成分である炭酸カルシウムは検出していない。

以上から、消極的ながら、出土した壁土の白色土は、「白土」あるいはそれに類する材質のものと推定する。なお白色土は、出土時は水分を含み比較的軟弱で容易に剥離する状態であった。土中に長時間埋没したことで糊などの性格をもつ物質が劣化したことと考えられるが、本来出土した糠が建物の外壁ではなく建物内的一部に使用された可能性も考えられる。

第4節 小結

「円光寺」に関する考察は第6章で行うが、ここでは出土軒平瓦の「佛日山」、地籍図などに記された「佛日庵」と文献上の「円光寺」の関係について簡単にまとめてみたい。

文献での「円光寺」の初出は建武元年（1334年）赤松円心安堵状、最後は文正元年（1466年）『藤涼軒日録』閏二月六日条である。また天正5年（1577年）の上月合戦では、円光寺付近で合戦が行われたと伝えられるが、「円光寺」についての記述は全くない。『藤涼軒日録』から上月合戦までの間は100年以上あり、「円光寺」が天正年間まで存続していたのかは不明である。近世以降の円光寺村の絵図・地籍図には、出土した軒平瓦の「佛日山」と類似した名称である「佛日庵」が記されている。

今回の調査では、南区瓦溜りを中心に多数の瓦・土器などが出土した。出土遺物は、その年代観から3時期に分類できる。

A期 15世紀後半をさかのばるもので、大型の丸瓦が該当する。出土土器の年代観とも近いと考える。この時期の瓦は千種川流域に所在する赤松氏関連寺院跡出土の瓦と共通する特徴をもつ。

B期 軒平瓦で水切りの縁をもつもの、丸瓦の凹面に施した棒タタキの技法などの特徴から15世紀後半以降と推定する。出土瓦の主体をなし、出土した備前焼擂鉢や青磁碗などの年代観もこれに近い。

C期 鬼瓦や唐草文軒平瓦の技法や特徴など近世まで下る可能性をもつもの。出土土器のうち唐津焼皿、土器焼造などがこの時期に該当するとと思われる。

出土遺物の主体であるB期は、「円光寺」の時期と合致せず、『藤涼軒日録』以降、どちらかといえば上月合戦に近い時期と推定される。これは「円光寺」の名が文献から消えた後にも、この地になんらかの宗教施設があったことを物語る。軒平瓦に記された「佛日山」は山号であると考えるが、それが「円光寺」の山号であるか否かは不明である。もしそうであれば、15、16世紀代に「円光寺」の建物が補修されつつ存続していたか、

「円光寺」の瓦を再利用した建物があったと考えられる。そして遺物が炭・焼土を伴い出土することから、建物は火災により焼失した可能性がある。

C期の瓦は出土量が少なく、B期に継続または同一の範疇に含めることができるもかもしれない。「佛日庵」に伴う可能性をもつ遺物であり、近代まで存続した「佛日庵」の創建時期が近世初頭までさかのほることを示す遺物と考える。

A期の瓦は赤松氏関連寺院に共通する特長をもち、「円光寺」に用いられた瓦の可能性がある。しかし瓦渝りは一括して投棄されたものと思われ、A～C期の遺物が混在している。つまり投棄は16世紀以降になされたもので、「円光寺」廃絶に伴うものではない。同一建物にA期の丸瓦と、B期の丸瓦が同時に使われたか疑問はあるものの、3時期の瓦が同時に使用されていたとするなら、「円光寺」と「佛日庵」が連續性をもつ寺院であると考えることができないだろうか。

発掘調査と平行して行った文献調査の中で、円光寺在住であった故大野タダ氏が作成した「郷土見通り圖 佐用郡久崎村圓光寺」(第11図)を確認した。大野氏は発掘調査の数年前に死去させていたが、当時大野氏は尋常小学校4年生であり、地元住民への聞き取りによって記述したものと推測される。作成時期は大正時代後半から昭和時代初期と推定される。これには太田八幡宮南側に「円光寺址」との記載があり、「現在モ寺屋敷トシテ言ヒ傳ヘテキル 約四十年前迄佛日庵アッタガ今ハ烟トナッテキル 元赤松氏一族上月氏ノ菩提所アッタノ説 現時掛保郡龍野町ニ圓光寺ト云フ寺ガアル 営寺ノ寺号ヲ譲リシモノト云フ」とある。この記載は、大正時代から昭和時代初期頃までは地元に「円光寺」についての伝承が残っていたことを伺えるもので、失われた伝承を記録したものとして貴重な資料である。なお掛保郡龍野町(現たつの市龍野町下川原)に所在する円光寺は、天正6年播州英賀より移転し、改号したものとされ、「円光寺」との関係を実証する資料はない。

明治5年の円光寺村地籍図(第10図)では、太田八幡宮南側に木立に囲まれた1棟の切妻屋根の建物が描かれ「佛日庵」との記載がある。大野氏の記載とあわせると、佛日庵は明治時代初期にはまだ存在し、明治時代中頃に廃絶したものと思われる。赤松氏関連の宗教施設である「円光寺」から「佛日庵」へと変化した過程は不明であるが、村の宗教施設として近代まで存続したことは事実である。

北区の平坦面の断ち割り調査では、平坦面は近世以降に造成された可能性が明らかとなった。開墾に伴う所作と考えられ、少なくとも平坦面の西端付近は、中世段階では扇状地状地形の緩斜面であったと推定される。ただし平坦面東端付近には現況よりも小規模な平坦面があったのかもしれない。南区の平坦面は、地山で人工的なものではない。北端で検出した石垣はこの平坦面を北側へ拡張するように設置したものである。石垣裏込め土内からはA期の土器が出土し、築造時期はB期をさかのほるものと考える。この石垣を覆う瓦などの遺物は、出土状況から石垣の南東側から投入された可能性が高い。その投入元と推定する地点は、現在は藪で、南側は墓地となっているが、低い石垣が方形に巡っている。現況では詳細に地表観察することはできないが、この地点に「佛日庵」が所在していた可能性が高い。明治5年の地籍図では、集落から東に延びる道の延長上に「佛日庵」が記されている。現在調査区を2分している切り通しの里道がこの道に合致すると考えられる。そして「佛日庵」と「円光寺」が連續性をもつものであるならば、平坦面の南半部から東端に近い山裾に「円光寺」に隣接する遺構が遺存するものと思われる。平坦面の大半は開発範囲からはずれ、現状保存される。今後調査の機会があることを期待して待ちたい。

表 6 円光寺遺跡遺物一覧表 (1)

土器

報告No.	地 区	出土遺構	種 別	器 種	法 量 (cm)		
					口 径	器 高	底 径
189	南区	石垣 下段	土師器	杯	— (2.9)	—	(6.2)
190		瓦罐(?)	土師器	杯	— (11.3)	3.4	(5.1)
191	南区	瓦罐(?)	土師器	杯	(11.3)	3.4	(5.4)
192	南区	瓦罐(?)	土師器	小皿	(9.2)	(5.9)	(5.4)
193	南区	瓦罐(?)	土師器	小皿	(7.1)	1.8	(4.6)
194	南区	瓦罐(?)	土師器	小皿	(7.4)	(2.0)	5.1
195	南区	瓦罐(?)	土師器	小皿	7.5	1.4	5.4
196	南区	石垣 下段	土師器	小皿	(7.1)	(11.6)	(4.9)
197	南区	瓦罐(?)	土師器	小皿	(5.4)	(2.6)	(3.0)
198	南区	瓦罐(?)	土師器	皿	(14.9)	(2.2)	(9.1)
199	南区	瓦罐(?)	瓦陶土器	火鉢	—	(2.0)	—
200	不明	—	便前後	擂鉢	(23.5)	(5.5)	—
201	不明	瓦罐(?)	便前後	擂鉢	(26.6)	13.0	(14.0)
202	南区	瓦罐(?)	便前後	擂鉢	(7.1)	13.1	(16.4)
203	南区	瓦罐(?)	南同	皿	(13.1)	(2.6)	—
204	北区	SK1	土師器	皿	(12.3)	3.3	(6.7)
205	北区	SK1	唐津燒	皿	—	(1.9)	(4.6)
206	北区	SK1	備前燒	擂鉢	—	(6.2)	(14.6)
207	北区・南区	SK2・瓦罐(?)	土師器	椀	—	(2.1)	(6.4)
208	北区	SK4	土師器	小皿	(8.4)	1.5	(5.8)
209	北区	SK5	土師器	皿	—	(2.1)	6.4
210	北区	白金留	土師器	碗	(30.9)	(5.7)	(30.8)
211	北区	白金留	特殊陶器	甕	—	(7.4)	(6.7)
212	北区	白金留	便前燒	擂鉢	(37.4)	(11.3)	—
213	北区	白金留	便前燒	擂鉢	—	(4.0)	(13.9)
214	北区	白金留	芦崎圓窯	灯明皿	9.0	2.0	3.4
215	埋藏調査	—	須磨路	椀	(14.1)	4.6	(6.8)
216	不明	—	須磨路	椀	—	(1.4)	3.4
217	埴跡調査	—	青磁	碗	(13.6)	(3.6)	—
218	埴跡調査	—	勞生土器	甕	—	(2.5)	(5.4)

瓦

報告No.	地 区	出土遺構	種 別	器 種	法 量 (cm)		
					高 度	幅	厚 度
T3	南区	瓦罐(?)	瓦	軒瓦瓦	(31.1)	15.8	2.4
T4	南区	瓦罐(?)	瓦	軒瓦瓦	25.4	15.0	2.6
T5	南区	瓦罐(?)	瓦	軒瓦瓦	—	—	—
T6	南区	瓦罐(?)	瓦	軒瓦瓦	—	—	1.5
T7	南区	瓦罐(?)	瓦	軒瓦瓦	—	—	—
T8	北区	鉢	瓦	軒瓦瓦	—	—	1.5
T9	北区	鉢	瓦	軒瓦瓦	—	—	1.4
T10	北区	鉢	瓦	軒瓦瓦	—	—	1.5
T11	南区	瓦罐(?)	瓦	軒瓦瓦	—	—	—
T12	南区	瓦罐(?)	瓦	軒瓦瓦	—	—	—
T13	南区	瓦罐(?)	瓦	軒瓦瓦	(19.2)	24.1	1.6
T14	南区	瓦罐(?)	瓦	軒瓦瓦	(19.4)	(20.0)	2.2
T15	南区	瓦罐(?)	瓦	軒瓦瓦	(16.6)	(17.0)	1.7
T16	南区	瓦罐(?)	瓦	輪軸車軸	(19.9)	(20.8)	1.8
T17	南区	不明	瓦	軒瓦瓦	(3.5)	(5.0)	2.3
T18	南区	瓦罐(?)	瓦	丸瓦	35.9	18.6	2.7
T19	南区	瓦罐(?)	瓦	丸瓦	34.9	18.6	2.1
T20	南区	瓦罐(?)	瓦	丸瓦	34.6	15.2	2.0
T21	南区	瓦罐(?)	瓦	丸瓦	34.9	16.4	2.2
T22	南区	瓦罐(?)	瓦	丸瓦	(30.2)	(16.3)	2.2
T23	南区	瓦罐(?)	瓦	丸瓦	32.3	13.3	2.2
T24	南区	瓦罐(?)	瓦	丸瓦	27.8	12.5	2.0
T25	南区	瓦罐(?)	瓦	丸瓦	26.1	12.4	2.0
T26	南区	瓦罐(?)	瓦	丸瓦	31.5	13.7	2.1
T27	南区	瓦罐(?)	瓦	丸瓦	28.5	13.7	2.6
T28	南区	瓦罐(?)	瓦	丸瓦	26.9	13.5	2.1
T29	南区	瓦罐(?)	瓦	丸瓦	27.4	13.9	2.5
T30	北区	鉢	瓦	丸瓦	(22.6)	12.6	2.2
T31	北区	鉢	瓦	丸瓦	(18.2)	15.9	3.1
T32	南区	瓦罐(?)	瓦	丸瓦	(11.6)	11.9	1.5
T33	北区	鉢	瓦	丸瓦	(15.1)	(8.2)	2.5
T34	南区	鉢	瓦	丸瓦	(20.4)	16.1	2.2
T35	南区	瓦罐(?)	瓦	丸瓦	(24.7)	(14.0)	2.4
T36	南区	瓦罐(?)	瓦	丸瓦	(20.7)	13.1	2.0
T37	南区	瓦罐(?)	瓦	丸瓦	(17.7)	13.7	2.5
T38	南区	瓦罐(?)	瓦	丸瓦	(19.8)	12.6	2.2
T39	南区	瓦罐(?)	瓦	丸瓦	(22.7)	13.6	2.4
T40	南区	瓦罐(?)	瓦	丸瓦	(19.1)	(13.1)	2.3
T41	北区	鉢	瓦	平瓦	33.6	(24.3)	2.6
T42	南区	瓦罐(?)	瓦	平瓦	31.0	23.9	1.7
T43	南区	瓦罐(?)	瓦	平瓦	29.3	22.8	1.9
T44	南区	瓦罐(?)	瓦	平瓦	30.2	22.4	2.0
T45	南区	瓦罐(?)	瓦	平瓦	(14.1)	(20.2)	1.8
T46	南区	瓦罐(?)	瓦	平瓦	(26.1)	(17.7)	1.7
T47	南区	瓦罐(?)	瓦	平瓦	(25.1)	(18.6)	1.5
T48	不明	—	瓦	平瓦	(15.8)	(22.4)	2.0
T49	南区	瓦罐(?)	瓦	平瓦	(24.3)	23.9	2.5
T50	北区	鉢	瓦	平瓦	(10.3)	(10.3)	2.3
T51	南区	瓦罐(?)	瓦	平瓦	(23.3)	(13.8)	1.6

表3 円光寺遺跡遺物一覧表(2)

瓦

報告No.	地 区	出土遺構	種 別	器 種	法 量(cm)		
					長さ	幅	厚さ
T53	南区	瓦塀り	瓦	平瓦	(11.3)	(11.9)	1.7
T54	南区	瓦塀り	瓦	兔瓦	(29.1)	(14.9)	2.0
T55	南区	瓦塀り	瓦	兔瓦	(27.6)	(12.8)	2.3
T56	南区	瓦塀り	瓦	兔瓦	(14.6)	(7.3)	4.0
T57	南区	瓦塀り	瓦	兔瓦	(19.7)	(15.2)	2.4
T58	南区	瓦塀り	瓦	兔瓦	(12.4)	(16.7)	4.2
T59	南区	瓦塀り	瓦	兔瓦	(4.1)	(6.5)	1.7
T60	南区	瓦塀り	瓦	兔瓦	(5.4)	(5.6)	1.0
T61	南区	瓦塀り	瓦	兔瓦	(7.8)	2.8	1.6
T62	南区	瓦塀り	瓦	兔瓦	(6.9)	3.2	2.3
T63	南区	瓦塀り	瓦	兔瓦	(4.0)	(1.9)	1.5
T64	南区	瓦塀り	瓦	鳥糞	(34.8)	20.1	—
T65	南区	瓦塀り	瓦	鳥糞	—	—	—
T66	不明	不明	瓦	鳥糞	(5.1)	—	1.6
T67	南区	瓦塀り	瓦	繩目瓦	30.8	(18.1)	2.1
T68	南区	瓦塀り	瓦	繩目瓦	(23.5)	(21.4)	2.2
T69	南区	瓦塀り	瓦	繩目瓦	(21.6)	(12.3)	2.2
T70	南区	瓦塀り	瓦	繩目瓦	(14.4)	(13.5)	2.1
T71	南区	瓦塀り	瓦	繩目瓦	14.3	(12.9)	1.9
T72	南区	瓦塀り	瓦	繩目瓦	(26.6)	(12.6)	2.7
T73	北区	不明	瓦	繩目瓦	(10.6)	(5.6)	1.9
T74	南区	瓦塀り	瓦	道具瓦	(14.7)	(14.7)	1.7
T75	南区	瓦塀り	瓦	道具瓦	(9.6)	(5.4)	1.5
T76	南区	瓦塀り	瓦	道具瓦	19.4	18.4	1.7
T77	東区	瓦塀り	瓦	道具瓦	5.2	6.6	1.5
T78	南区	瓦塀り	瓦	道具瓦	(8.0)	(9.6)	1.6
T79	南区	瓦塀り	瓦	道具瓦	(45.9)	17.8	2.8

金属製品

報告No.	地 区	出土遺構	種 別	器 種	法 量(cm)		
					長さ	幅	厚さ
M20	南区	瓦塀り	鉄製品	釘	(2.6)	0.8	0.3
M21	南区	瓦塀り	鉄製品	釘	(3.6)	0.8	0.5
M22	南区	瓦塀り下層	鉄製品	釘	(3.7)	0.6	0.4
M23	南区	瓦塀り	鉄製品	釘	(3.4)	1.1	0.5
M24	南区	瓦塀り	鉄製品	釘	(4.1)	(0.8)	0.4
M25	南区	瓦塀り	鉄製品	釘	(3.3)	(0.7)	0.5
M26	南区	瓦塀り	鉄製品	釘	(3.7)	(0.8)	0.4
M27	南区	瓦塀り	鉄製品	釘	10.2	0.9	0.7
M28	南区	瓦塀り下層	鉄製品	釘	(8.3)	6.9	0.5
M29	南区	瓦塀り	鉄製品	釘	(3.1)	(1.1)	0.4
M30	種別調査	不明	鉄製品	釘	(4.3)	(0.7)	0.4
M31	南区	瓦塀り	鉄製品	釘	(2.6)	1.1	0.4
M32	南区	瓦塀り	鉄製品	釘	(4.1)	(0.7)	0.4
M33	南区	瓦塀り	鉄製品	釘	(5.2)	0.7	0.4
M34	南区	瓦塀り	鉄製品	釘	(5.9)	1.2	0.5
M35	南区	瓦塀り	鉄製品	釘	(3.0)	1.0	0.5
M36	南区	瓦塀り	鉄製品	釘	4.6	2.4	0.4
M37	南区	瓦塀り	鉄製品	釘	(5.2)	1.1	0.5
M38	南区	瓦塀り下層	鉄製品	釘	(6.6)	1.1	0.5
M39	南区	瓦塀り下層	鉄製品	釘	(4.4)	1.2	0.6
M40	南区	瓦塀り	鉄製品	釘	(4.1)	0.8	0.6
M41	南区	瓦塀り	鉄製品	釘	(6.2)	(0.9)	0.5
M42	南区	瓦塀り	鉄製品	釘	(6.0)	0.5	0.5
M43	南区	瓦塀り	鉄製品	釘	(5.0)	1.0	0.4
M44	南区	瓦塀り	鉄製品	釘	(5.8)	1.6	0.4
M45	南区	瓦塀り	鉄製品	釘	(2.3)	0.9	0.5
M46	南区	瓦塀り	鉄製品	釘	(3.3)	0.9	0.4
M47	南区	瓦塀り	鉄製品	釘	(3.5)	1.6	0.5
M48	南区	瓦塀り	鉄製品	釘	(4.3)	(1.0)	0.4
M49	南区	瓦塀り	鉄製品	釘	(4.1)	1.1	0.5
M50	南区	瓦塀り	鉄製品	釘	(5.4)	1.2	0.4
M51	種別調査	不明	鉄製品	釘	4.9	1.0	0.5
M52	種別調査	不明	鉄製品	釘	(4.3)	1.1	0.7
M53	南区	瓦塀り	鉄製品	釘	(8.4)	1.5	0.5
M54	南区	瓦塀り下層	鉄製品	釘	(4.4)	(0.5)	0.4
M55	南区	瓦塀り下層	鉄製品	釘	(3.7)	0.4	0.4
M56	南区	瓦塀り下層	鉄製品	釘	(6.4)	(0.7)	0.7
M57	南区	瓦塀り	鉄製品	釘	(7.1)	0.9	0.7
M58	南区	瓦塀り下層	鉄製品	釘	(2.4)	0.5	0.3
M59	南区	瓦塀り	西鉄品	不明	(6.0)	1.2	0.6
M60	南区	瓦塀り	鉄製品	大判金	(4.5)	(1.3)	0.3
M61	南区	瓦塀り	鉄製品	不明	2.8	9.0	1.0
M62	南区	瓦塀り	鉄製品	不明	3.0	3.2	1.0
M63	南区	瓦塀り	鉄製品	建築材	5.4	4.1	0.2
M64	南区	瓦塀り下層	鉄製品	金槌	5.2	2.4	2.0
M65	北区	笠置層	鉄製品	釘	(4.0)	0.7	0.4
M66	北区	笠置層	鉄製品	釘	(4.1)	0.7	0.4
M67	北区	笠置層	鉄製品	釘	(6.5)	(1.2)	0.3
M68	北区	笠置層	鉄製品	釘	(3.1)	1.0	0.4
M69	北区	笠置層	鉄製品	手括	6.8	0.7	0.5
M70	北区	—	鉄製品	鉄質	直径2.4	—	0.1

*釘の値は概算。

第5章 円光寺古墳

1. 概要

円光寺古墳は円光寺集落の南端、山裾に位置する。現状では国道373号線によって分断されているが、本来は愛宕山から続く斜面であると思われる。当該箇所は古くから里道沿いの崖面に石室材と思われる礫が露頭し、損壊著しい横穴式石室と推定されていた。調査時の現況は雑草の繁茂する荒蕪地である。

2. 地形・土層

調査区は北辺の標高74.2m付近をピークとして南へ傾斜し、標高73m前後を境として緩斜面に変換する。調査区内における南北の比高差は約1.8mである。東側は山塊から派生する黄褐色礫土（地山の岩盤）を検出し、西へ傾斜している。調査区中央から西半にかけては、ほぼ水平な堆積をみせる。堆積土の中には古墳時代以降の須恵器・土師器の破片を包含していた。

3. 遺構（図版49、写真図版60～62）

遺構検出は地山直上で行ったが、周溝や石室掘方など地山を掘り込んだ痕跡は全く確認できなかった。

礫群

長さ8.5m、幅2.5mの範囲に21点の礫が帶状に分布する。北端の礫と南端の礫は約1mの比高差がある。礫の最大のものは1.6×1.3mあるが、大半は長さ0.6～0.7m、幅0.5m前後を測るものである。礫は組まれた状態や地山上に据え置かれた状態は認められない。斜面を北側からずり落としたような状況で、堆積土のうち最下層の中に浮いた状態で検出されている。

柱穴

地山直上で検出した。調査区北半で1基、南半で2基検出した。いずれも柵や掘立柱建物を復元できない。

4. 小結

現状においては、本調査区内で検出した礫群は、古墳のものとの確証を得ることはできなかった。少なくとも調査区付近の国道部分では敷設時に山側を大規模に掘削する工事がなされたようには見えず、工事の際発生した礫を斜面下に投棄したものとは考えがたい。また遺物包含層からは実測しえなかつたが、古墳時代以降の須恵器・土師器が複数出土している。これら遺物も上方から墜落とされたと仮定すると、これら遺物が本来あった遺構・包含層を想定すべきであるが、山側から斜面にあたる場所では集落などの存在は想定し難く、このような立地である程度の遺物の出土を考慮すれば、古墳が所在したとすることに矛盾はないだろう。地元住民への聞き取りでも国道の東側に古い塚があったとの伝承があったとのことである。

平瀬遺跡では古墳時代の集落も検出しているが、その集落の墓域は確認されていない。対岸の山裾にその墓域を想定できるものの、その遺構は確認されていない。検出状況などから推測して、調査区で出土した礫および遺物は付近に所在した古墳から移動し、集積されたものと現時点では指摘するにとどめたい。

第6章 調査のまとめ

第1節 平瀬遺跡の集落

1.はじめに

平瀬遺跡・円光寺遺跡は昭和59年度の圃場整備調査および今回の調査によって、概要が明らかになった。この一連の調査によって、平瀬遺跡は佐用川によって形成された小規模な平地一帯に広がること、円光寺遺跡は集落を見下ろす高台に寺院が存在したことが明らかになった。

具体的には平瀬遺跡の今回の調査では縄文時代後期および弥生時代前期の土器、古墳時代の集落や、焼土痕跡、奈良時代の土器、中世の大規模な集落跡が検出された。そして、圃場整備調査では13~14世紀の集落が検出された。一方、円光寺遺跡では今回の調査で14~16世紀の瓦・土器が出土し、石垣・瓦溜りを検出した。圃場整備調査では奈良時代の鍛冶炉の可能性がある土坑のほか、溝・柱穴などが検出され、多くの土師器・須恵器が出土した。これらの調査を通じて両遺跡を含む円光寺が古くから開け、人々と人々が生活を行ってきた重要な場所であることが明らかになった。

ここではこれらの調査成果のうち、今回最も注目された中世集落について検討を行う。そこでまず、平瀬遺跡の集落について検討し、統いて円光寺遺跡の成果をあわせ、両遺跡が明らかにした地域史について述べる。

2. 集落の概要

集落の時期は出土土器からすると13世紀~17世紀の期間にわたる。しかし、今回調査を行ったI~IV区では、既述のように14~17世紀頃の建物が中心となり、調査区の遺構の大半がこの期間のものと考えられる。

一方、圃場整備調査（昭和59年）では13世紀代の遺物も多く含まれ、14世紀までの遺物で占められることから13~14世紀の期間が中心時期となる。つまり、14世紀を境にして、圃場整備調査の地点から今回の調査区である西側の川に面した場所へ集落が移動したと思われる。

平瀬遺跡のI~IV区では合計53棟の掘立柱建物が検出された。これらの建物は調査区全体に広がるが、状況から見て集落域はさらに東側に延びる。加えて圃場整備の調査区の状況からすると、平坦地全体に集落が広がっていた可能性も示唆される。一方、面的な広がりに加えて、建物に近接するものや重なるものが多いことからすると、本遺跡は狭隘な佐用川の川岸に密集して長期間に渡り營まれたことが推測される。

平瀬遺跡の2ヵ年の調査で検出された柱穴の数は、前述のとおり3000基弱に達する。これらの柱穴群はもちろん同時に存在したわけではない。多くの建物が同じ場所で建替えられたために、結果としてこのような密集した状態が生まれたものと推測される。第6図には建物群の概念図を掲載した。例えばI区S B 1・2では重なる建物が検出され、S B 2→S B 1への建替えがP 29の切り合いから明らかである。さらに検出された建物群には梢円形のものや柱芯が複数見つかるものが存在することから、同一場所で何回も建替えが繰り返されていることがわかる。同じことはI区S B 4・5・11、II区S B 20~23、同S B 27・29・30、IV区S B 51・52・55・63、同S B 54・56・59、同S B 58・60~62などでも顕著である。これらの傾向は、一定の場所ごとに敷地の設定があることをうかがわせるもので、本集落の構造を検討するうえで大きな手がかりとなる特徴である。

さらに、今回検出した柱穴は削平された遺構面を考慮すると、消滅したものが多いと推測される。このためか復元した建物の周囲には多数の柱穴がありながら建物の並びに認識できなかつたものが多い。このため、復元例の建物以外に多くの建物が存在したことは認識しておかなければならぬ。従って、復元例の建替え回数

のみがその場所の建物の継続時間を表すものではないことを、ここで断っておきたい。

このため詳細については地点ごとに明らかにはできないが、おおむね調査区内の集落は、長期に渡って建物が継続して建てられ、14~17世紀前半の間、維持されたものと理解しておきたい。

ただし、遺構周辺から出土した遺物の少ないことからすると、集落の営まれた時間に比べて消費された生活用品の少なさは顕著であった。これは包含層を削平されたことによる要因も大きいと思われるが、遺構内部からの遺物の出土も少数に留まつたことを考えると、本集落の住人の階層を物語る特徴といえる可能性がある。

3. 建物構造について

建物規模

建物規模はSB36の80.0m²やSB20の78.4m²（本報告では建物の面積はすべて庇を含めたものを使用した。これは建物の敷地面積全体の規模を比較するほうが有効と考えたためである。）などの大型のものや、SB66の18.0m²などの小型のものまで大小さまざまな建物がある。規模別に見ると70~80m²が4棟、60m²台が2棟、50m²台が4棟、40m²台が12棟、30m²台が6棟、20m²台が14棟、10m²台が8棟、10m²未満のものが1棟となる。建物すべての平均値は36.5m²であるが、全体的には40~20m²台に集中する傾向をもつ。ただ、残念ながら時期ごとの推移は個別の建物の時期を特定できないため厳密にはいえない。

中世集落で有名な草戸千軒町遺跡⁽¹⁾ではⅠ期（13~14世紀初頭）の建物が最大規模71.68m²、最小規模17.82m²、平均42.73m²、Ⅱ期（14世紀）が最大規模146.16m²、最小規模4m²、平均27.40m²、Ⅲ・Ⅳ期（15~16世紀初頭）が最大規模64.20m²、最小規模5.67m²、平均22.25m²と推移し、建物が小型化する傾向が見られ、15~16世紀には最も小規模になる。兵庫県下でも13世紀代には100m²を越す建物が平均的な集落にも見られるが、14世紀を境に建物が小規模になる傾向がある。この点からいえば本集落の建物も、中世後半の一般的な集落の傾向に符合するものといえる。

建物の類型

調査区の制約や検出状態などから、構造が明確な建物は35棟である。これらの建物は様々な構造や規模を持つが、中世集落でよく見かける柱間が2~3mで基盤目状に整然と並ぶ建物は意外と少ない。その一方で全体に小型で柱間の狭長が大きいものや、並びの悪いものが目立ち、中小規模の雑多な建物が多い印象である。また、完全な総柱建物になるものも少なく、大半が側柱、あるいは中抜けの総柱と呼べる類のもので占められた。庇も多く建物に見られたが、側通りの柱穴のうち、柱間が他の辺より狭いものを庇としたため、必ずしもこの部分が身舎の付属構造であるとは言い切れない。また、たとえ庇としても、これらは下屋部分を支える柱群と思われ、縁側などを構成する廊と呼ぶべき様なものではないと判断される。このように、今回の建物群は中世前期の集落とはやや構造を異にする。

次に建物を類型化し検討を行う。平瀬遺跡の建物は平面構造から分類すると以下のように分類が可能である。

Ⅰ類 梁行が3間以上の建物で総柱傾向のもの。

Ⅱ類 梁行が3間以上であるが側柱傾向のもの。東柱が少なく総柱を意識していないものもこの類に含めて考える。

Ⅲ類 梁行が2間（1辺が2間のものも含む）で総柱傾向のもの。

Ⅳ類 梁行が2間（1辺が2間のものも含む）で側柱のもの。

I類はA、規模の大きいⅠ区SB1・2・4（50.1m²）・5（49.8m²）、Ⅱ区SB20（78.4m²）、SB21（76.5m²）、SB36（80.0m²）、25（71.2m²）などと、BのⅣ区から検出されたSB51・52・56・59などのように20m²

台前後の方形に近い一群の2つに分けられる。

規模の大きなものではSB20以外は純柱ではないが、いずれも純柱傾向にある建物として評価できる。なお、SB21は北西側の東柱に欠けるものが多いが、周辺は柱穴の深度が浅いため、削平によって失われた可能性が大きい。従って、当初は純柱に近いものであったと推定される。

この一方、20m²前後のものは全体に柱間が2m未満と短いものが多く、純柱傾向をもつが平面形や柱並び、さらに柱間などにゆがみや狭長が認められる。I類Aは中世前半の純柱タイプで屋敷の主屋に見られるタイプである。I類Bは柱間が短く小型の建物である。中世前半にはあまり見ないタイプの建物である。

II類はI区SB7(51.9m²)、II区SB22(40.8m²)・23(58.3m²)・27(65.9m²)、IV区SB50(38.0m²)・55(23.0m²)などのように東柱が少なく純柱を意識していないものである。規模的には中規模以下の建物で占められる。

III類はI区のSB3(46.2m²)・6(18.0m²)・9(42.0m²)・10(46.2m²以上)・11(60.4m²)・13(47.0m²)、II区のSB26(33.1m²)・29(17.7m²)・30(23.8m²)・31(18.8m²)・33(23.6m²)・34(22.0m²)などがある。これらの建物で50m²前後になるものは庭が付くものが多い。

IV類はII区SB32・35・39、IV区SB53・54・57・58・60・61・62などである。最大のものはII区SB32の44.6m²であるが、おおむね小型の建物が多い。

4. 集落構造

中世の遺跡群を観察すると稠密に検出された遺構群の中で、III区が空白域となることが必ず目に止まる⁽²⁾。この地区に沿って両側のI・II区では柱穴が密集しており多數の建物が建てられるが、III区はこれとは対照的である。この空白域は現在の農道に当たるが、地形図を確認すると國場整備以前もほぼ同一の場所が畔道であったようである。さらに、円光寺村地籍図(第9・10図)にもその存在が描かれており、北側の片木山の中腹に存在した祠(現在は跡地が残される)に通じる道であることがわかる。

そして、I・II区ではこの道に面した建物(A集落)が多く検出された。多くが妻側を道路に向けて建っており、街区状の構造を持つ印象を受け1つのまとまりをもつ。

一方、II区南側とIV区では道よりも川に面して建物が建つ(B集落)。これも一定の間隔を置きながら、妻側を南に向けて建っており、1つの街区を形成するような構造を持つ。

このため集落は2つのグループに大きく分けられ、両者が調査区周辺の構造を規定していると考えてよさそうである。そこで、集落の検討に当たって2つの集落グループから考察を進めてみることにする。

A集落

A集落の道路についてもう少し検討しておきたい。航空写真(写真図版1)に掲れば、この道路は円光寺集落の内部を通る道(後述)に通じるが、この道は絵図の表現に従えば、円光寺の集落を南北に貫き、南側は久崎に向けて通じる、村の中心となった重要な道であったことが読み取れる。絵図で見ると(第9・10図)川岸でやや横にずれるものの、ほぼ直線で平瀬から川を橋で渡って円光寺に繋がる。つまり、現在の円光寺橋が大正8年に架橋される以前は、この道路が平瀬と円光寺を結ぶ軸線であったと考えられる。一方、この道路を集落中ほどで東に折れると円光寺の境内に登る直線の参詣道となる。つまり、円光寺の集落はこの南北に通る幹線道と、円光寺へ登る参詣道によって、集落の中心部分の構造が規定されるようである。そして、平瀬の集落構造もこの道路の延長に位置するため、この道路が集落構造を規定したことは疑いがないだろう。つまりこの道路によって、村の景観が決定されたと考えができるのである。



第6図 平瀬遺跡集落の概念図

つまり、平瀬遺跡Ⅲ区の道路は中世から現代に至るまで継続して使われてきたが、その道は円光寺集落の軸線となってきた重要な道であった。このためⅢ区の道路周辺に並ぶ建物群は平瀬地区の幹線道に並ぶ集落だったといえるのである。

次に、この道路と集落との関係を検討してみたい。調査区の全体図を見て特徴的なのは、道路に隣接する大半の建物が梁行側（妻側）を道路に面して並ぶ状況が見て取れる点である。建物の軸線は北からⅠ区SB1・2・12・13・4・9・10、Ⅱ区SB37・36・21・37・20がほぼ直行する。さらに、Ⅱ区の南側では軸方位がやや傾くもののSB22・23・34などが道路に面して建っている。ただ、Ⅰ区側では道路際ないし近接した場所に建物が立つが、Ⅱ区側のSB21・20・22・23では4mほどの間隔を置いて建物が建つ。ただし、この点についてはⅡ区側の建物と道路の間の空間にも柱穴が密集しているため、建物が全くなかったと考えることは難しいが、建物復元はできなかった。この空間にはSK1・2などの焼土坑も検出されており、鍛冶工房などのあった可能性がある。従って、実証はできないものの建物の下屋などの簡易な構造の建物が延びて、実際には道路に面して建物が並ぶ景観であったと考えておきたい。

さらに建物の並びを整理すると、Ⅰ区側では北からSB1・2とSB13とSB4とSB9とSB10の5つの敷地に建物が重なって検出され、この範囲を超えて建物が建つことは小規模建物以外には認められない。Ⅱ区側ではSB36・37・38とSB20・21とSB22・23とSB34の4つに大きく分かれて建物がほぼ同一場所で建っていたようで、建替えが行われた場合でも同一範囲での建替えが行われる。ただし、SB36・37・38とSB20・21では一部が、SB20・21とSB22・23では建物の範囲が大きく重なるなど屋敷地の多少の変動はあったようである。ただ、基本的には長期にわたって屋敷地が概ね固定しているが、一部では屋敷地の移動も行われたようである。さらに、Ⅱ区南側では建物の軸にずれが認められ、集落の構造に変動があったことを窺わせる。

いずれにしても、これらの敷地については各建物が示す場所が屋敷地として機能したと考えられる。このため、Ⅰ区SB1・2周辺を屋敷地A、同じくSB12周辺を屋敷地B、SB4周辺を屋敷地C、SB9周辺を屋敷地D、SB10周辺を屋敷地E、Ⅱ区SB36・37・38周辺を屋敷地F、SB20・21周辺を屋敷地G、SB22・23、SB34周辺を屋敷地Hとして以下検討を進めた。

道路に面した各屋敷地の間口の幅は（間口は互いの建物範囲のおおよその中間点を取った。いずれにしても正確な屋敷地は不明であるので、この数値は概ねの傾向を見るものである。屋敷地A8.0m以上、同B7.8m、同C10.6m、同D7.8m、同E10m以上、同F14.5m以上、同G14.5m以上、同H8.0m前後である。

さらに屋敷地の奥行きであるが、Ⅰ区側でみると屋敷地AのSB14より西側では柱穴の密度が著しく希薄になり、屋敷地CのSB6より西側は徐々に下り傾斜の地形となっている。このため概ねや敷地A～Cに関しては調査区の範囲が奥行きと考えられ、屋敷地D・Eに関しては地形の関係から徐々に奥行きが短くなっていると推測される。Ⅱ区側の屋敷奥は調査区の関係から分析が難しいが、SB20の東側ではSB24・28が建つあたりまでが屋敷地として機能したと推定される。

B 集落

ここまで道路に面した建物を検討してきたが、Ⅱ区の南側とⅣ区では川に面して長方形で小型の建物や、柱間と柱並びがまちまちな建物が多く並ぶ。これも平瀬遺跡の集落の大きな特徴といえるだろう。Ⅱ区のSB33・31・39とⅣ区のSB58・60・62・64・66などがそれであるが、これらには重複があり、その重なりを観察すると先の建物群と同様に一定の敷地の中で建替えが繰り返されている。それらをグループごとに見ると敷地AがSB31・33、敷地BがSB39、敷地CがSB58・60・62、敷地DがSB64・65、敷地EがSB66の5つに大別できる。これらの建物は小型の建物が多く、川岸からは2～5mほど入った場所に建てられる。このような景

観は『一遍上人絵伝』に描かれた備前福岡市の景観にも共通する⁽²⁾。例えばSB58・61・62は備前焼窯が置かれた簡易な屋根掛けの建物に類似している。

一方、SB31はやや陸側に入るが岸の移動などを考慮すればこの建物も川に面した小屋と考えられ、位置や建物構造からSB33に前後して建てられたと思われる。この場合、やや敷地が敷地Bのほうに重なるが微妙な護岸の移動などで敷地の範囲の移動があったものと思われる。一方、II区西側であるが柱分布からすると、護岸の出入りで若干浸食を受けているものと思われ、さらにもう1区画敷地が存在した可能性があり、例えばSB35などは柱並びが西側に統く可能性もある。

さらに建物群を観察すると、川に面した建物群の背後にこれらの建物に対応するように、建物群が並ぶ。つまり、敷地Aの背後にはSB25・35など、敷地Bの背後にはSB27・29・30、敷地Cの背後にはSB56・59、敷地Dの背後にはSB50（敷地Eは調査区外のため不明）といった具合である。またその奥側、つまり北側背後にも建物が南北軸に並ぶ敷地Bの背後にはSB32とその背後にSB24・28、敷地Cの背後にはSB53・54・55とその背後にSB52・61・63がそれぞれ建っている。

つまり、川に面したB集落は小型の“小屋”のような建物が川に面して建ち、その奥に住居的な建物が建ち、長方形の敷地ごとにセットで配置される構造となることが見えてくる。

各敷地は崖状になった50cm前後の段差を持つ川岸に面するが、敷地Cのように石段を持つものが認められ荷揚げのための施設も設けられていた。これらの景観はこの場所が小規模ながら川津として機能したことを窺わせてくれる。

以上のように、平瀬遺跡の集落はそれぞれが無秩序に密集するのではなく、狭いながらも道路に面したA集落と川に面したB集落の2つの構造からなることが明らかとなった。さらに、A集落は大型の建物を前面に配置するが、B集落では小屋を川に面して配置する独特の構造を持つ。

C集落

平瀬遺跡ではさらに圃場整備の調査で集落が検出された。残念ながらこの調査によって検出された建物の詳細は明らかにできないが、調査区内は数棟の建物群で構成されていたものと思われる。このためこれをC集落とした。また、この時の調査では遺構とともに多くの遺物が出土しており、コンテナ数十箱分の土器が残されている。出土遺物には土師器中皿・小皿・杯・壺・羽釜、瓦質土器羽釜、須恵器小皿・碗・鉢、常滑焼甕、瀬戸焼卸皿、中国青磁碗、白磁などがみられた。量とともに器種においてもバラエティーに富み、今回の調査区を圧倒する内容を持つ。そして、これらの遺物は大半が土器通り（図版7）からの出土だという。

一方、A・B集落から出土した遺物は包含層からのものが大半で、遺構内の遺物が意外と少ない。その上、遺構内から出土した遺物には14~17世紀代のものが多く含まれ、遺構の中心年代もこの時期と考えられている。一方、C集落の時期はA・B集落に先行するもので、中世前半（13~14世紀）に中心がある。以上からすると、13~14世紀段階では川岸からやや入った山裾に近い場所（C集落）に集落の中心があり、これがやがて14世紀の段階で川岸（A・B集落）に移動したと推定することができる。このため、前述のA集落の軸線となる道路の成立や、B集落の川に面した構造が集落建物の時期と相関関係があるとすれば、これらの成立は14世紀前後以降と考えることができる。つまり、平瀬遺跡の景観は中世前半と後半で大きく変化し、中世後半には街村状の構造（A集落）と川岸集落（B集落）の2つの発達した構造を軸に集落が出来上がっていたと考えられる。

第2節 円光寺と千種川流域について

今回の調査で円光寺遺跡には寺院の存在したことが、出土した瓦から確認された。まず古段階の瓦は前述のとおり、地名の由来となった円光寺の存在を裏付ける可能性が指摘されるものである。一方、新段階の瓦は16世紀代のもので軒平瓦に「佛日山」の文字が刻まれ、地籍図（第10図）に記された佛日庵と関連する瓦であることから、この寺院が16世紀に廻ることを示す資料となった。

寺院としての円光寺は佐用庄太田にあった臨済宗の寺といわれ、文献上の初出は建武元年（1334）8月22日条の赤松円心安堵状（古文書纂）である。佛日庵は近世・近代の絵図に描かれ、明治期まで存在したことが知られる寺院である。ここではこの2つの寺院名称を頼りに円光寺の歴史を探って結びとしたい。

円光寺については、前述の安堵状によって、赤松円心が佐用庄内時沢と木沢名を円光寺に安堵したことが知られる。同名は点定されて数十年にわたって不知行だったが、円心は年貢だけでなく同名の下地そのものを当寺に管領させ、寺の興隆を図ったという⁽⁴⁾。さらに、赤松氏四代の義則は円光寺領に対する太田因輪入道の違乱停止を命じた（4月3日「赤松義則書状写」宮内庁書陵部藏赤松家文書）。このように誕代守護は文書を発給し、同寺を保護している。この他、「赤松系図」には円心の達祖赤松（宇野）則景を円光寺殿と記すことから、当寺を赤松氏および宇野氏の氏寺とする説もあるなど、赤松氏と同寺の関係は深い。一方、永享10年（1438）6月13日には太田則安が父河内守某の菩提を弔うために、重代相伝の私領太田土居の東の畠二反を当寺に寄進した（「太田則安島地寄進状写」間鶴文書）。この太田氏は先に義則から違乱停止を命じられたものの子孫であろう。同氏は「太平記」に赤松氏の配下として名が見えており、守護方での活躍が知られている。このため義則が違乱停止を発した相手は守護の配下であるが、円光寺の造営に伴って太田氏との間で利害対立が生じたのであろうか。このことから見えるのは14～15世紀にかけて赤松氏が円光寺を庇護し、守護方土豪との利害を抑えてでも、地域での権益の保護を計った経過である。何故、赤松氏はそこまでして円光寺を造営しようとしたのであろう。

円光寺の造営に守護が関与したことについては、宝林寺の造営が参考になる。この寺は文和4年（1355）に備前より移転するが、桜宗に帰依した赤松則祐が雪村友梅を勧進開山として建立したもので、赤松氏の菩提寺とされる。東寺領であった矢野莊に課された夫役には「守護寺宝林寺材木人夫」がみえる。この寺の造営にあたっては延文4年（1359）から「宝林寺定役」が課され、応安6年（1373）まで続くことから、造営が守護役で行われたことがわかる。このほか、造営の夫役には「檜皮奉行」「檜皮大工」「赤松番匠」「赤松大工」などの専門集団が関与し、「白土持」「瓦持」「木引人夫」などの様々な人夫が駆使されている。

この点を下東由美は「菩提寺宝林寺造営に関する守護役（主に山林野資源）賦課を通じて『一国大儀』の論理を確立させるだけではなく、既に地域社会の中で自立的に展開していた河川経路を中心とした地域の流通システムや信仰ネットワークなどを掌握しよう」としたのであると指摘する⁽⁵⁾。つまり、赤松氏は自己領地の開發を守護役で推し進め、既に存在した地域の流通や信仰のネットワークを自己の影響下に取り込もうと計ったことが推測されるのである。これに連関して、赤松氏の拠点として出自の地である宝林寺や本拠の赤松、白旗城や苔縄などが整備され、山城の築城も行われたのである⁽⁶⁾。一方、近年調査が進む山野里宿遺跡⁽⁷⁾から赤松氏関連寺院である宝鏡寺の軒丸瓦が出土したことや、応安2年（正平24年・1369）赤松則祐の瑠璃寺（佐用町南光町船越）への釣鐘寄進⁽⁸⁾などは、一連の造営事業が守護の本拠のみに限らず千種川周辺の拠点で進められたことを窺わせる。つまり、佐用郡内の赤松氏領域にも同様の守護役が課され、インフラ整備を行ったことが想像されるのである。

おそらく、このことの1つとして円光寺の造営も守護役による課役・徵発という手法で実行されたのではないだろうか。これは赤松氏の地域拠点の整備や宗教施設の掌握を目的に遂行された一連の事業の中に位置づけられるという意味でも、重要な動きと捉えられる。

特に「白土持」・「瓦持」の人夫徵発は、前者が今回出土した壁土との関連、後者が瓦生産に関わるものである。これら赤松氏が抱えた専門集団の生産遺物である可能性のあるものが、今回円光寺で出土したことは象徴的に守護の関与を示唆してくれる。佐用郡内では他にこれらの遺物が出土していない点からも、このことは裏付けられる。まさに、壁土・瓦の出土は守護の地域開発を示す重要な物証といえる。そして、今後これらの資料は守護役による一連の開発事業との関連で検討する必要があろう。

一方、円光寺は15世紀になると文正元年（1466）に首座が宝林寺（現上郡町）の宝祐庵塔主になったことが（『藤涼軒日録』同年閏二月六日条）知られるが、15世紀後半以降の消息は不明となってしまう。16世紀前後にになると調査地点には佛日庵と呼ばれる寺院が存在したようで、今回出土した「佛日山」の軒平瓦がその存在を示してくれた。

現在では地名の由来になった円光寺の所在ははっきりしないが、佛日庵は地籍図（第9・10図）にも名を留め、堂舎は明治期まで残されたという。この寺院はその場所とともに地元の人々に記憶され続けてきたようで、今でも地元ではそのことを語ってくれる人は多い。これに対して、円光寺の存在は知られるものの、その場所については記憶が不確かである。佛日庵と円光寺がどのような関係にあるのかは不明であるが、いずれにしても円光寺という寺院には記憶の断絶があるようだ。

第3節 河川流通と集落

以上、寺院について検討し円光寺との関わりを考えてみたが、次に平瀬集落を見ながら中世の円光寺からみえる千種川流域の河川流通を見てみたい。

赤松氏が円光寺の興隆を計った14世紀前半には、平瀬遺跡ではC集落が成立しているが、A・B集落は未成立である。統いて15世紀になると平瀬遺跡のA・B集落が成立し、構造的に都市的な場に見られるような稠密な街区景観を持つようになる。そして15世紀後半までは円光寺が存続するが、16世紀前後になると円光寺のあつた場所には佛日庵と呼ばれる寺院が登場し、平瀬遺跡とともに併存する。

政治的には円光寺名称が断絶する15世紀後半は赤松氏が播磨守護職に復活するものの佐用郡における影響力が衰退する時期にあたる。15世紀後半以降の赤松氏は、赤松の地は維持したようであるが、千種川上流域に影響力をとどめた痕跡はなく、領域の中心地を鉢路周辺に移し、徐々に支配領域の範囲を減じている。おそらくこのような政治的動向が円光寺においても反映されたものと考えられる。ただ、赤松氏が嘉吉元年（1441）に断絶して再興されるまでの間、円光寺がどのような経過をたどったのか、そして赤松氏再興後ほどなくして消えてしまうことに関しては、その詳細は全く不明である。いずれにしても15世紀後半段階では守護の公的な影響力は及ばなくなっていたことが推測される。

だが、一方で赤松氏の影響が無くなる15世紀後半～16世紀にも平瀬の集落は存続し、この時期の平瀬集落（A・B集落）は前代に比べ発展した構造となる。（詳細は不明であるがおそらく円光寺にあったであろう集落も平瀬と同様存在していたことが推測される。）赤松七条家や土豪太田氏の動向など、この時期の地域の政治動向はいまひとつ明確ではないが、この時に集落構造の発展を促すことが可能な地域権力の存在はあまりなさそうである。このことから考えると、集落構造の発展は地域の流通ネットワークが14世紀以降も維持されたことから、地域経済の自立的な動きが恒常化し、発展的に成立した可能性が考えられる。つまり、地域の流通ネット

トワークの自立的な動きが、集落の発展を促したと考えるはうが自然であろう。

近世ではあるが平瀬には高瀬舟が置かれ、上流の早瀬・上月、下流の久崎を繋ぐ川の舟運があったことがわかっている。一方、今回調査で検出されたB集落は川に面し、これに向けて建物が並ぶ構造で、川津であった可能性が高い。この集落は15世紀に成立し17世紀前半まで存続しているので、少なくとも舟運は中世後半には安定的に維持されており、地域経済の動脈として機能していたと推測できる。

千種川流域には山野里宿遺跡（上郡町）⁽⁸⁾・門前遺跡（上郡町）⁽⁹⁾など、川に面し舟運を担った可能性のある集落が近年いくつか見つかっている。山野里宿遺跡では14～15世紀を中心として大量の土器類などの遺物が出土した。この土器群は平瀬遺跡C集落土器群に似たものが多く含まれる。また、軒丸瓦に宝林寺（上郡町苔縄、赤松菩提寺）の寺名文字の刻まれたものが出土しており、同寺周辺で採取された同文瓦であることがわかっている⁽¹⁰⁾。このことからすると詳細は不明であるが、14世紀段階で同宿に関わって赤松氏の関連が疑われる。宝林寺の南に隣接する門前遺跡でも14～15世紀に1つの画期が存在する可能性が大きい。これらの証拠を重視するならば、赤松氏による千種川流域における地域開発は広範に渡るとともに、舟運に関わる川津にも及んでいたことが推測される。

つまり、赤松氏の地域開発は経済的な流通拠点にも及んだ可能性が高いのである。これが守護権力の直接的な関与かどうかは不明であるが、宝林寺造営などに関わる様々な専門集団がこれらの開発を主導したことはおおむね間違いが無いのではなかろうか。そして、これらの動きは守護の観点から見れば、自己の権益確保であり、流通ネットワーク・信仰ネットワークの掌握であるが、地域から見れば、結果として河川における流通ネットワークの開拓・構築・維持に寄与したのである。

前述の下東氏は赤松氏の播磨守護職就任以後、それまで播磨においては、荘園制を基盤とする畿内と地方を結ぶ流通ネットワークが大きな経済活動であったが、守護の守護役などによる謀殺の恒常化とともに新たな地域間流通ネットワークの台頭が促されたことを指摘する。この流通ネットワークの台頭・維持が平瀬集落の安定的な存続に繋がったのであろう。円光寺は上流の上月・早瀬や下流の久崎のように周辺に大規模な耕作地を持たない。このため、流通ネットワークの拠点として維持されることが、存続のためには必須の条件となるのである。

そして、このことを千種川流域の視点から見ると、守護の恩恵を超えて動き出した地域経済の新たな動きが地域間の自立的な経済活動を生み出し、新たな地域の経済秩序を構築したと考えられるのである。このために嘉吉元年に赤松氏が滅び、政治的な混乱の中にあっても、流通ネットワークが維持され、円光寺がしばらく存続し、平瀬集落はむしろ発展した構造のものへと変遷したのであろう。16世紀に入ると寺院の円光寺は赤松氏とともに消滅するが、地域に残された舟運などの流通ネットワークは、その後の佐用郡にとって大きなインフラとなった。このうち、平瀬は他の流域地域と同じく河川交通の一翼を担う拠点としての役割を与えられ、近世まで長くその地位を保持したと考えることができる。

円光寺に大正8年、コンクリート橋が架橋⁽¹¹⁾され、現国道が敷設された。このことは近代の地域を大きく変化させる契機となったことは疑いがない。それまで地区の主要道であった西側の通路は路地の1つとなり、その役割を減じた。江戸期に置かれた高瀬舟⁽¹²⁾は既に明治期にひっそりとその役割を終えている。平瀬集落の江戸初期以降の動向は不明であるが、近世後期の絵図ではすでに川岸の家並みは消えている。高瀬舟の機能が何らかの形で残されたとは思われるが、河川増水で簡単に水没すると思われるA・B・C集落は近世の早い時期に北側および北東側の現集落域に移動したものと思われる。ここに、中世的な景観の平瀬は消滅することになり、そのことは同時に地域の舟運の持つ重要性が徐々に道路交通網に移っていったことを物語るのであろう。

以上、2つの遺跡について述べてきた。平瀬遺跡からは14～17世紀の期間、狭い空間に稠密な集落が出現し、川津を形成したことが判明し、中世の舟運による経済活動が大きなウエイトを占めたことを示してくれた。一方、円光寺遺跡からは寺院の持つ地域拠点としての役割の一端を見てくれた点で大きい。そして、なにより両遺跡が密接な関係を持って展開したことは、宗教施設と経済拠点が地域に果たした役割を解明する上で大きな成果となった。

付記、上月合戦と円光寺・平瀬

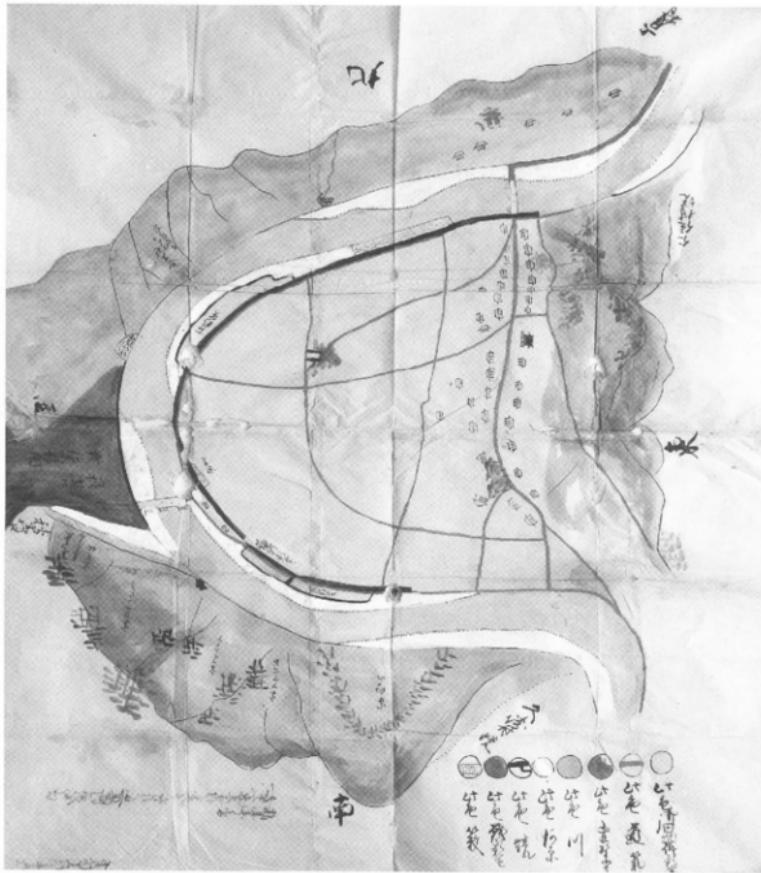
織田氏と毛利氏の合戦が繰り広げられた上月合戦^④は天正5～6年（1577～78）の間、上月周辺を中心に繰り広げられた。この頃にも平瀬遺跡のA・B集落は存在しており、佛日庵背後の愛宕山には円光寺岩が、南側には飯ノ山城・浅瀬山城が築かれている。特に天正5年11月28日には秀吉方の上月城攻めが行われ、激しい戦闘が行われたが、伝承ではこのとき敗走する宇喜多勢を追って円光寺集落の西側周辺で合戦が行われたという。ここには「戦僕」と呼ばれる橋があるが、ここがまさにその激戦地となり、川が血で染まったという言い伝えが地元に残る。『信長公記』ではこの戦いの後、敗れた上月城内の「あしょわ」（姫女子）が国境近くで串刺しや縛にされたことが語られているが、当時の記憶が地元にこのような伝承を記憶させたのであろうか。いずれにせよ、おそらく円光寺周辺もこの凄惨な現場の1つとなったことは疑いがない。住人達がこのときどのような状態であったかを具体的に伝える史料は残されていない。しかし、この事件によって平瀬集落が断続した形跡はなく、集落構造に影響があった痕跡もない。のことから彼らは逞しく苦境を乗り越えたと想像しておきたい。

引用文献

- (1). 広島県草戸千軒町遺跡調査研究所『草戸千軒遺跡発掘調査報告書V』1996
- (2). 第8～11図、円光寺絵図を参照。
- (3). 小松茂美編『日本の絵巻 一遍上人絵伝』中央公論社1988
- (4). 以下の円光寺に関する歴史的な記述は『兵庫県の地名II』平凡社刊1999を参考にした。
- (5). 下東由美「守護役と地城の流通—守護赤松氏を事例に—」『中世の内乱と社会』東京堂出版2007
- (6). 山城に関する守護役は嘉慶2年（1388）6月、高倉城（兵庫県佐用町）に「人夫大勢可入由被貢付」が、城山城（兵庫県たつの市）に応安元年（1368）誘入夫58人、至徳元年（1384）9月晦日～10月20日誘入夫75人、明徳元年（1396）8月5日・8日の2度の催促で「被懲入夫数百七十人」が、康安元年（1361）栗倉城・石堂城・竹山城（岡山県美作市）の3城に普請役が、それぞれ掛けられている。
- (7). 山野里宿遺跡は兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所「山野里四日市遺跡見学会資料」2004による。
- (8). 瑞穂寺については佐用町史編纂委員会『三日月町史 第二巻中世 付佐用郡中世史』昭和39年による。
- (9). (7) 文献のほか上郡町教育委員会島田拓氏よりご教示を受けた。
- (10). 上郡町教育委員会荻能幸氏よりご教示を受けた。
- (11). 円光寺橋は大正8年に架橋されたコンクリート橋である。国道の建設によって建造された。これによって円光寺地区の幹線道路は東側の山腹に移動した。今回の工事はこの国道の拡幅と、片木山の山腹をトンネルで抜ける工事である。
- (12). (4) 文献に同じ
- (13). 山下晃吾『上月合戦～織田と毛利の争奪戦～』兵庫県上月町 2005に詳しく経過が語られる。

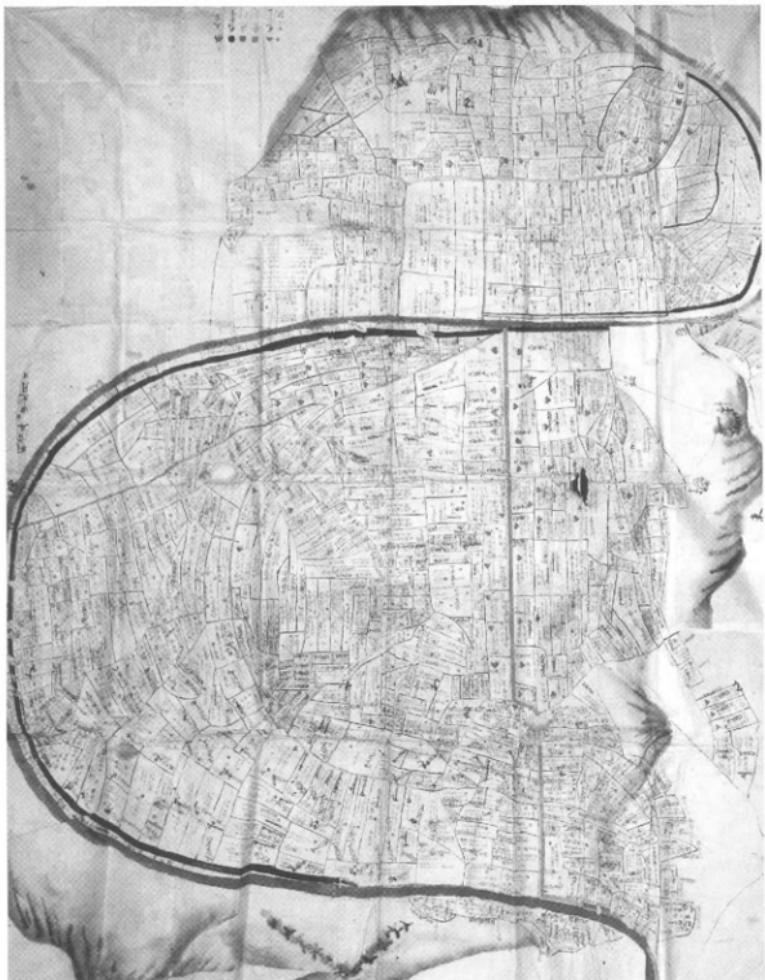


第7図 佐用郡周辺の交通路

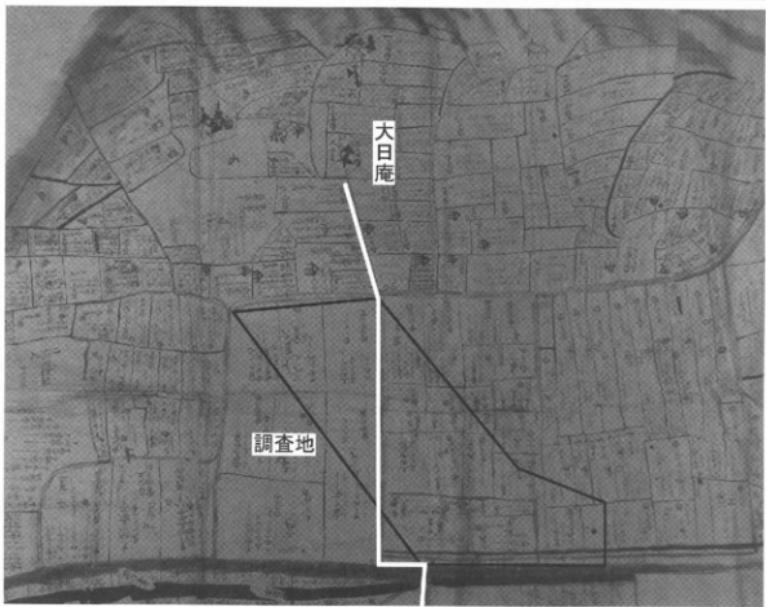
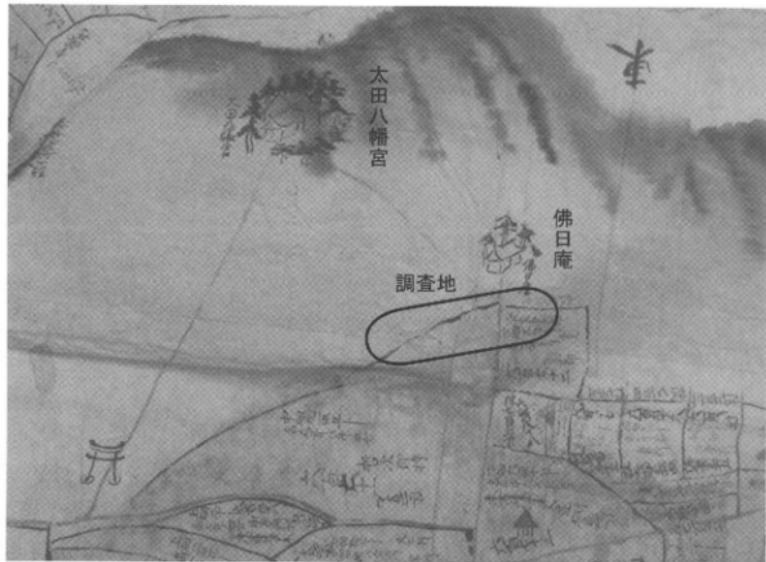


第8図 円光寺村絵図（年不詳）

凡例のとおり第8～11図は円光寺地区所蔵文書である。第8図は年不詳であるが、江戸時代の村絵図で、村境などを記載する。第9図は円光寺村地籍図で明治5年作成とされるもの。第10図に詳細図を紹介したが、上段には太田八幡宮・佛日庵などが描かれる。下段は平塚道跡周辺の詳細図で、当時調査区は田畠であったことがわかる。第11図は大正期頃の円光寺。作成者は当時尋常小学校4年生であった人野タダ氏という。この他、円光寺には村絵図・地籍図などの絵図、幕政時代の田畠書付などが残される。



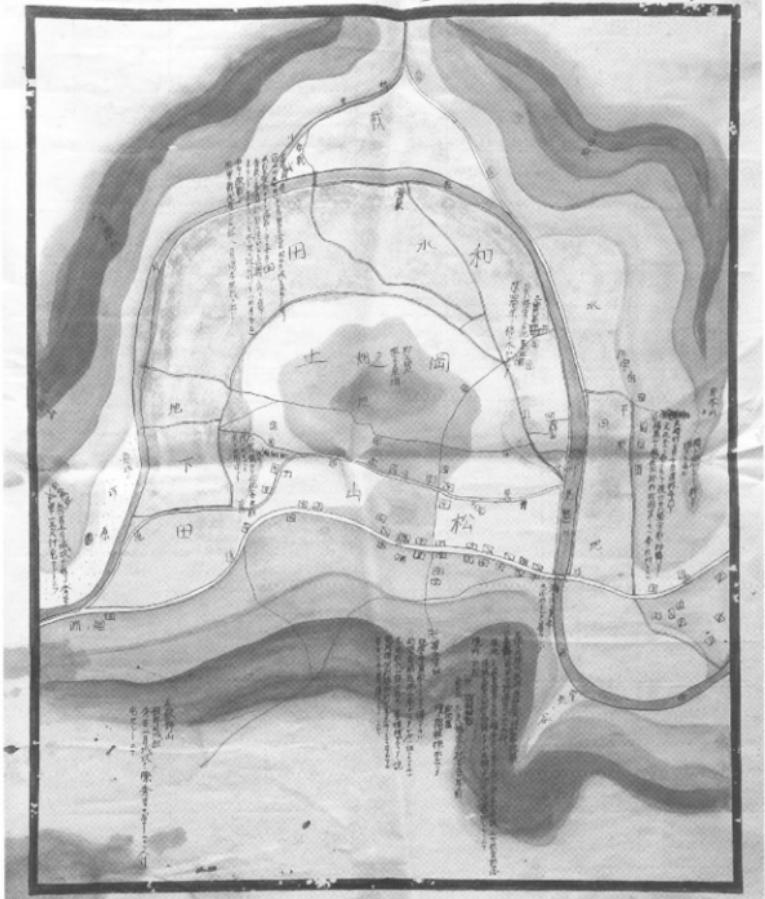
第9図 円光寺村地籍図（明治5年）



第10図 円光寺村地籍図（詳細図）

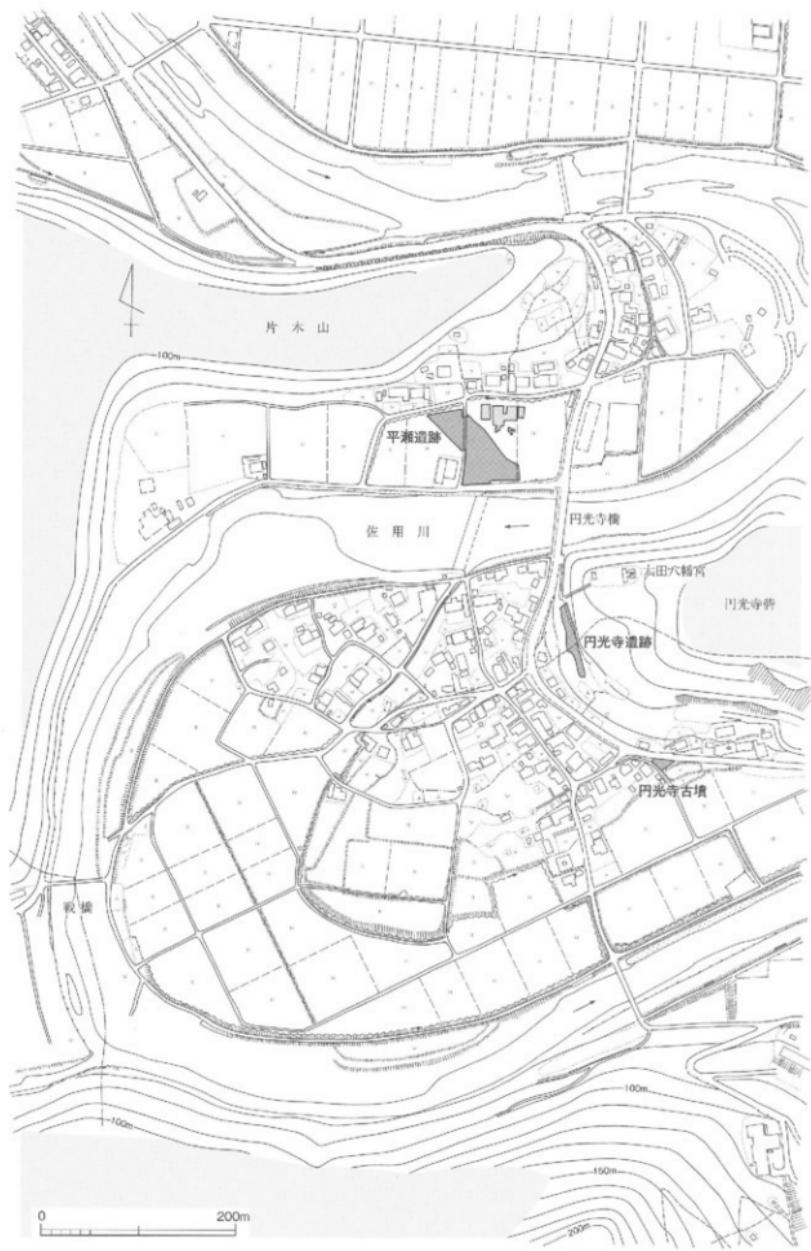
郷土見通り圖

佐用郡久崎村圓光寺



第11図 「郷土見通り圖 佐用郡久崎村圓光寺」

図 版



円光寺周辺地形図 (1/10,000)

図版2 平瀬遺跡



調査区全体図 (1/1,000)

図版3 平瀬遺跡



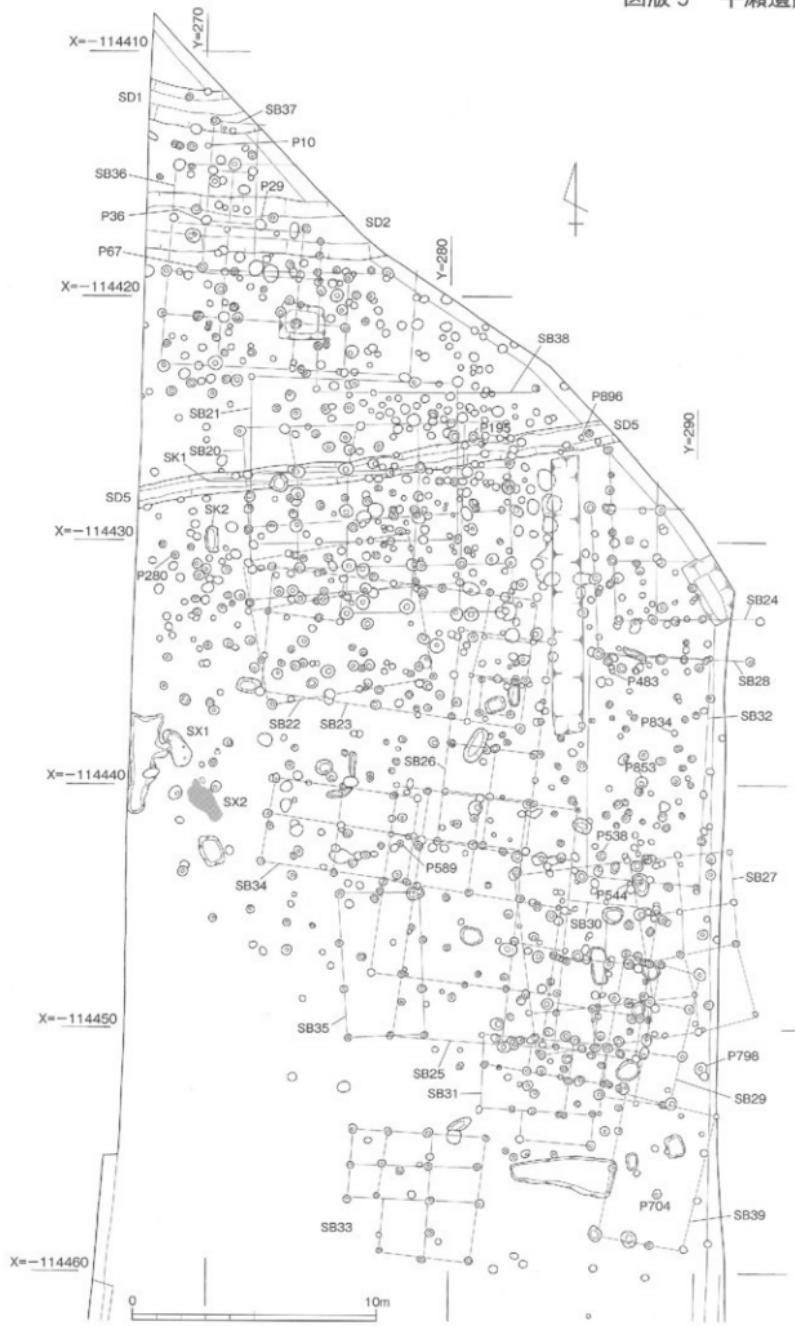
調査区全体図 (1/400)

図版4 平瀬遺跡I・III区



全体図 (1/200)

図版5 平瀬遺跡II区



全体図 (1/200)

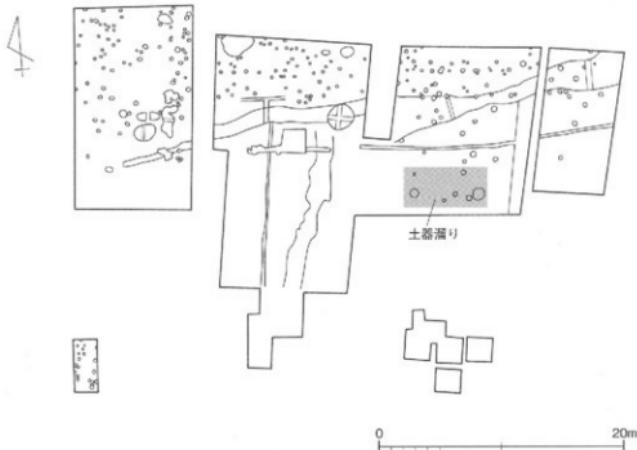
図版6 平瀬遺跡IV区



g-6 区

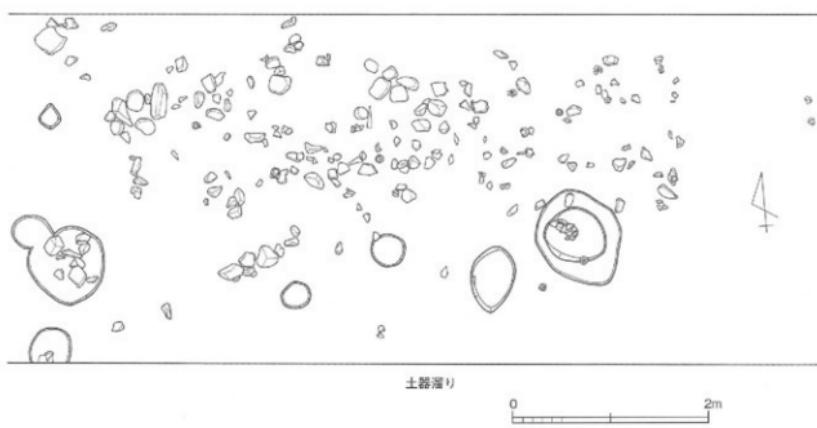
g-7 区

g-8 区



土器溝り

0 2m

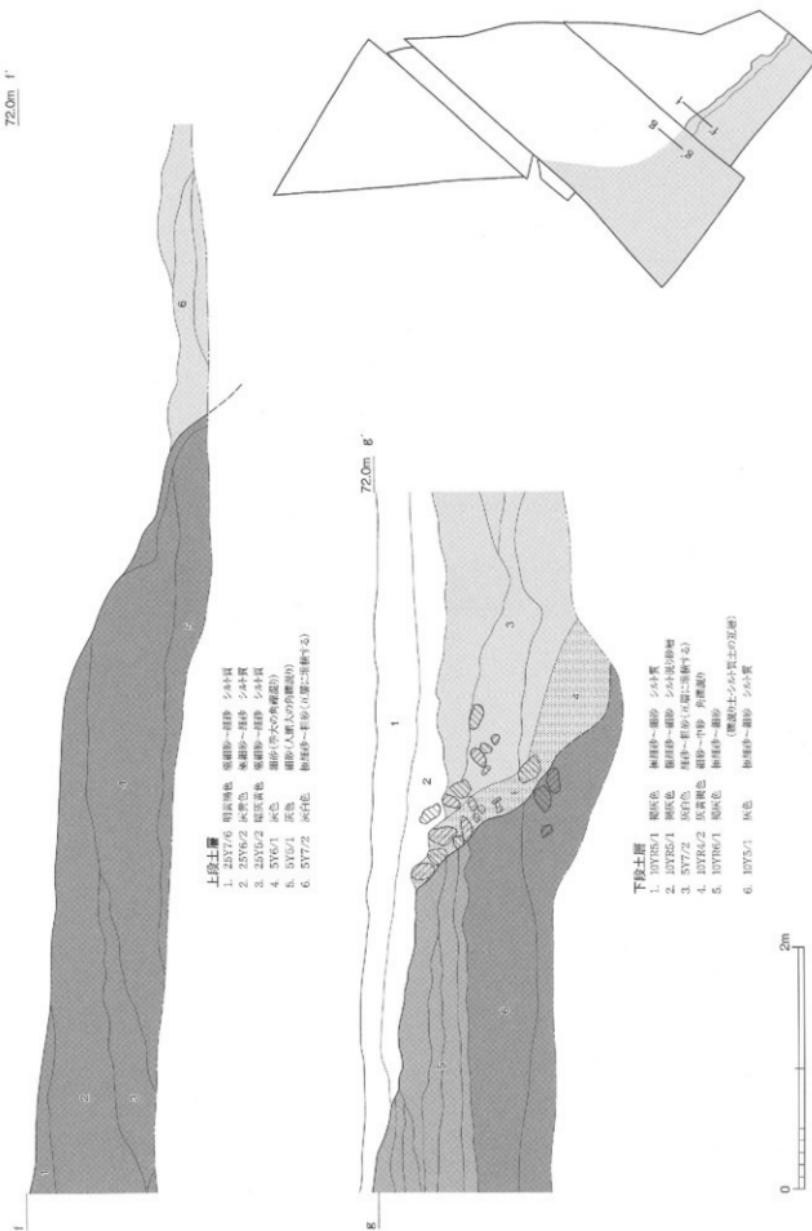


図版8 平瀬遺跡



調査区断面図1 (横1/200・縦1/40)

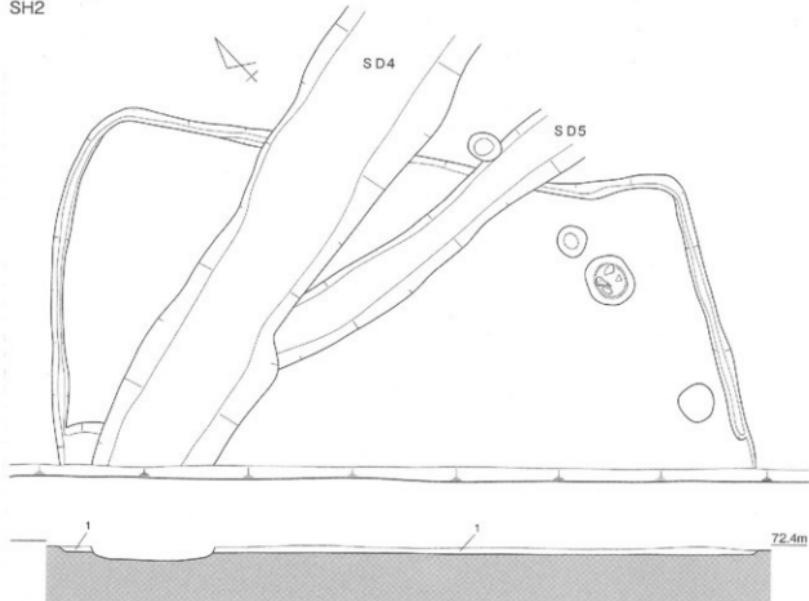
図版9 平瀬遺跡



調査区断面図2 (1/40)

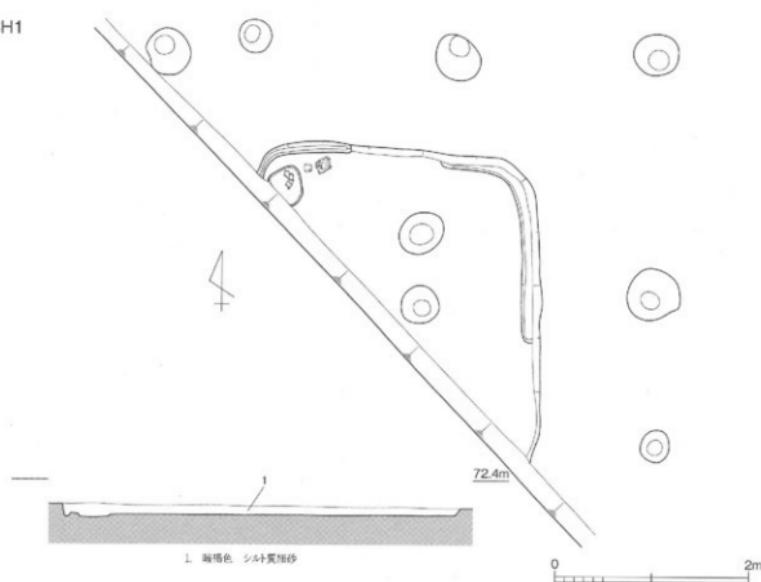
図版10 平瀬遺跡 I 区

SH2



1. 灰褐色 シルト質細砂

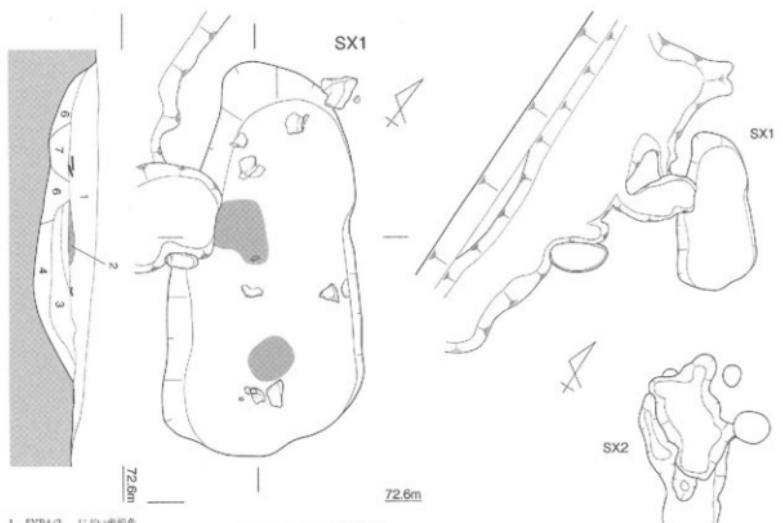
SH1



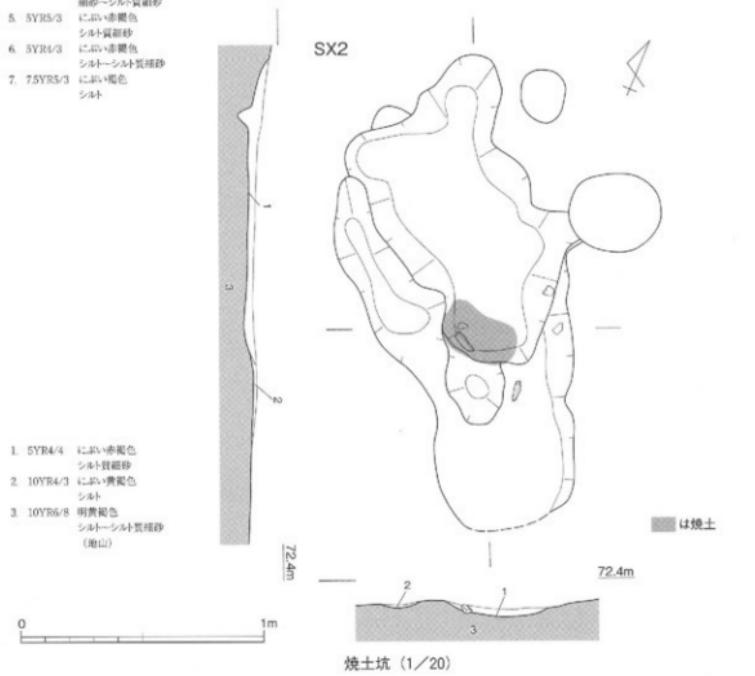
1. 海褐色 シルト質粗砂

竪穴住居跡 (1/50)

図版11 平瀬遺跡II区

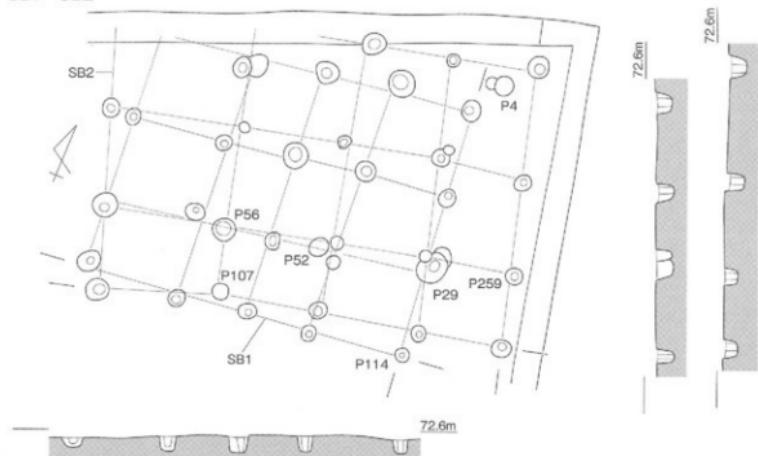


1. 5YR4/3 に近い赤褐色
シルト質粘土
2. 7.5YR3/4 黄褐色
シルト質粘土
3. 5YR4/4 に近い赤褐色
シルト質粘土
4. 5YR5/3 に近い赤褐色
細砂-シルト質粘土
5. 5YR5/3 に近い赤褐色
シルト質粘土
6. 5YR4/3 に近い赤褐色
シルト-シルト質粘土
7. 7.5YR5/3 に近い褐色
シルト

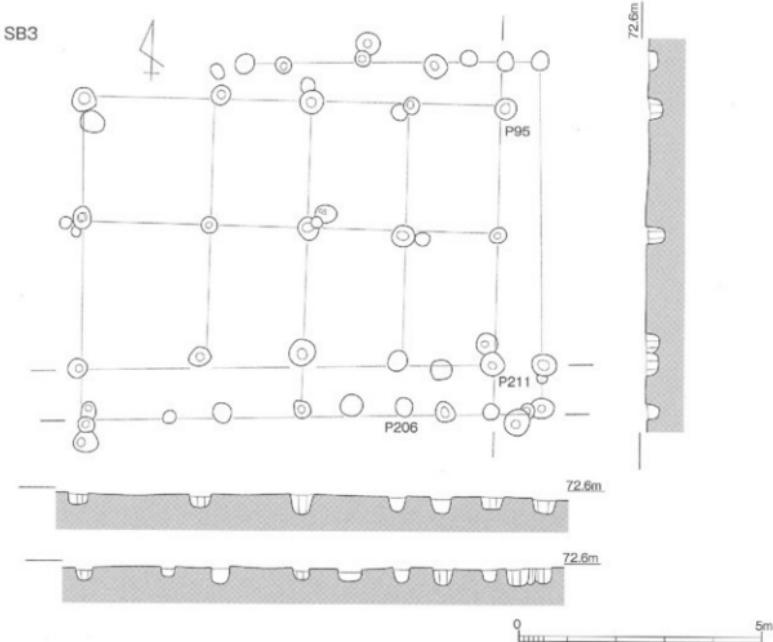


図版12 平瀬遺跡 I 区

SB1・SB2

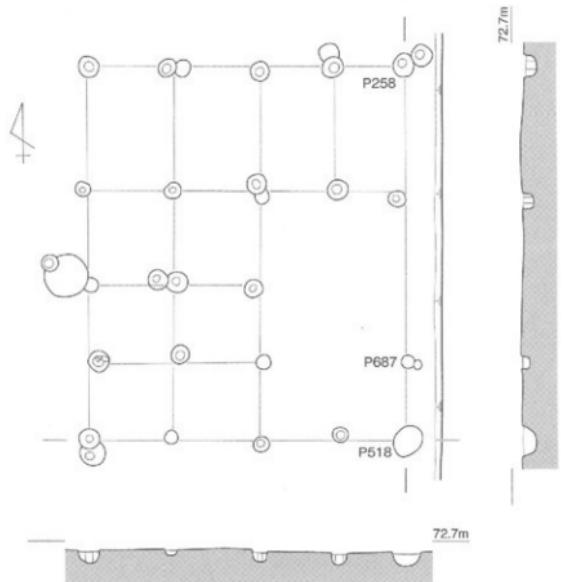


SB3

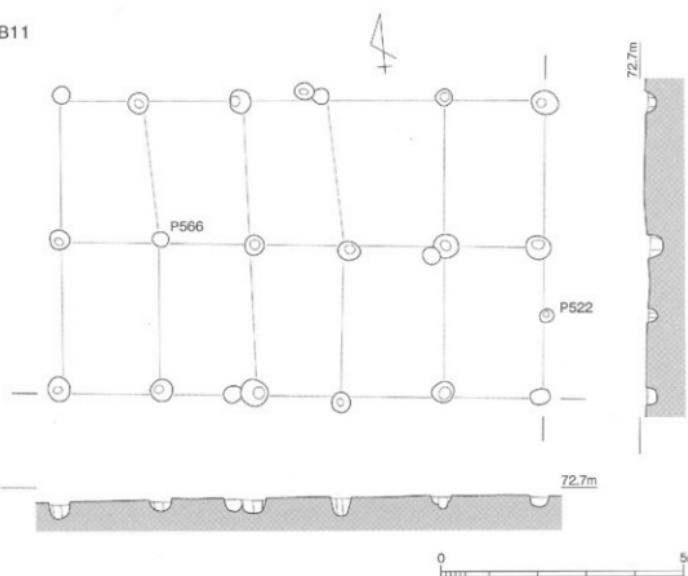


図版13 平瀬遺跡 I 区

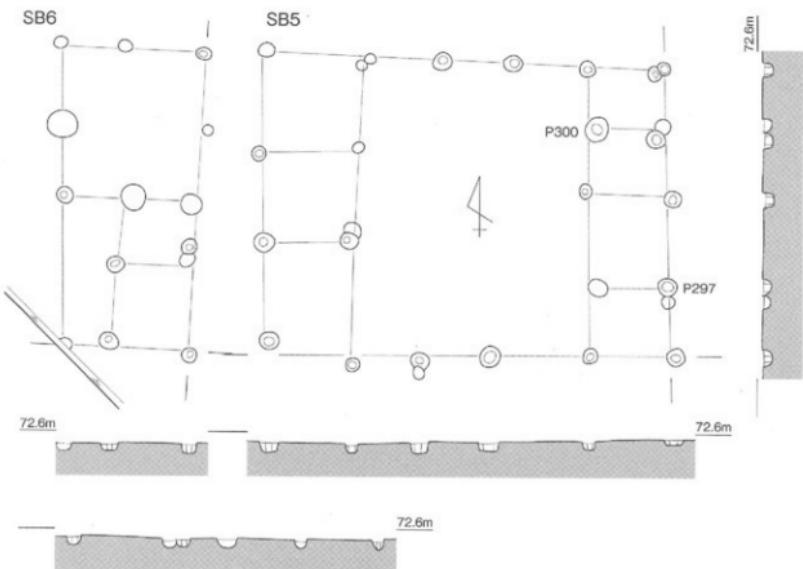
SB4



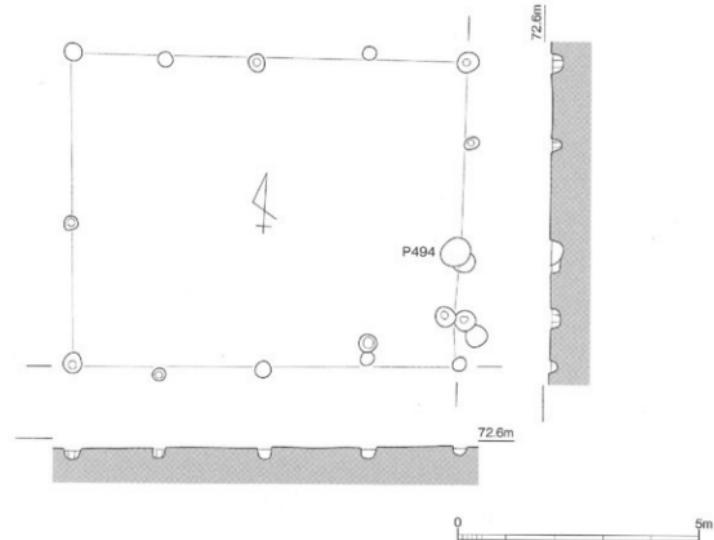
SB11



図版14 平瀬遺跡 I 区

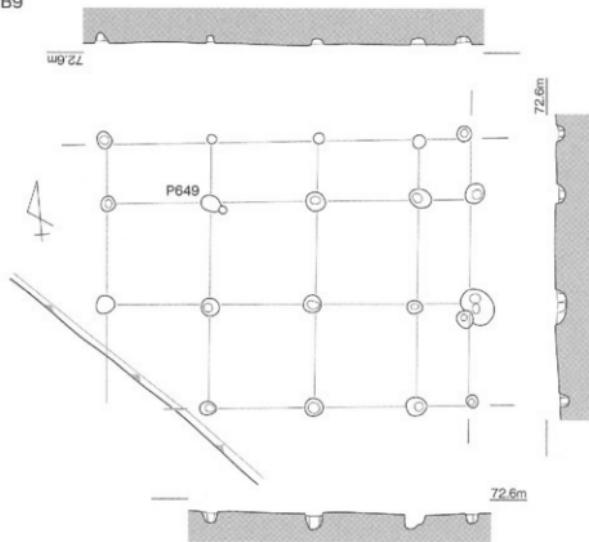


SB7

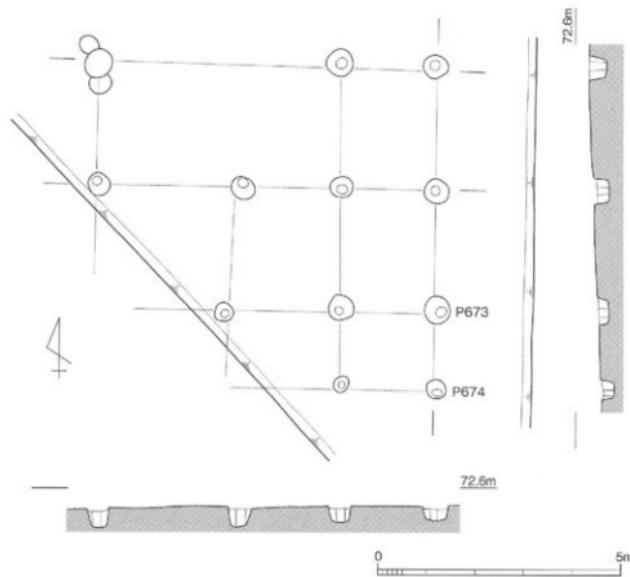


図版15 平瀬遺跡 I 区

SB9

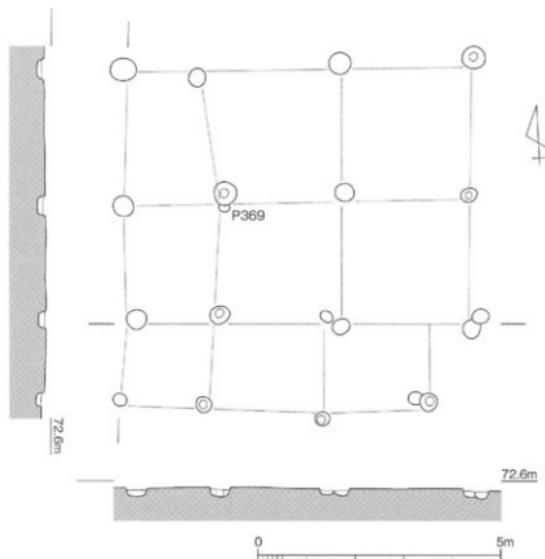


SB10



図版16 平瀬遺跡I区

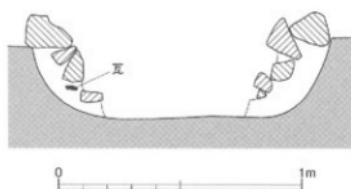
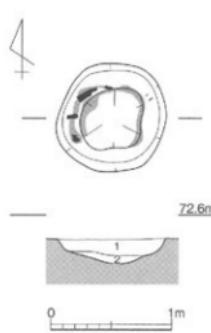
SB13



SE1



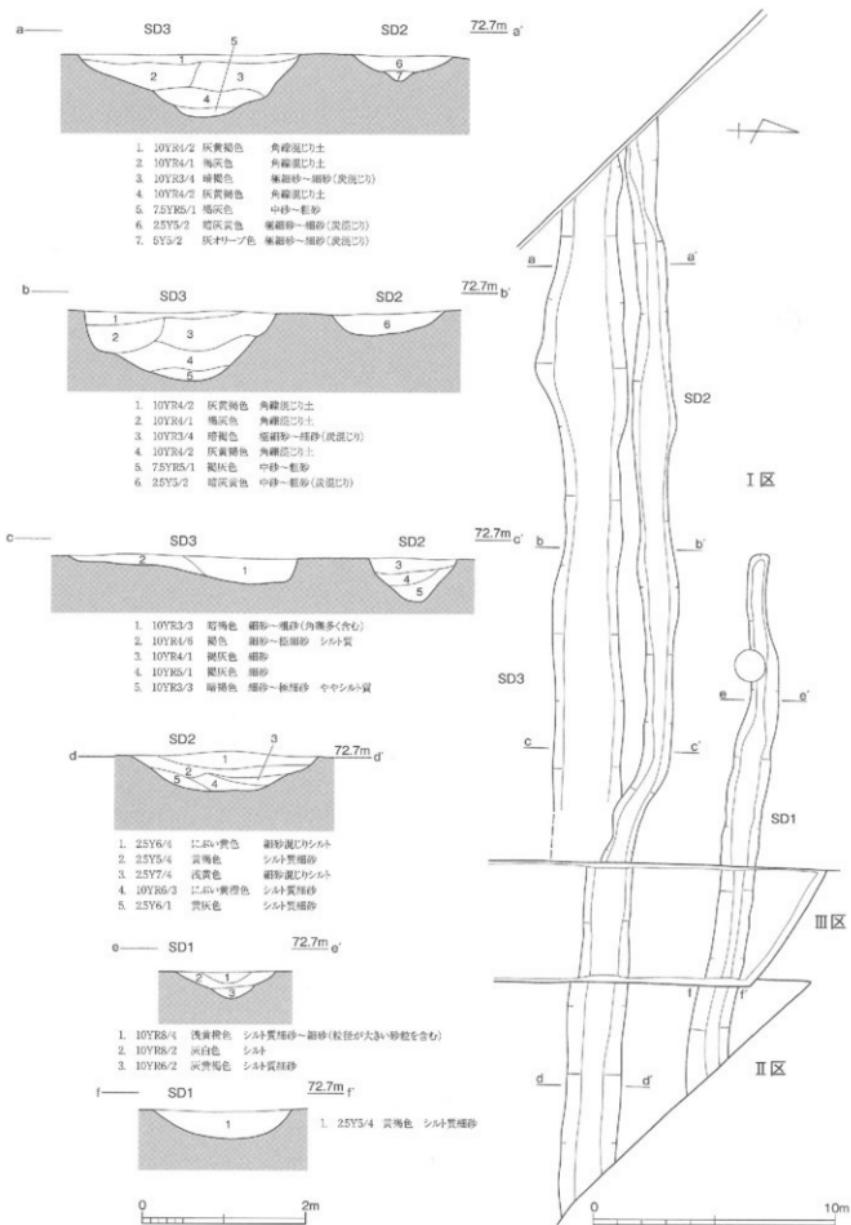
SK380



1. 10YR5/2 深黄褐色 シルト質細粒
2. 5YR5/2 墓赤褐色 シルト～シルト質粗粒

■ 瓦
■ 深土面

図版17 平瀬遺跡 I 区ほか



図版18 平瀬遺跡 I区ほか

SD4

a ——

72.6m a'



1. 7SYR4/4 褐色 塗絵砂～細砂 シルト質
2. 7SYR5/1 黒灰色 塗絵砂～細砂 シルト質

b ——

72.6m b'



1. 7SYR4/4 褐色 塗絵砂～細砂 シルト質

c ——

72.6m c'



SD5

d ——

72.6m d'



1. 5YR4/1 黒灰色 塗絵砂～細砂 シルト質

e ——

72.6m e'



1. 5YR4/1 黒灰色 塗絵砂～細砂 シルト質
2. 5YR5/3 墓塗色 塗絵砂～細砂 シルト質(マンゴン含む)

f ——

72.6m f'



1. 5YR5/1 黒灰色 塗絵砂～細砂 シルト質
2. 10YR5/4 墓塗色 塗絵砂～細砂 シルト質

g ——

72.6m g'



1. 5YR4/1 黒灰色 塗絵砂～細砂 シルト質
2. 5YR5/1 黒灰色 塗絵砂～細砂 シルト質
3. 10YR4/1 黑灰色 塗絵砂～細砂 シルト質
4. 10YR5/4 墓塗色 塗絵砂～細砂 シルト質

h ——

72.6m h'



1. SYR4/1 黒灰色 塗絵砂～細砂 シルト質
2. SYR5/1 黒灰色 塗絵砂～細砂 シルト質
3. 10YR3/4 墓塗色 塗絵砂～細砂 シルト質

0

2m

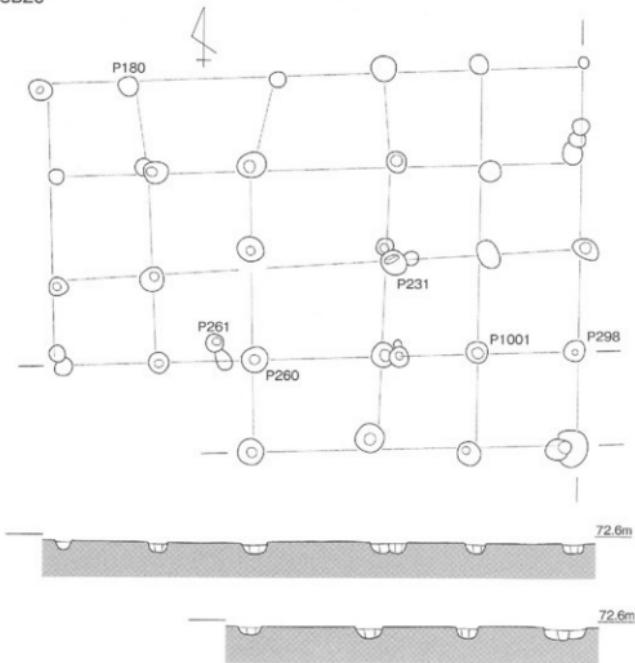
0

10m

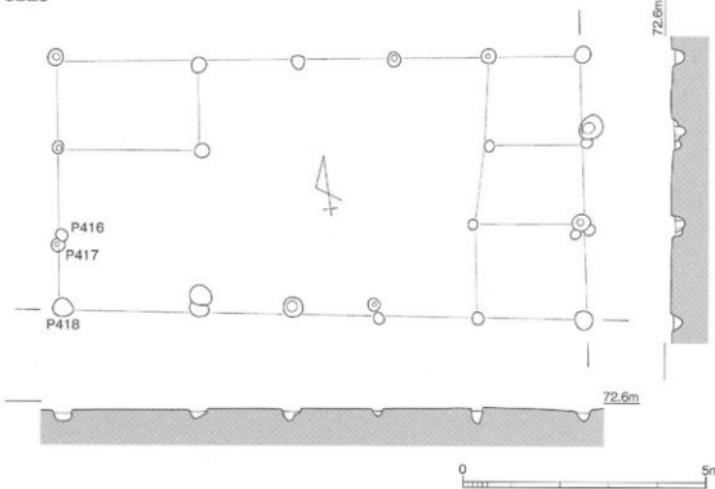


図版19 平瀬遺跡II区

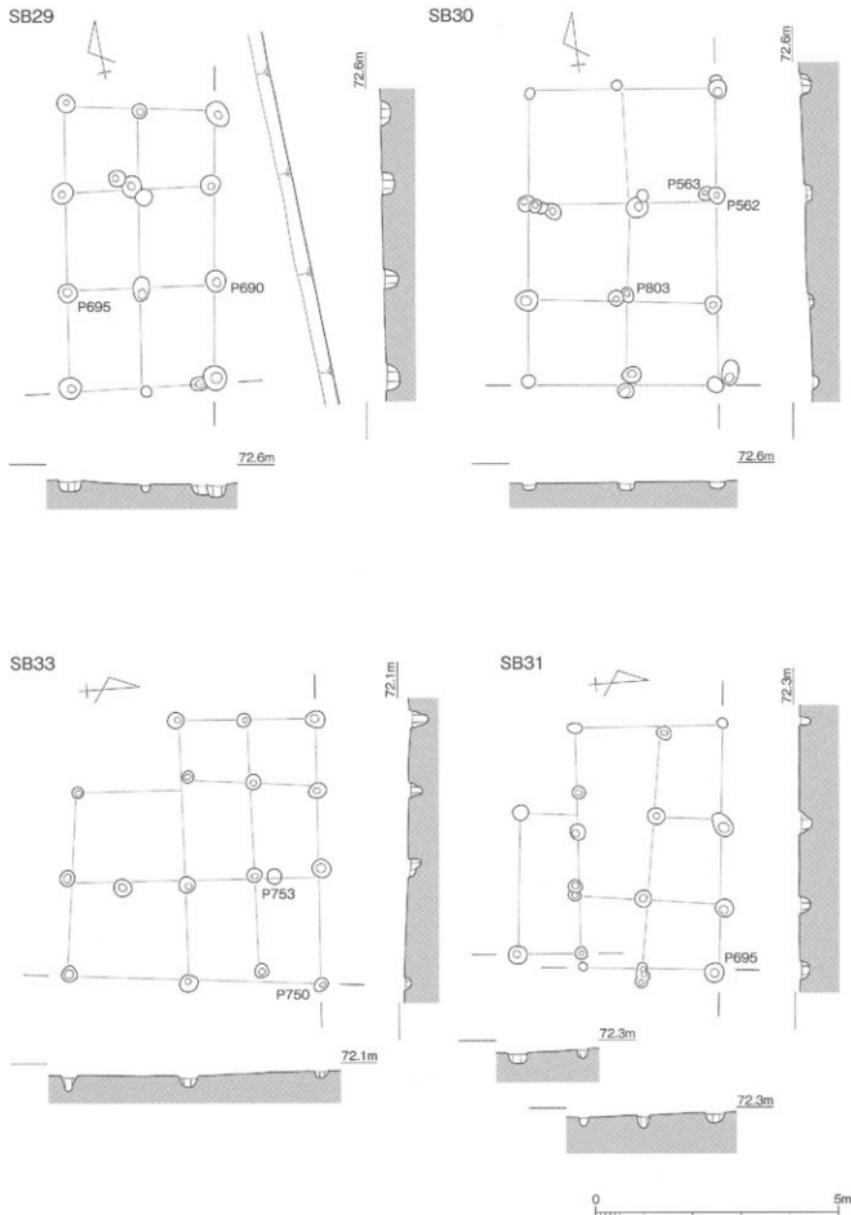
SB20



SB23

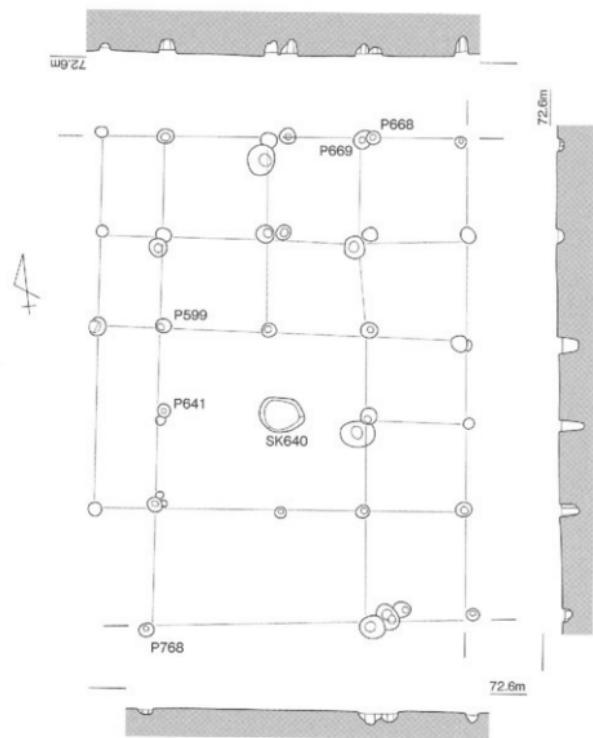


図版20 平瀬遺跡II区

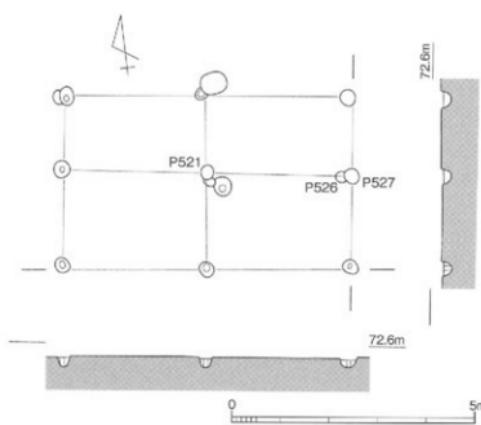


図版21 平瀬遺跡II区

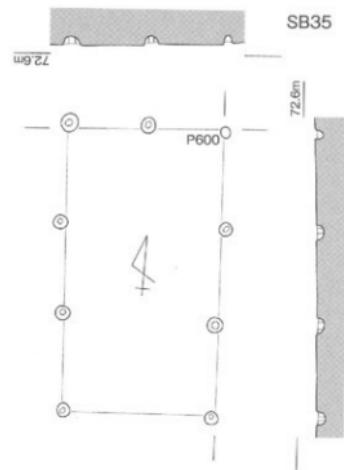
SB25



SB34

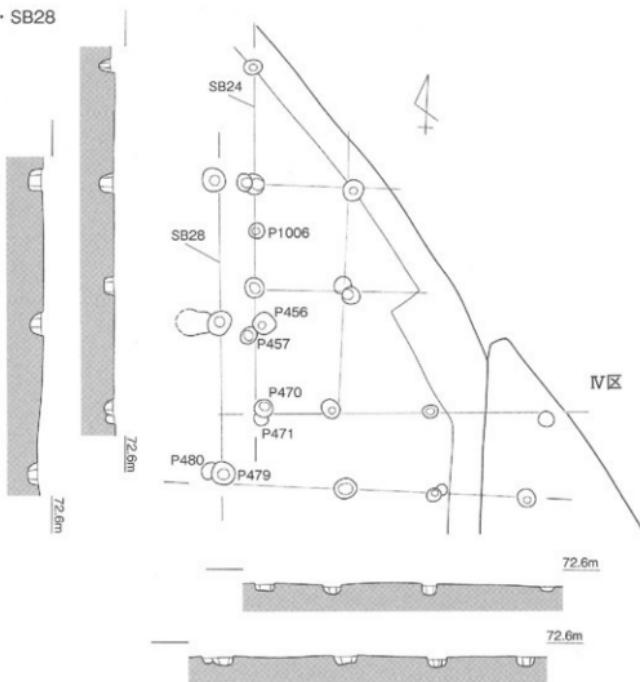


SB35

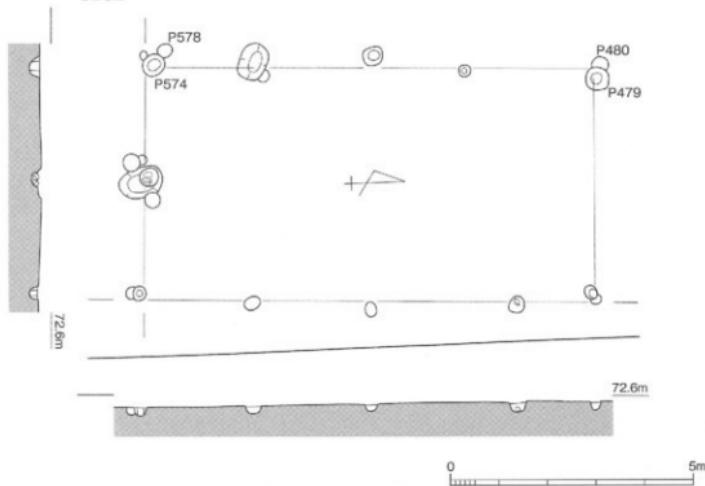


図版22 平瀬遺跡II区

SB24・SB28

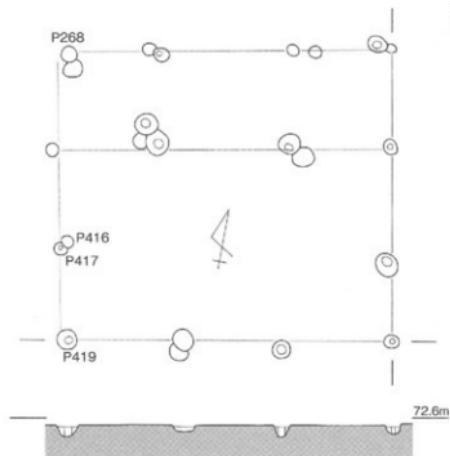


SB32

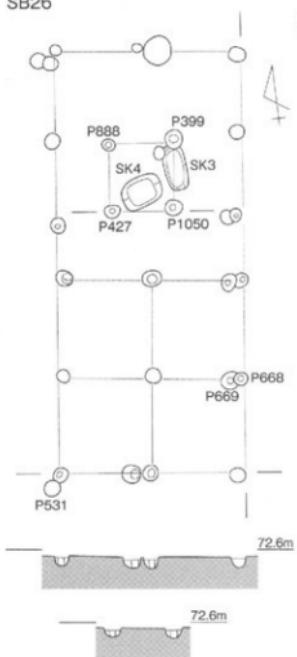


図版23 平瀬遺跡II区

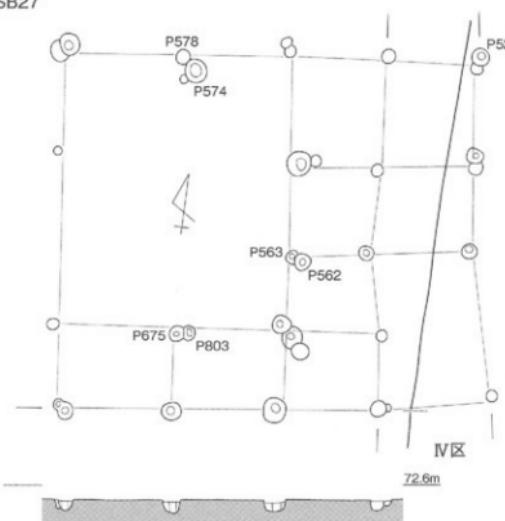
SB22



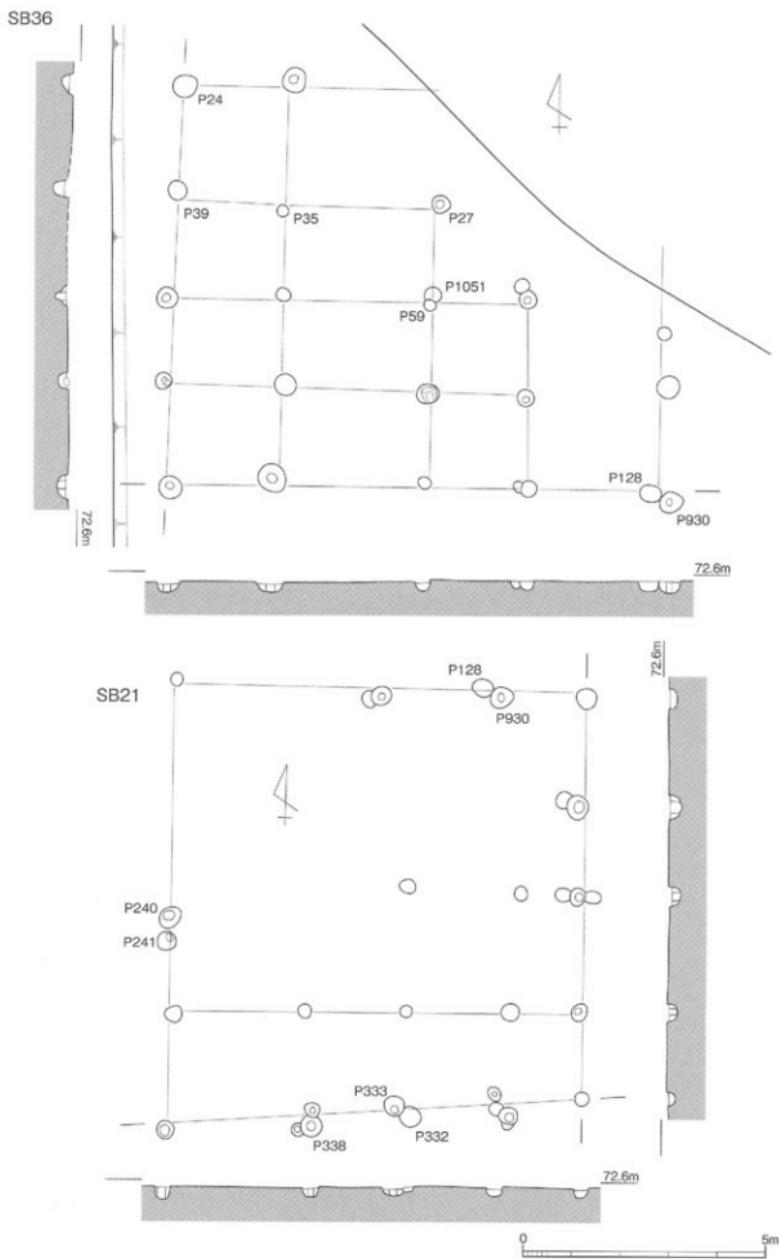
SB26

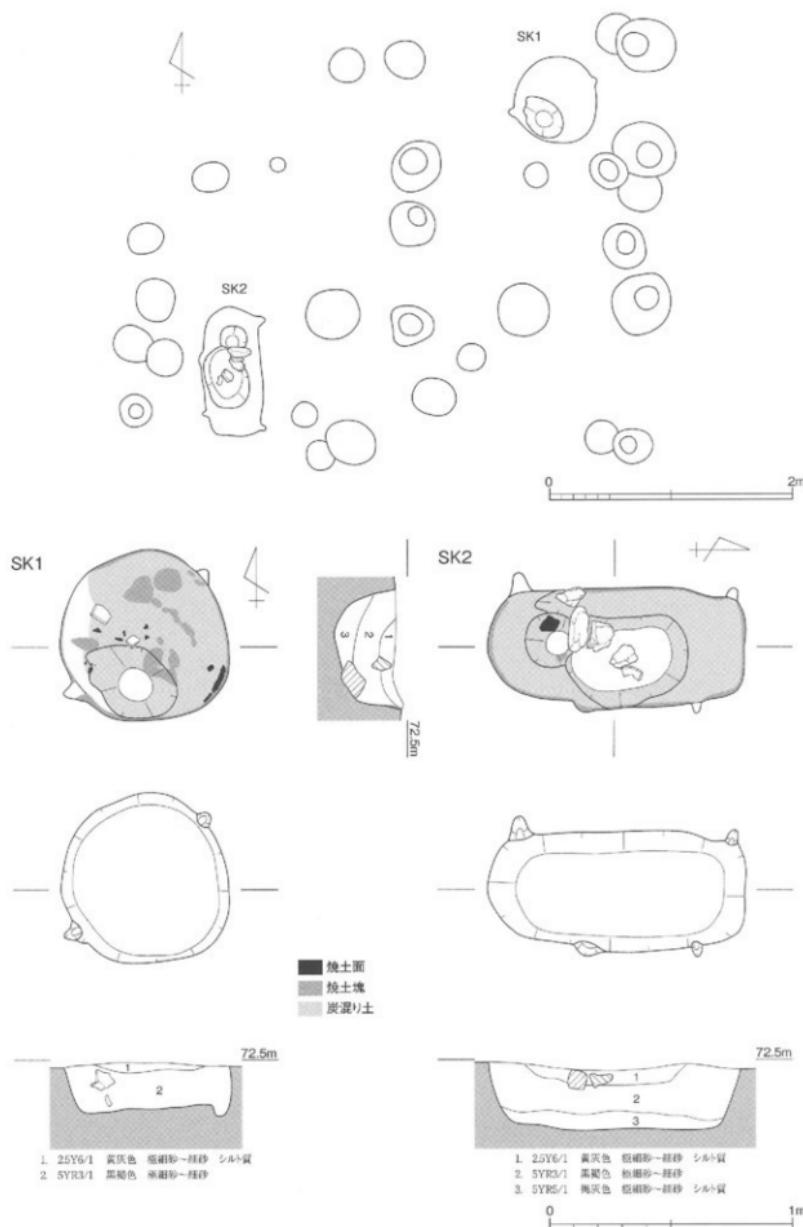


SB27

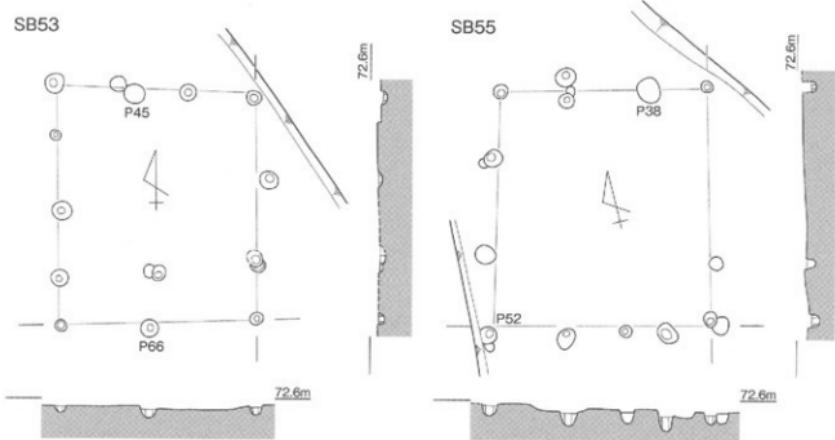
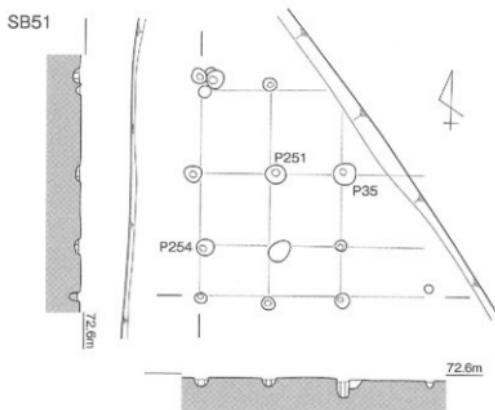


図版24 平瀬遺跡II区



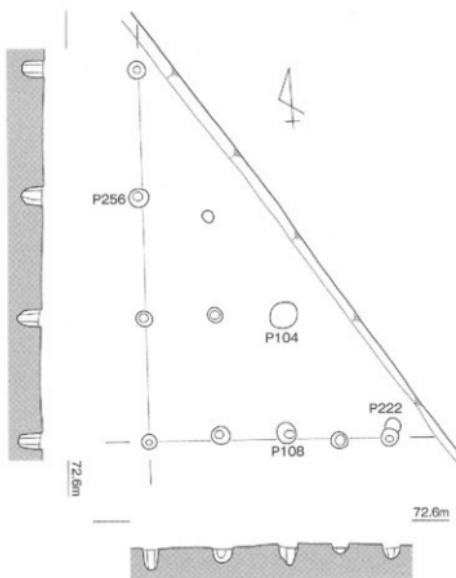


図版26 平瀬遺跡IV区

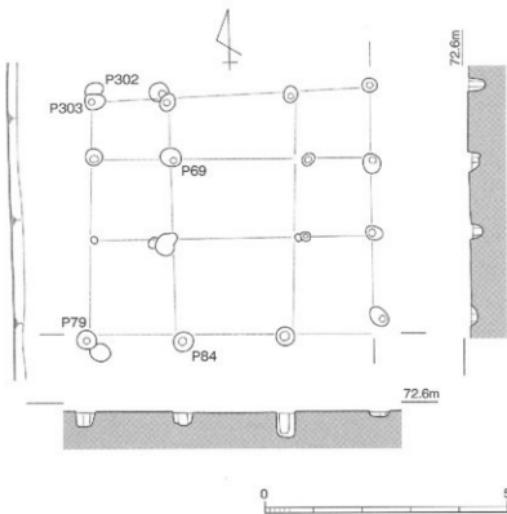


図版27 平瀬遺跡IV区

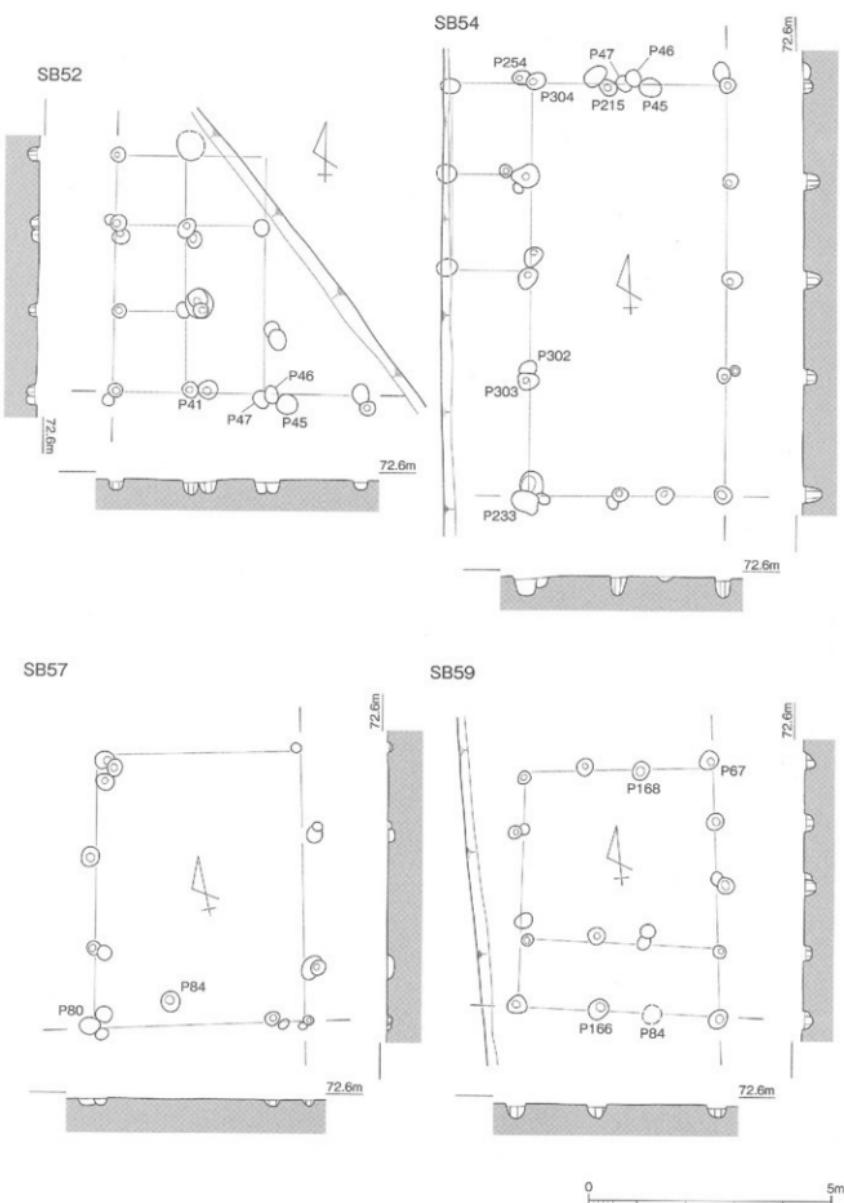
SB50



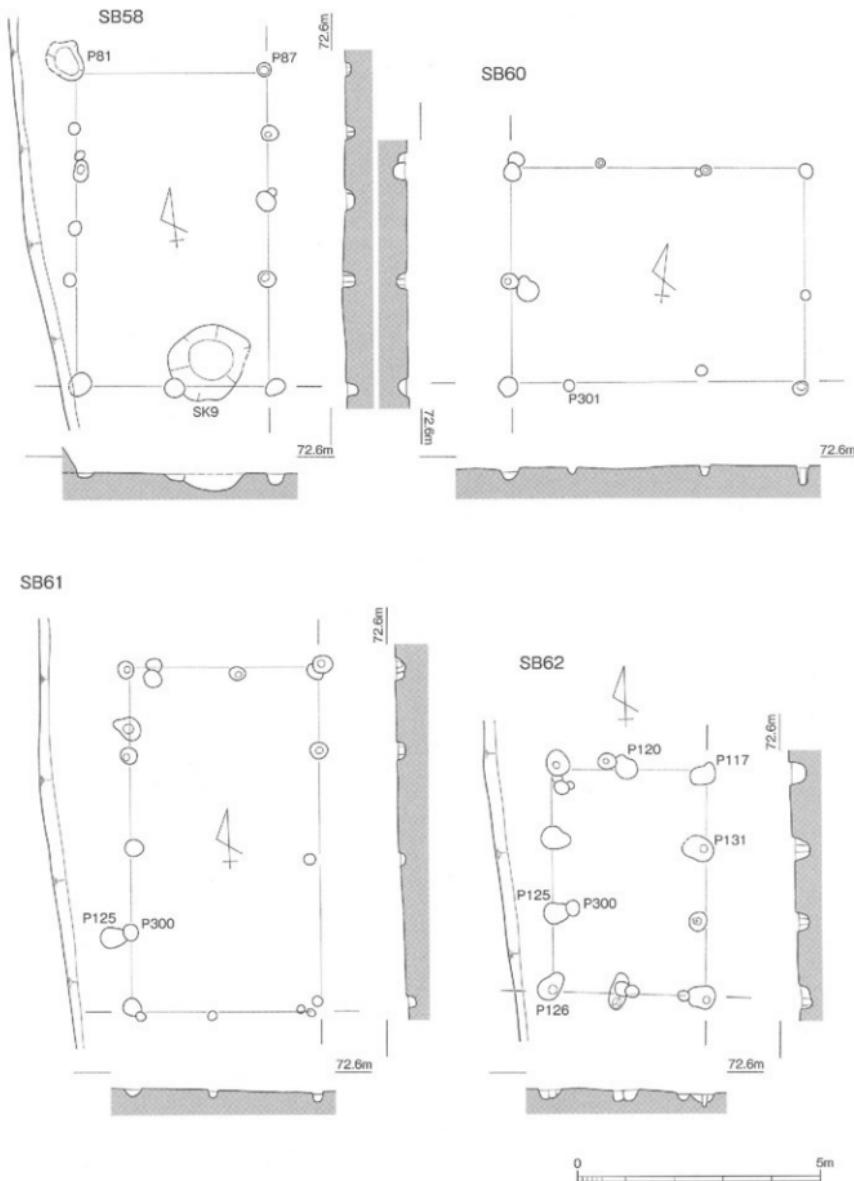
SB56



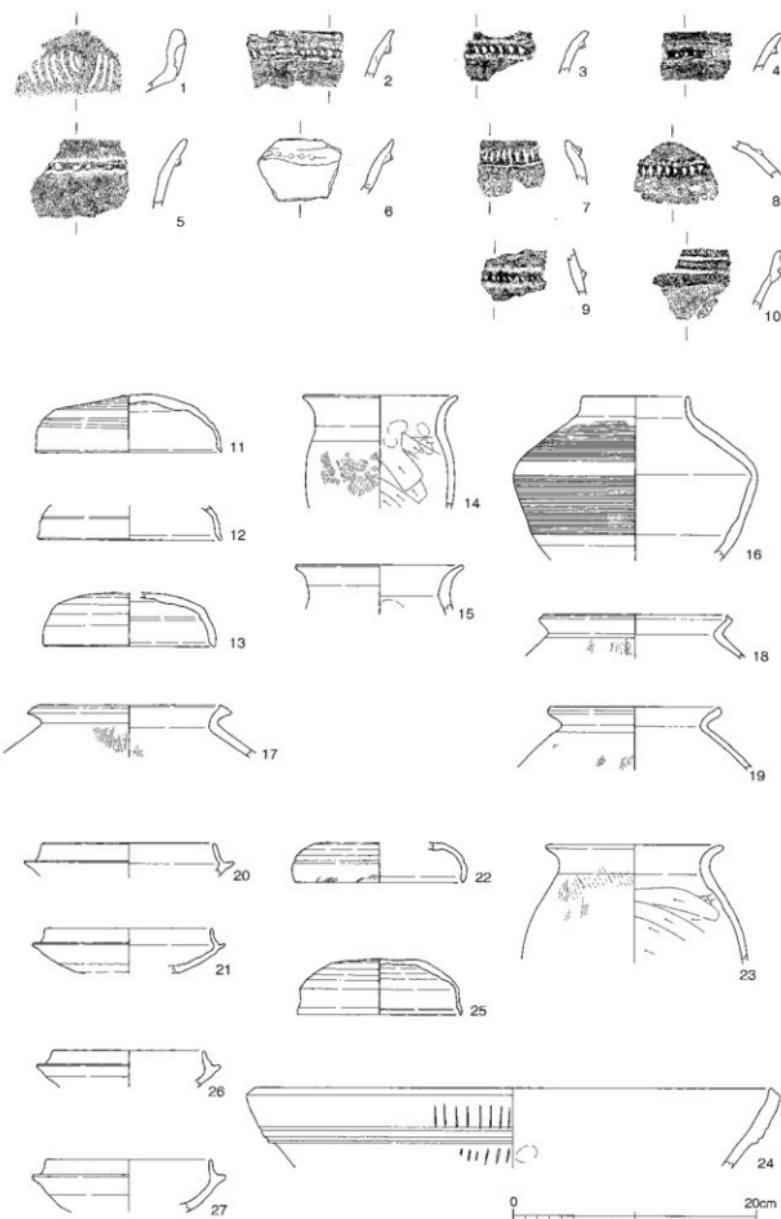
図版28 平瀬遺跡IV区



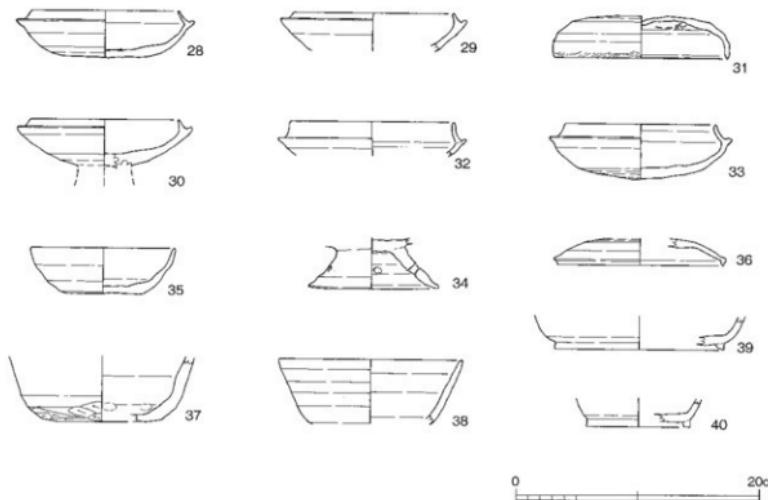
図版29 平瀬遺跡IV区



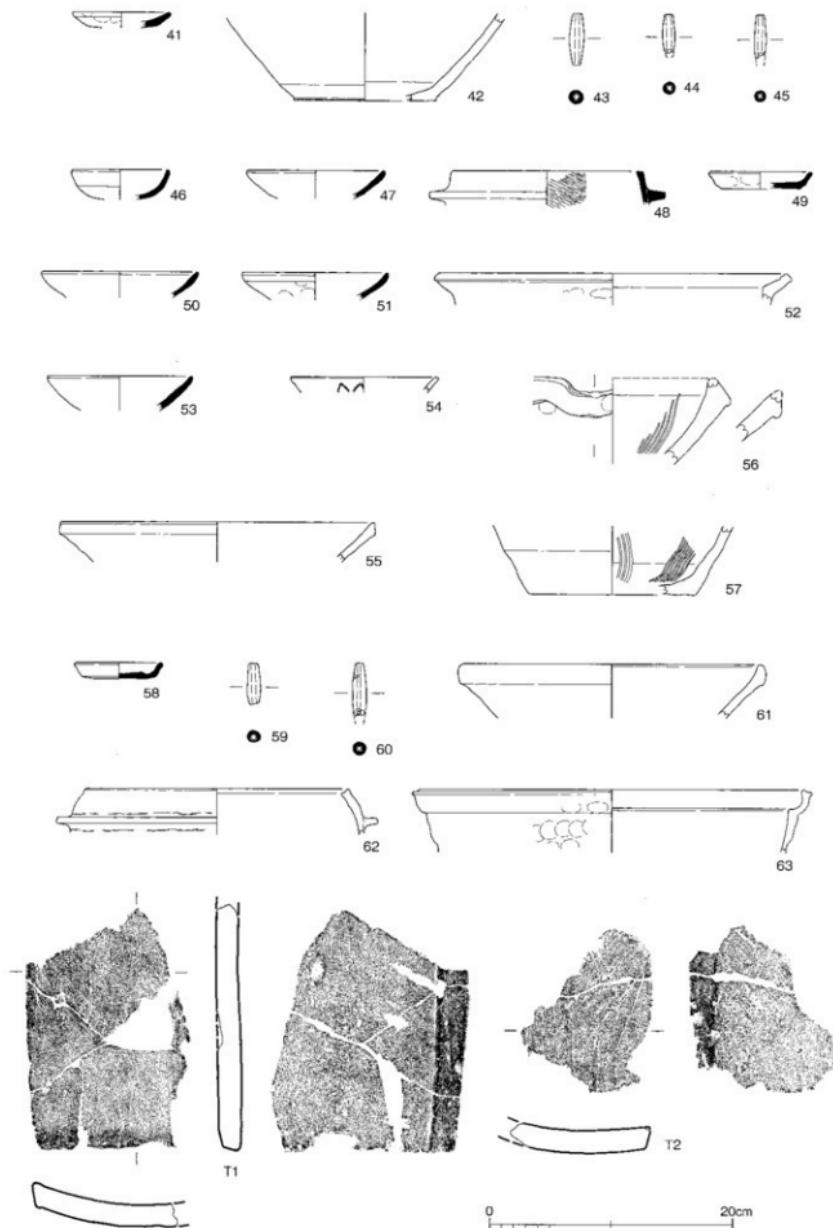
図版30 平瀬遺跡出土遺物



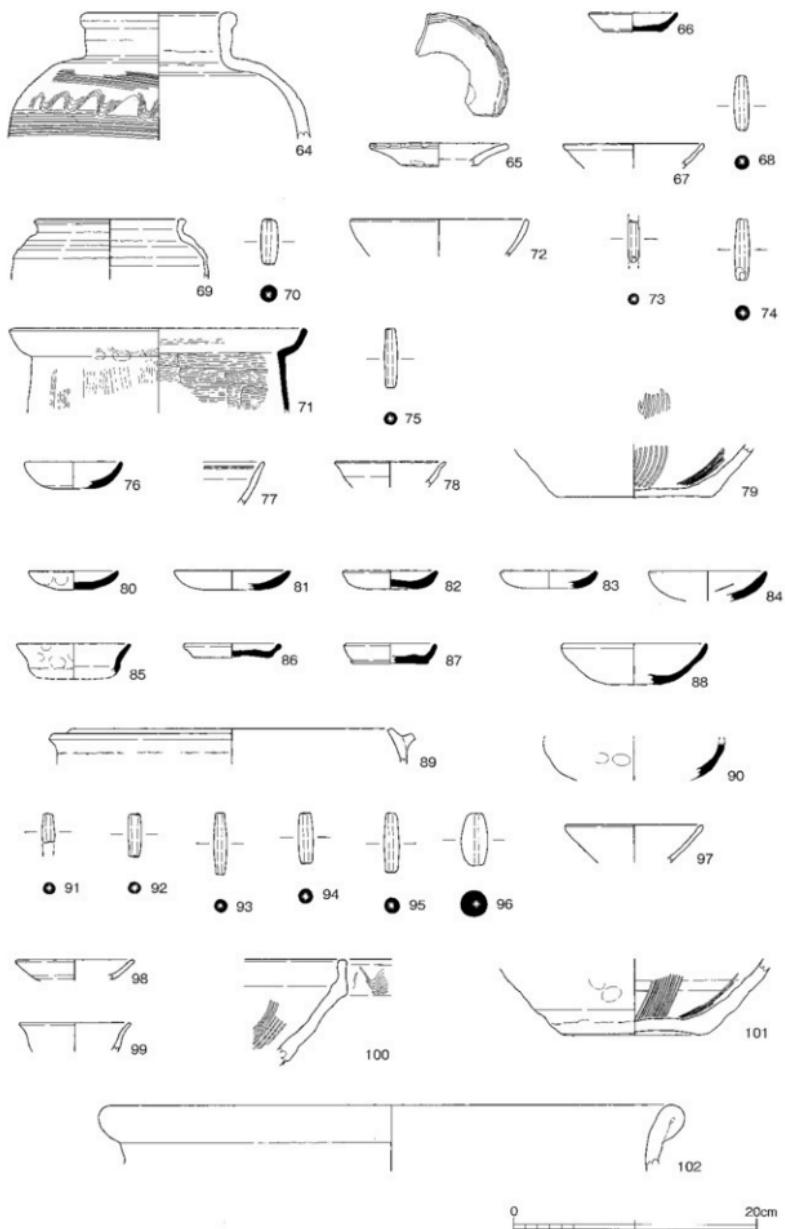
図版31 平瀬遺跡出土遺物



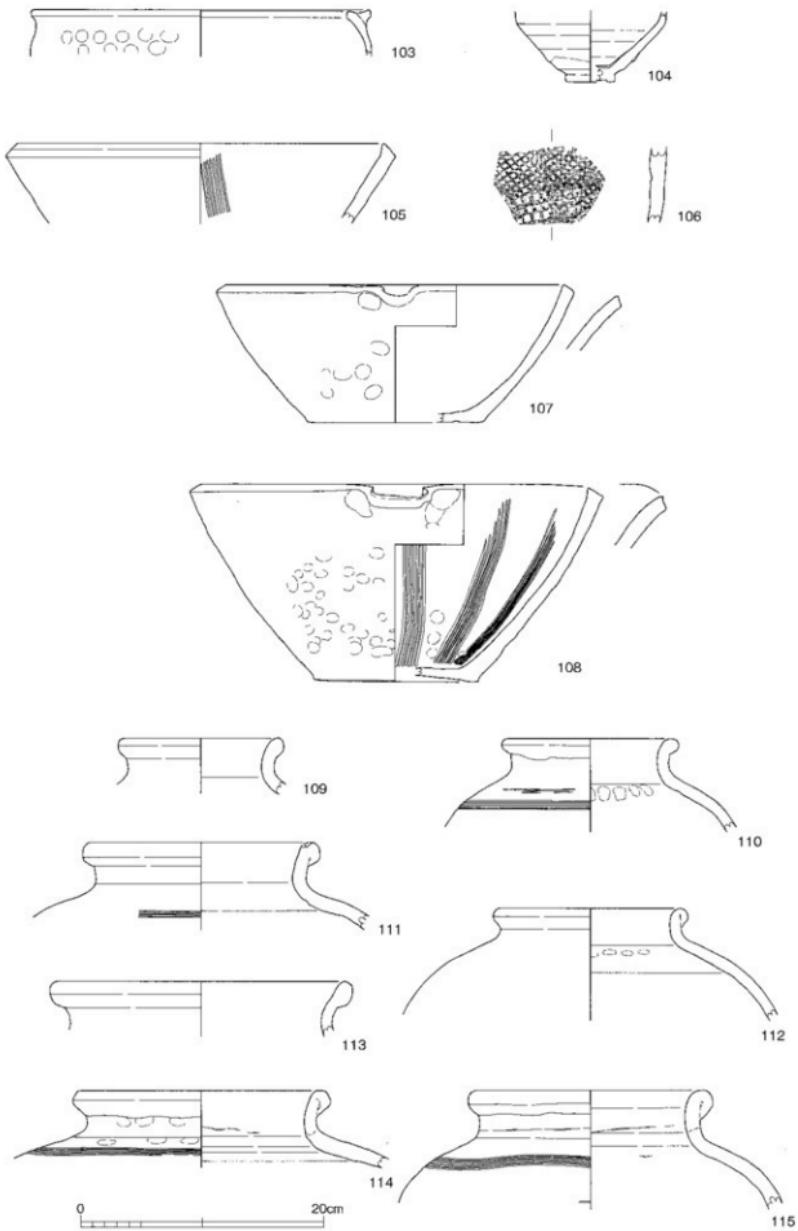
図版32 平瀬遺跡出土遺物



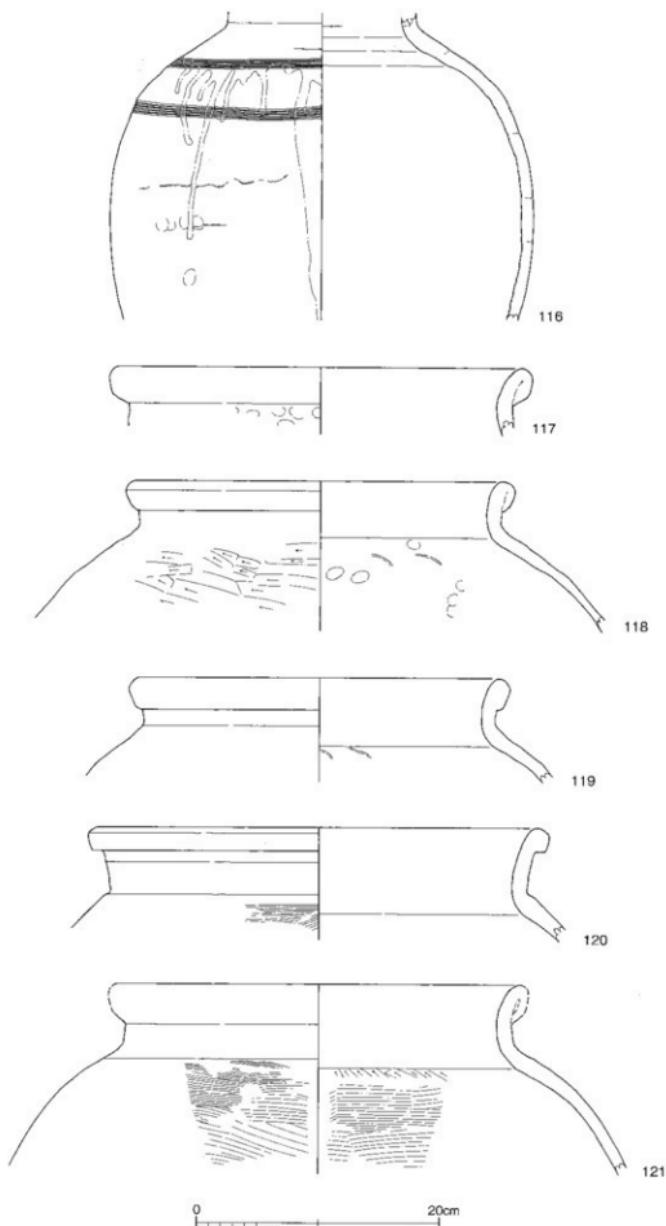
図版33 平瀬遺跡出土遺物



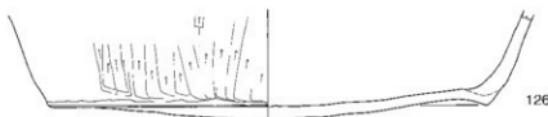
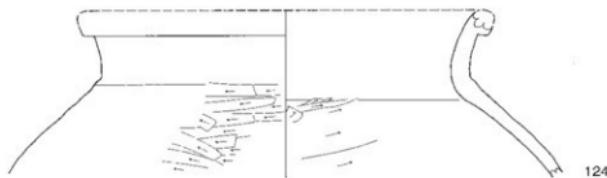
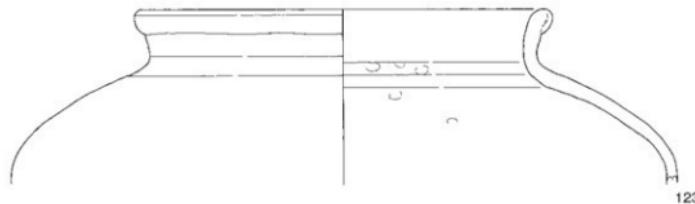
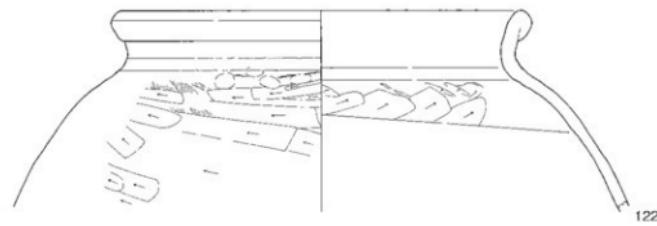
図版34 平瀬遺跡出土遺物



図版35 平瀬遺跡出土遺物

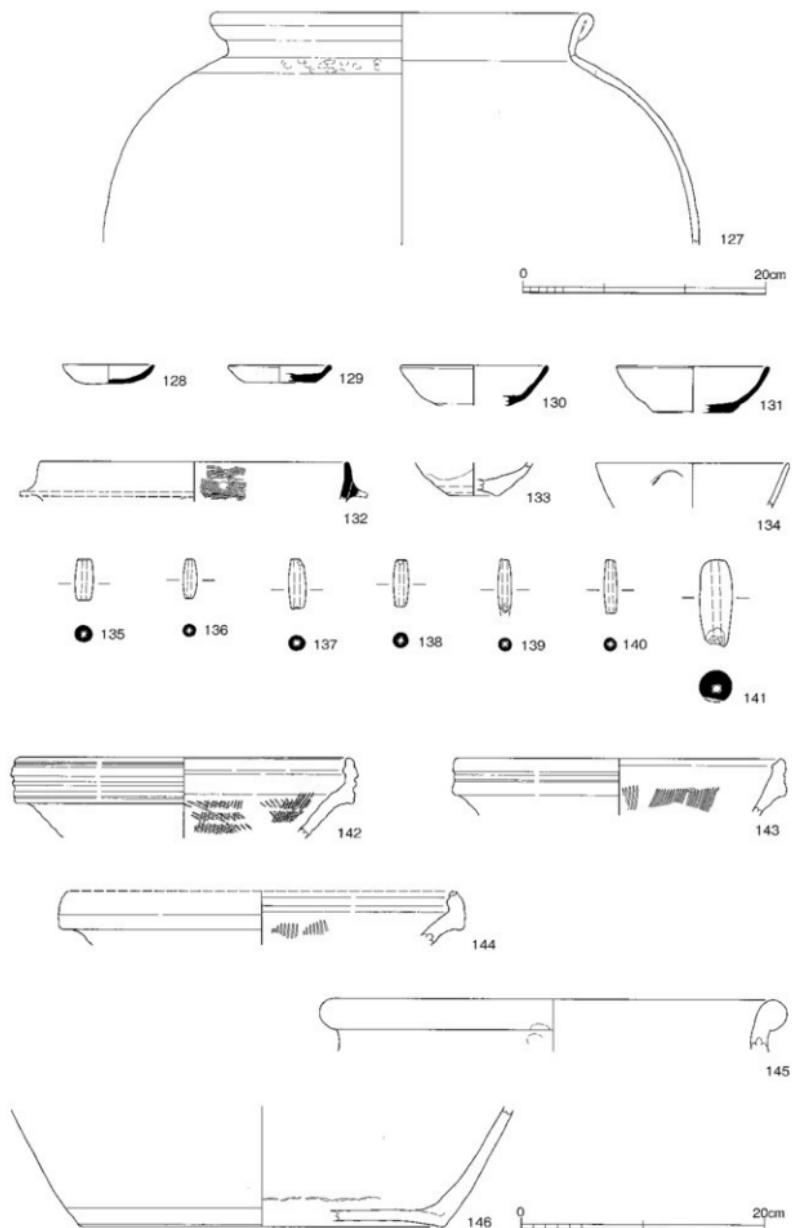


図版36 平瀬遺跡出土遺物

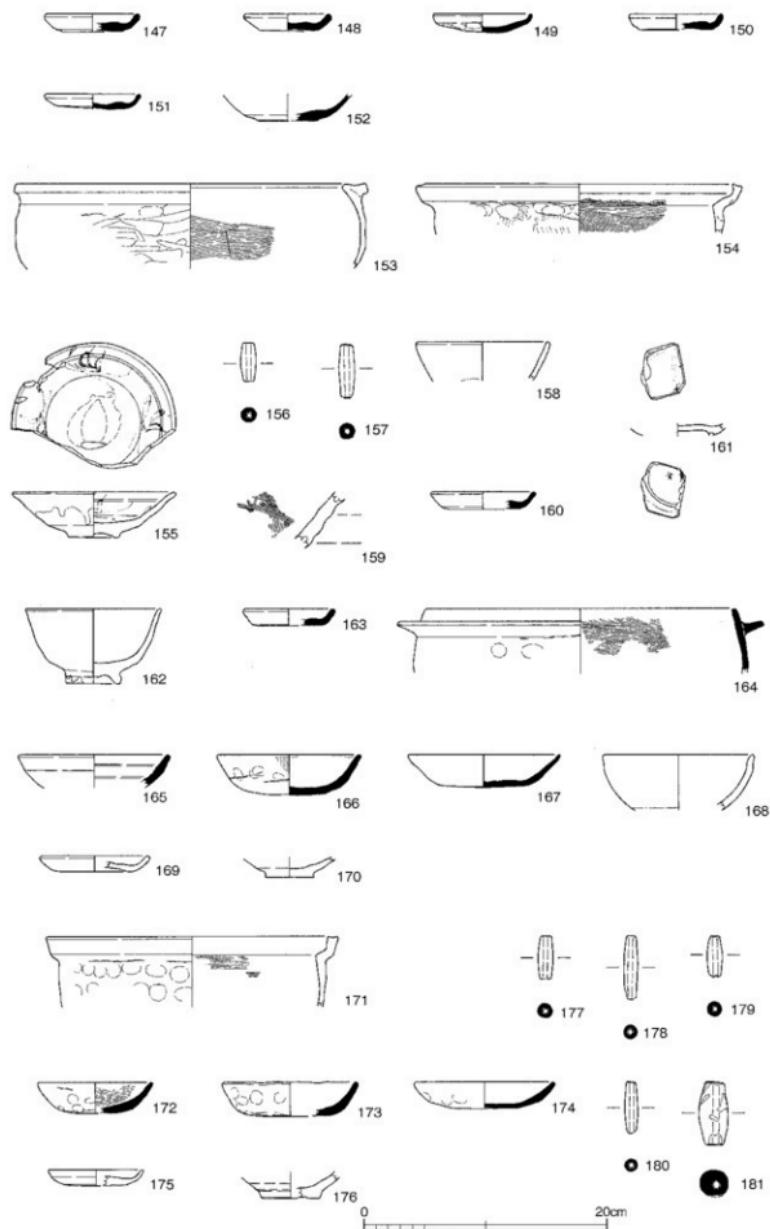


0 20cm

図版37 平瀬遺跡出土遺物

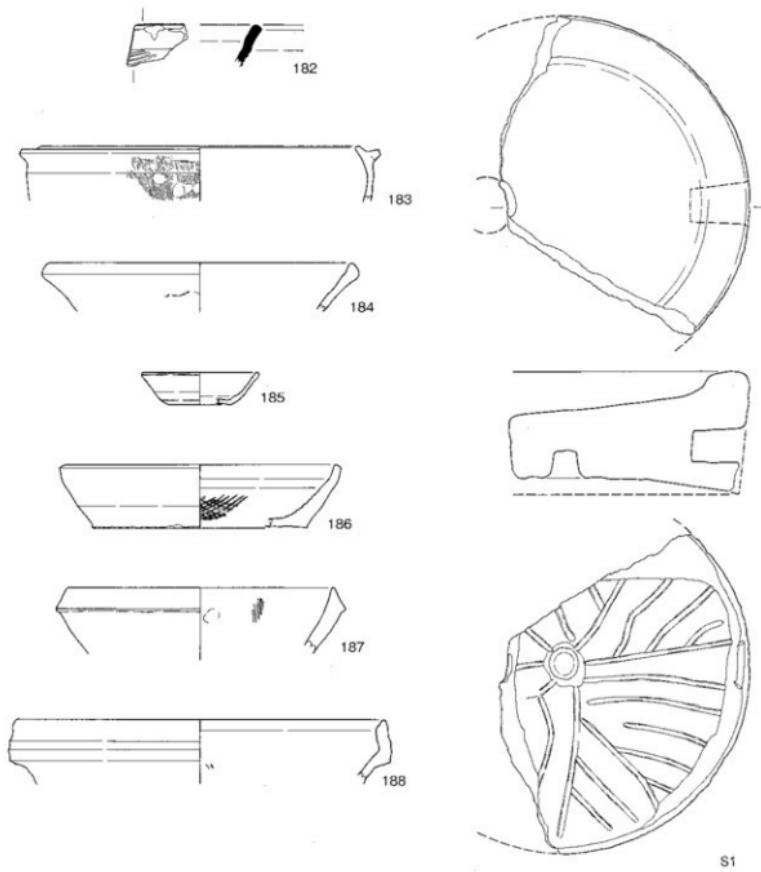


図版38 平瀬遺跡出土遺物



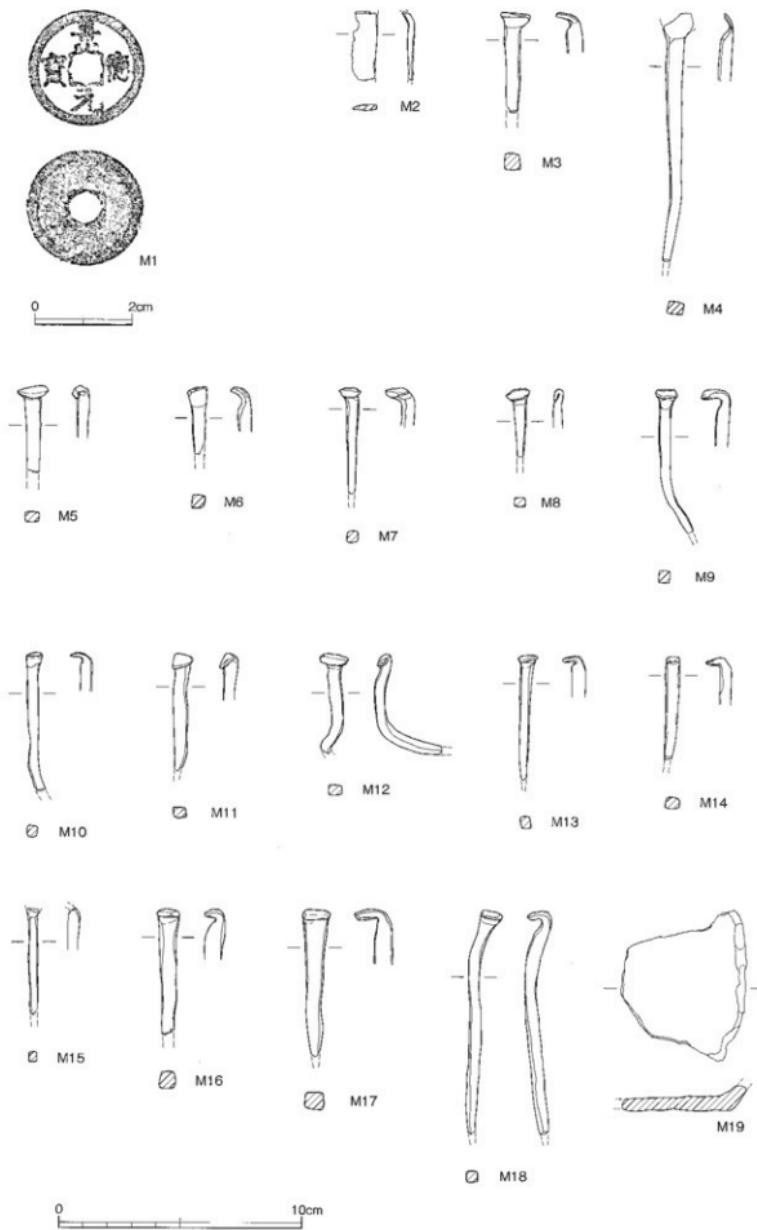
中世以降Ⅳ区1 (1/4)

図版39 平瀬遺跡出土遺物



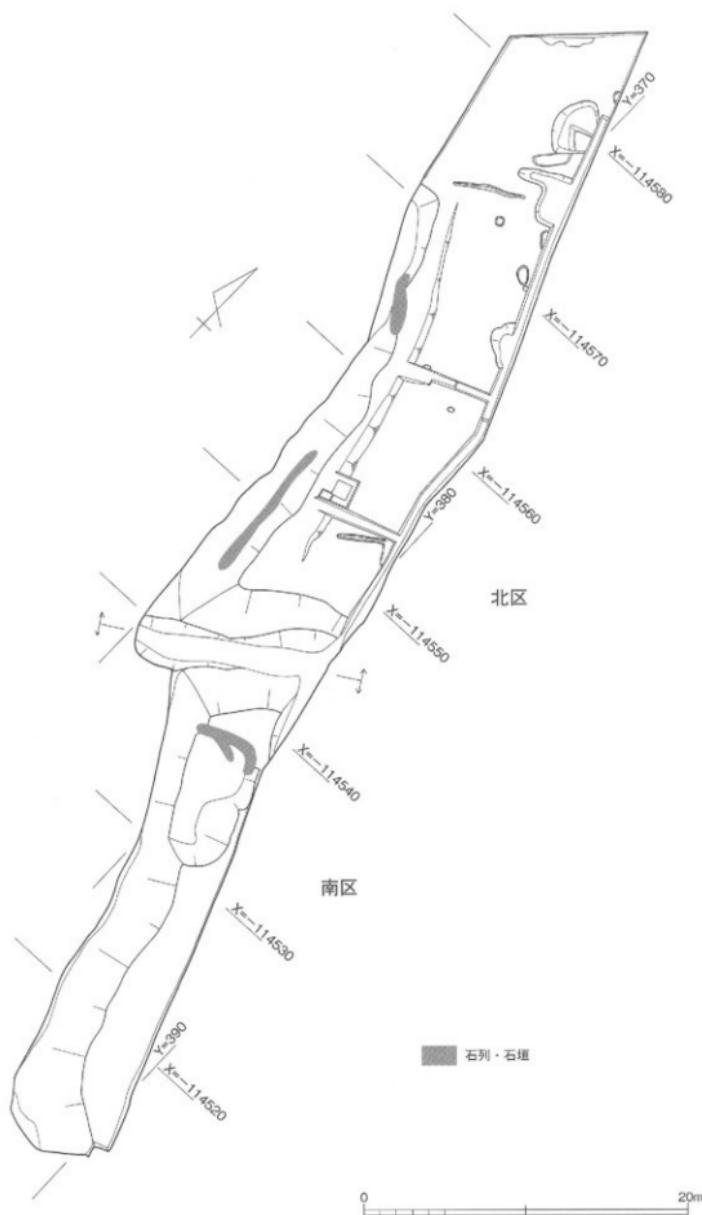
0 20cm

図版40 平瀬遺跡出土遺物



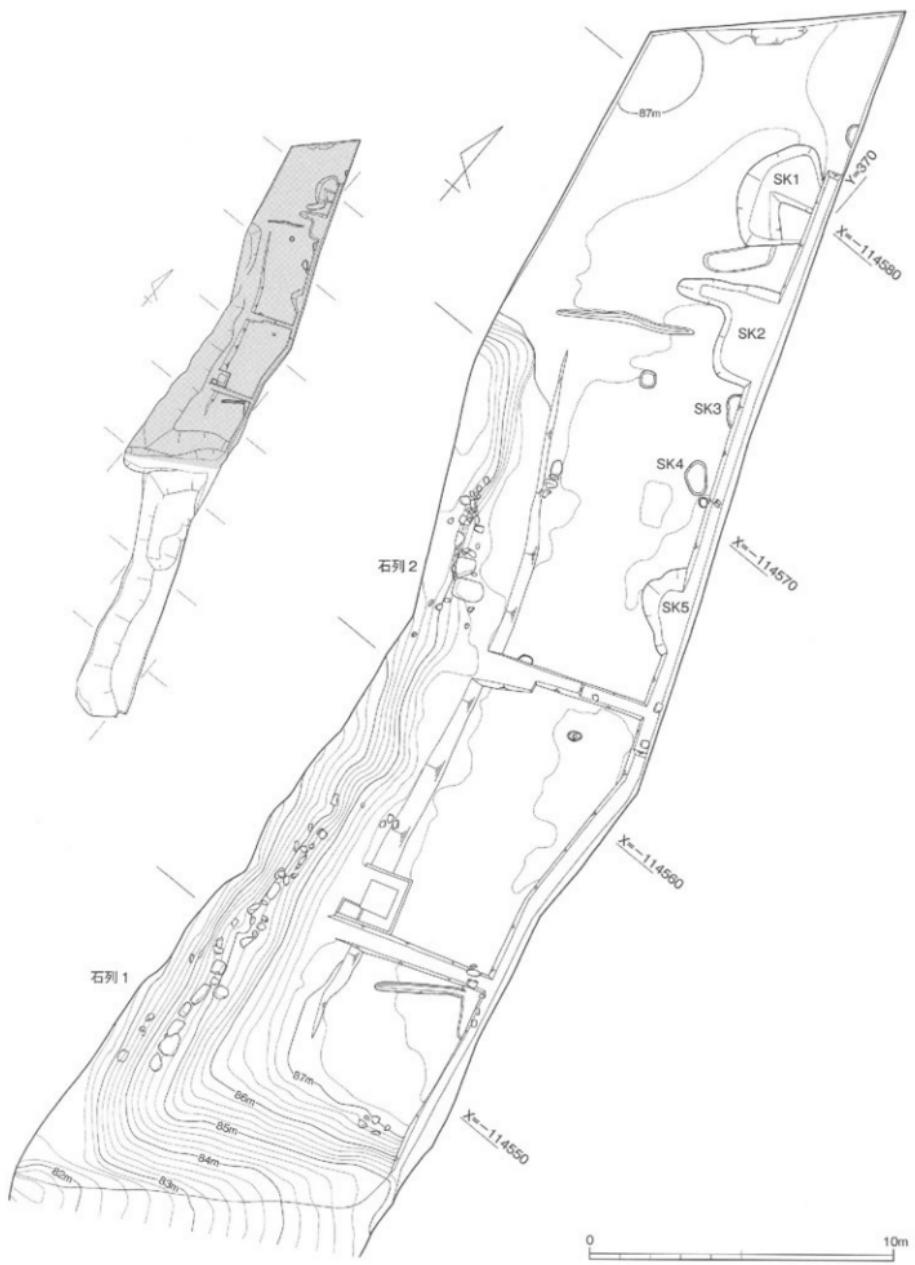
中世以降金属製品

図版41 円光寺遺跡

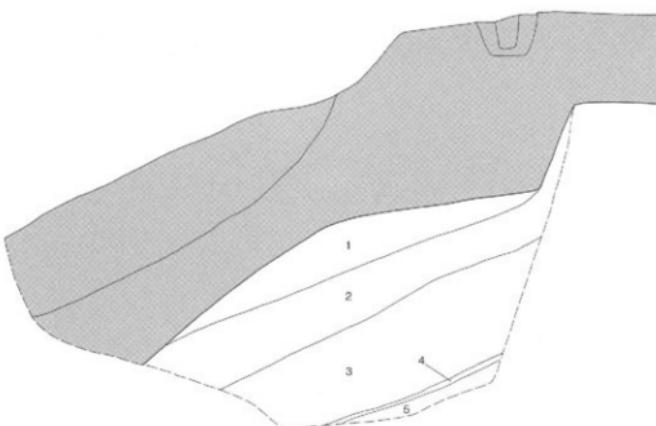


調査区全体図 (1/300)

図版42 円光寺遺跡北区



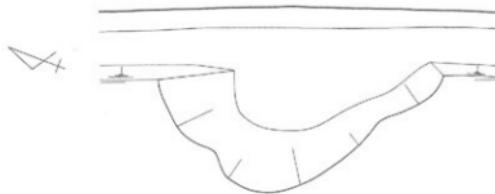
図版43 円光寺遺跡北区



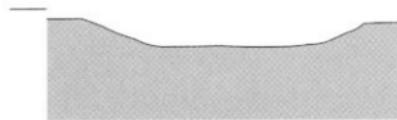
1. 緑褐色
2. 錆茶色 シルト
3. 鎮茶色 シルトと礫の互層
4. 黄褐色 シルト
5. 蒼色 シルト
アは近世以前の盛土



SK5



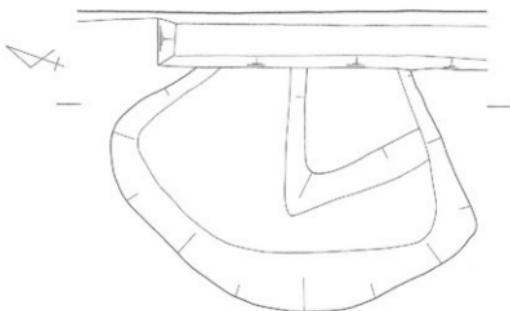
87.7m



盛土断面図 (1/40)・土抗(1) (1/50)

図版44 円光寺遺跡北区

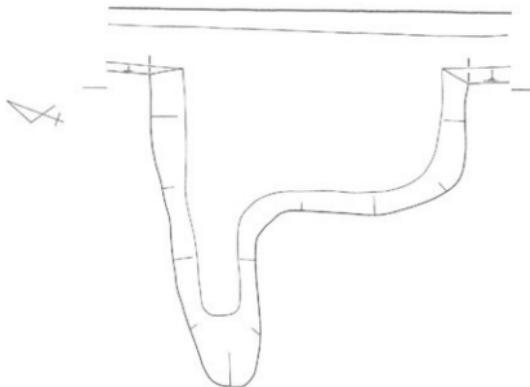
SK1



87.7m



SK2

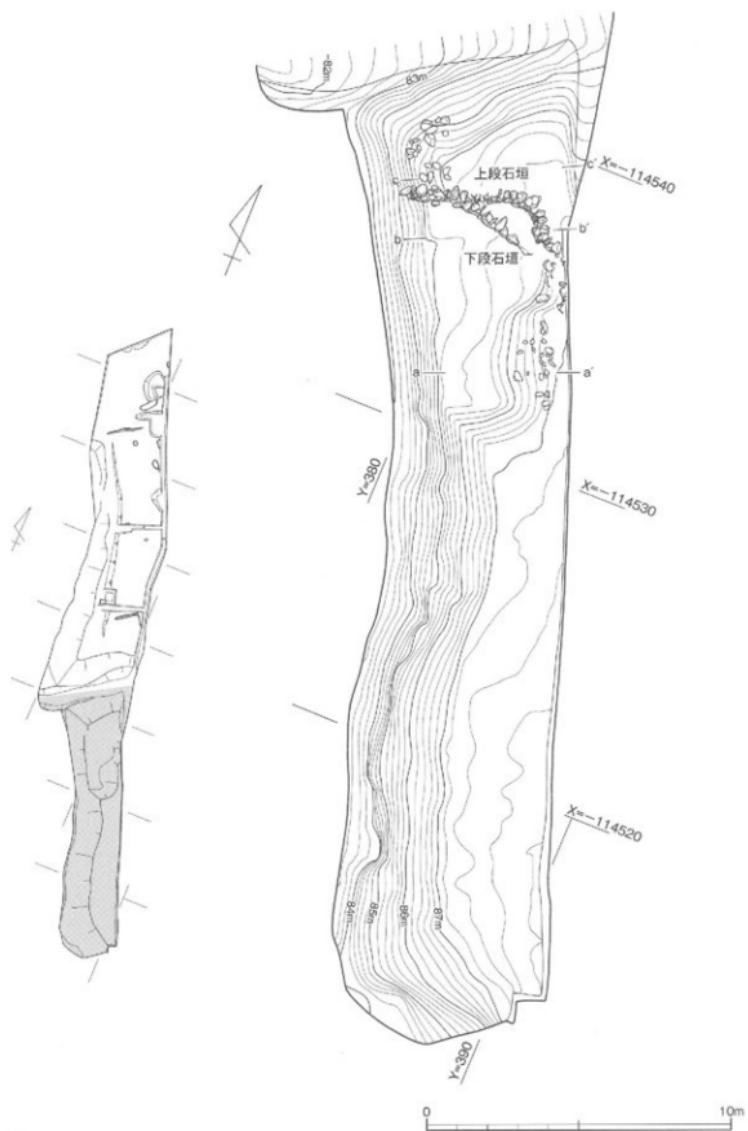


87.7m



土抗(2) (1/50)

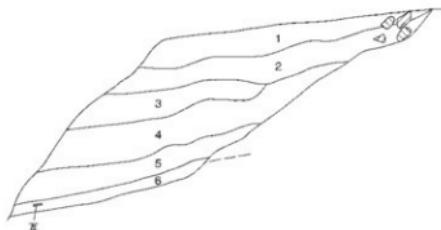
図版45 円光寺遺跡南区



図版46 円光寺遺跡南区

a———

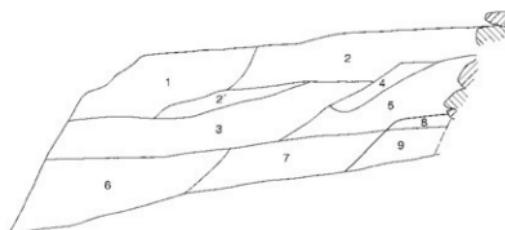
87.2m a'



1. SYR5/1 淡灰色 シルト質細粒砂～細砂
2. SYR5/1 淡灰色 シルト質細粒砂～細砂
3. SYR5/1 淡灰色 シルト質細粒砂～細砂
4. SYR5/1 淡灰色 シルト質細粒砂～細砂
5. SYR4/1 淡灰色 シルト質細粒砂～細砂
6. SYR4/2 淡灰色 シルト質細粒砂～細砂(Al片を多く含む)

b———

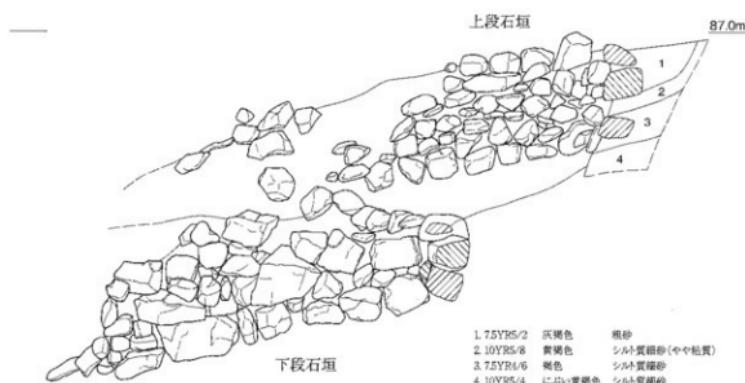
87.2m b'



1. 10YR5-2 淡黄褐色 粗粒砂～細砂
2. 10YR5-3 にじみ黄褐色 粗粒砂(Al片多量に含む, 黄泥じり)
- 2'. 5Y5/2 灰オリーブ色 粗粒砂～細砂(Al片多量に含む, 黄泥じり)
3. 25Y5/1 黄褐色 粗粒砂(Al片多量に含む, 黄泥じり)
4. 25Y6/4 にじみ黄色 粗粒砂～細砂
5. 5Y5/3 灰オリーブ色 シルト質細粒砂～粗粒砂
6. 5Y5/2 灰オリーブ色 粗粒砂～細砂(土片・土器片含む)
7. 5Y5/1 灰色 シルト質細粒砂～粗粒砂(便土片・土器片含む)
8. 25Y5/1 黄褐色 シルト質細粒砂～粗粒砂
9. 10YR5/4 にじみ黄褐色 シルト質細粒砂～粗粒砂



斜面堆積状況 (1/40)

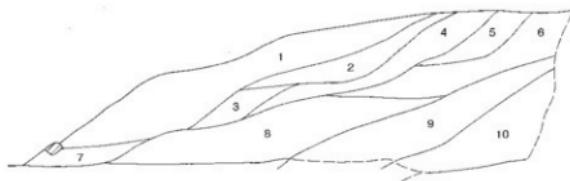


石垣平・立面図 (1/40)

図版48 円光寺遺跡南区

c ——

87.0m c'

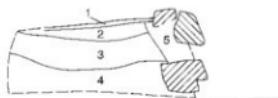


上段盛土断面

- | | | |
|-------------|--------|---------------|
| 1. 25Y5/2 | 暗灰褐色 | シルト質細砂(疊多く含む) |
| 2. 10YR5/3 | にじみ黄褐色 | 壤 |
| 3. 10YR5/3 | にじみ黄褐色 | シルト質細砂 |
| 4. 10YR5/8 | 明黄褐色 | シルト質細砂 |
| 5. 5YR4/2 | 灰褐色 | 壤 |
| 6. 25YR5/4 | にじみ褐色 | シルト質細砂(疊多く含む) |
| 7. 75YR4/2 | 灰褐色 | シルト質細砂 |
| 8. 10YR5/3 | にじみ黄褐色 | シルト質細砂(疊多く含む) |
| 9. 10YR5/4 | にじみ黄褐色 | シルト質細砂 |
| 10. 75YR5/3 | にじみ褐色 | シルト質細砂 |

d ——

85.5m d'

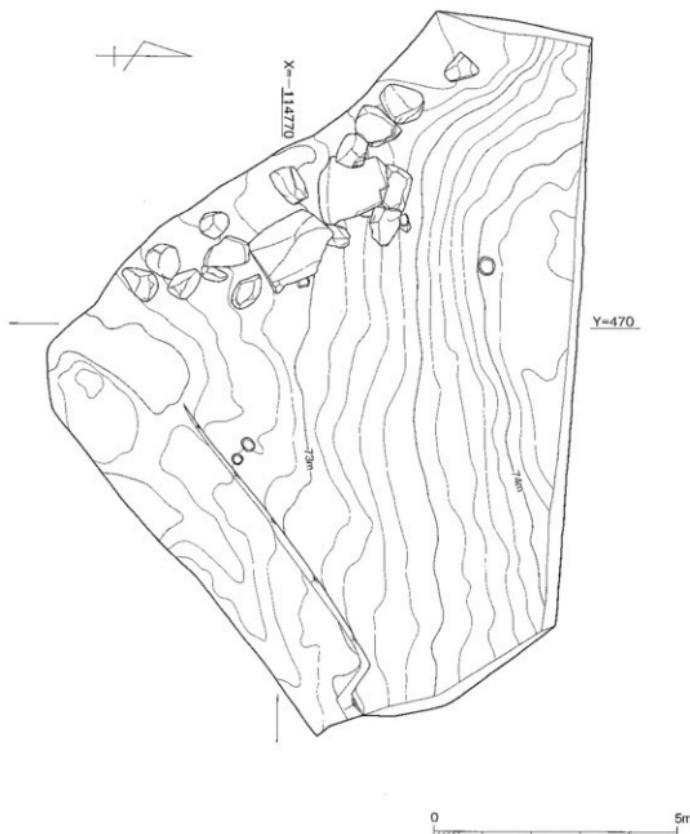


下段石垣裏込め断面

- | | | |
|------------|--------|---------------|
| 1. SYR5/3 | にじみ赤褐色 | シルト質細砂 |
| 2. 砂層 | | |
| 3. 10YR6/6 | 明黄褐色 | シルト質細砂 |
| 4. 75YR5/4 | にじみ褐色 | シルト質細砂 |
| 5. 75YR5/1 | 黒灰褐色 | シルト質細砂(疊多く含む) |

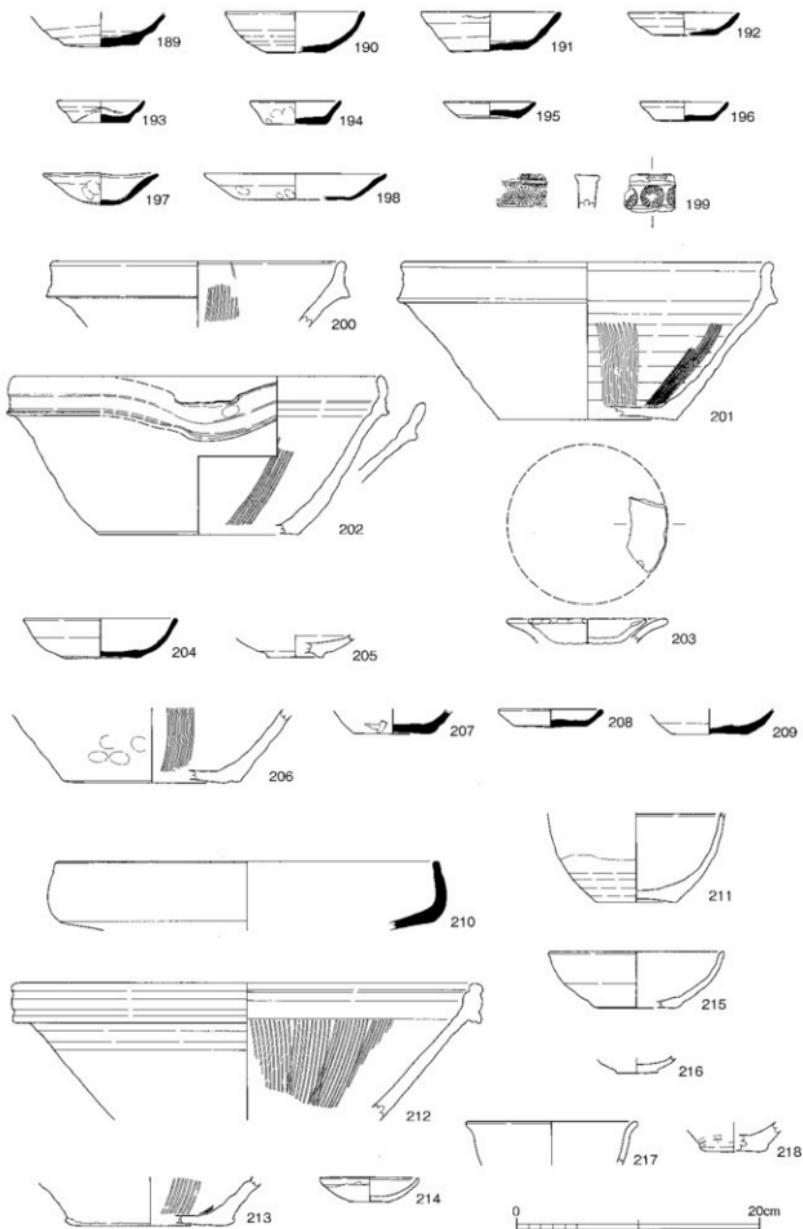


図版49 円光寺古墳



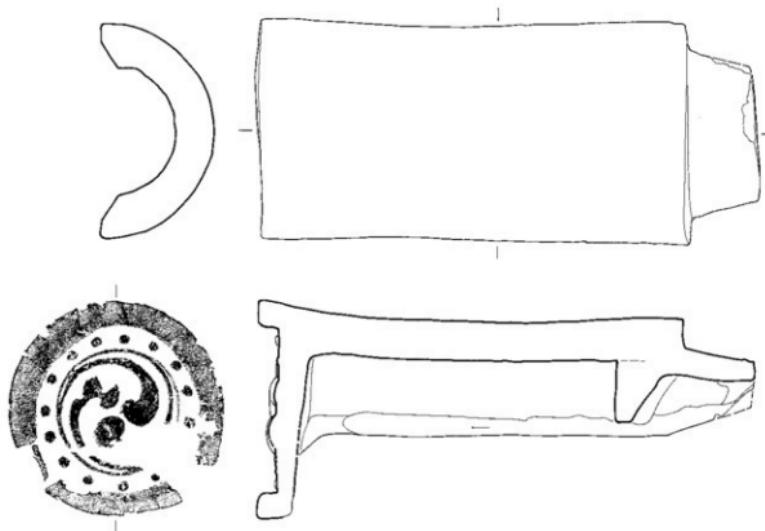
調査区全体図 (1/100)

図版50 円光寺遺跡出土遺物

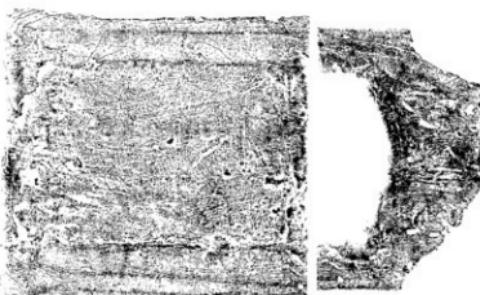


土器

図版51 円光寺遺跡出土遺物



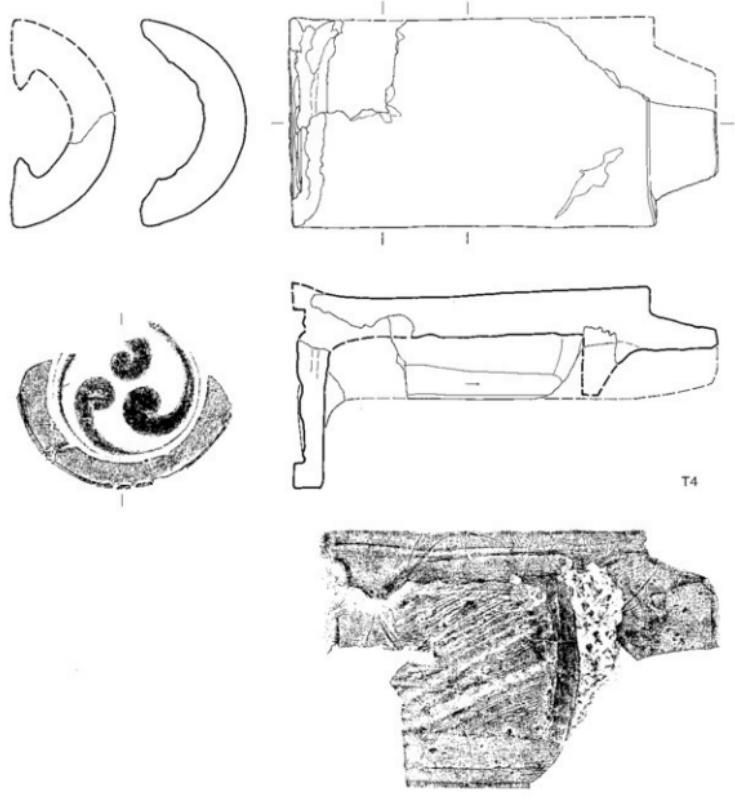
T3



0 20cm

軒丸瓦(1)

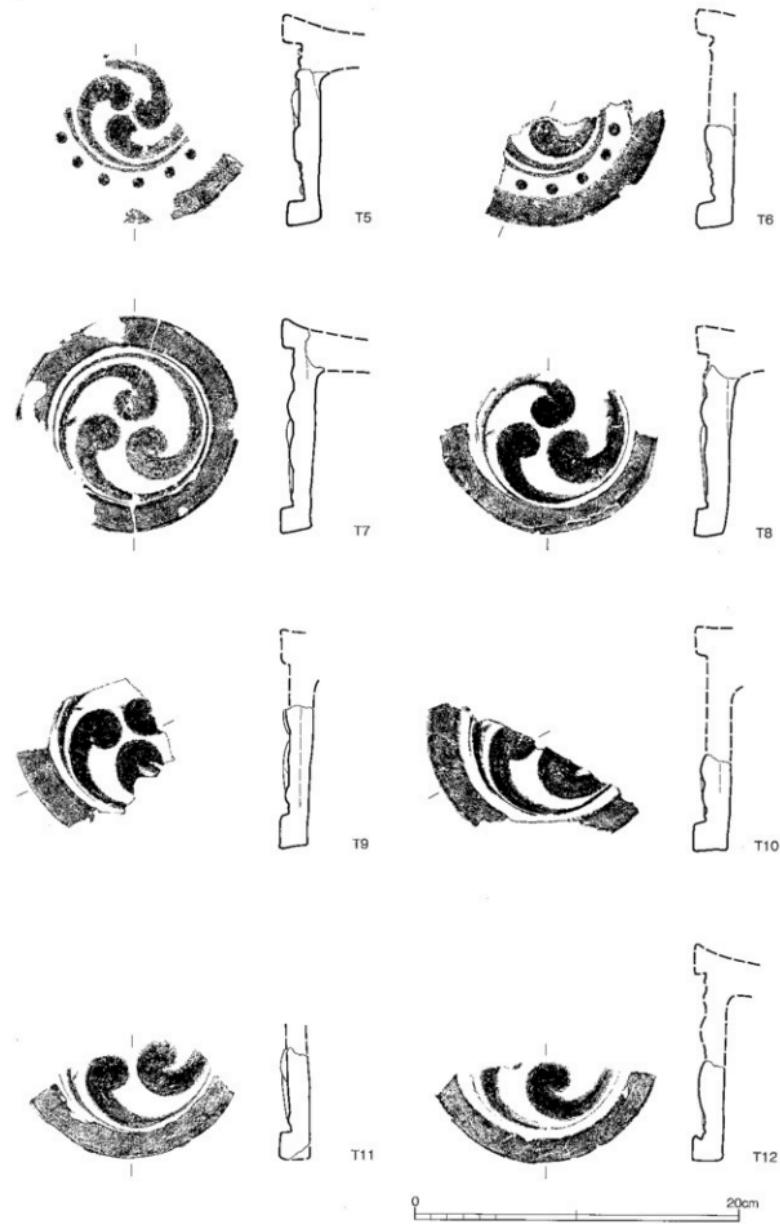
図版52 円光寺遺跡出土遺物



0 20cm

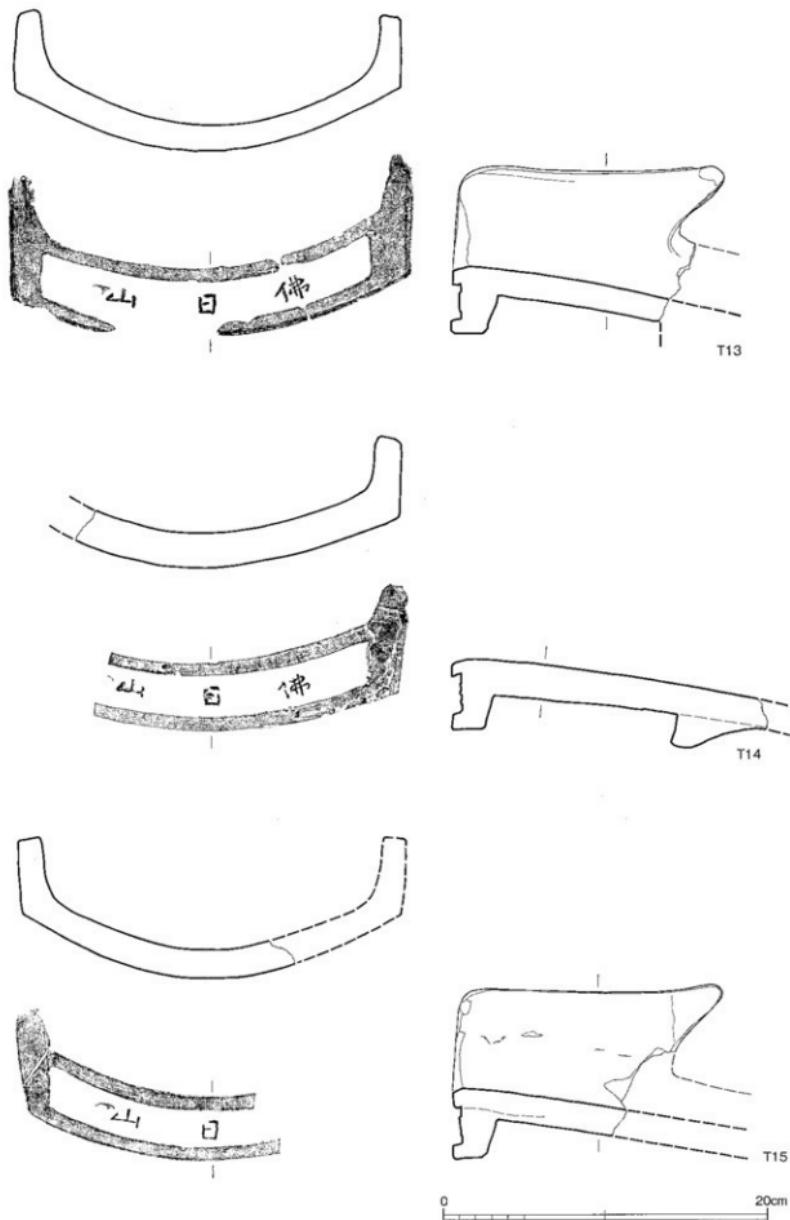
軒丸瓦(2)

図版53 円光寺遺跡出土遺物



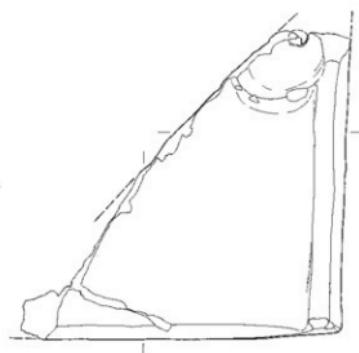
軒丸瓦(3)

図版54 円光寺遺跡出土遺物



軒平瓦(1)

図版55 円光寺遺跡出土遺物



T16

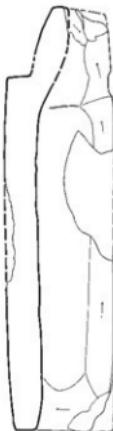
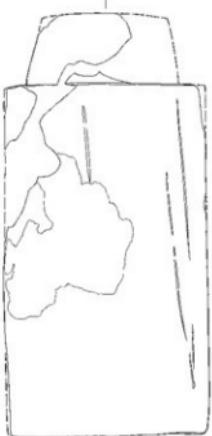


T17

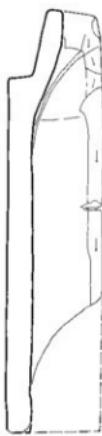
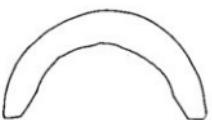


軒平瓦(2)

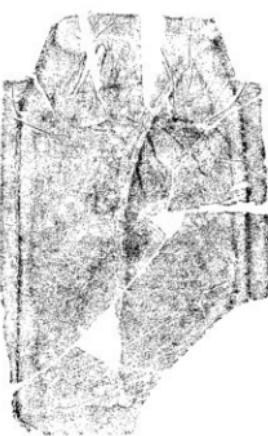
図版56 円光寺遺跡出土遺物



T18

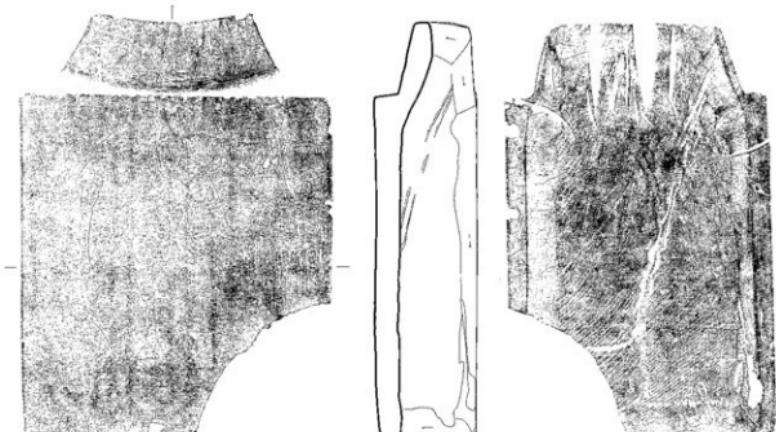


T19

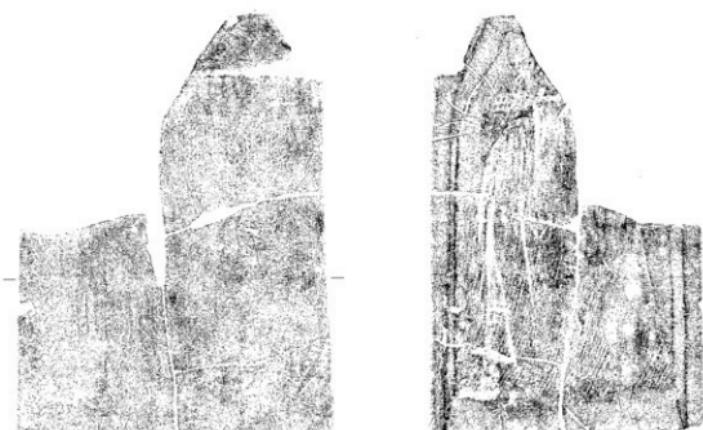
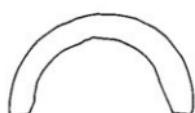


丸瓦(1)

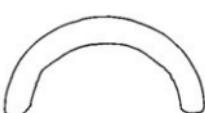
図版57 円光寺遺跡出土遺物



T20

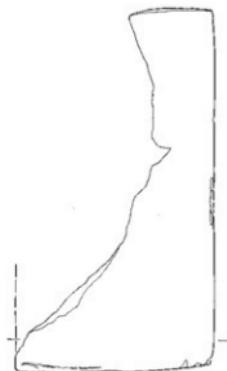


T21

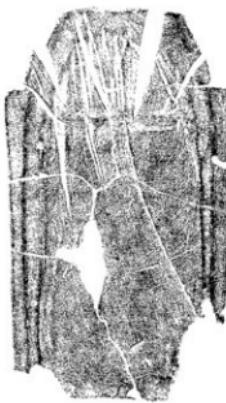


丸瓦(2)

図版58 円光寺遺跡出土遺物



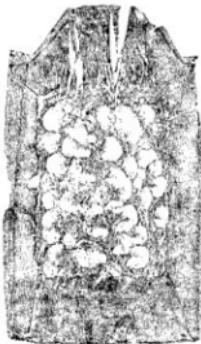
T22



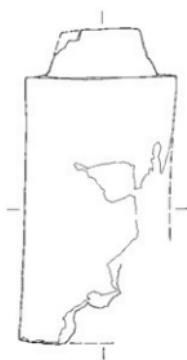
T23



丸瓦(3)



T24

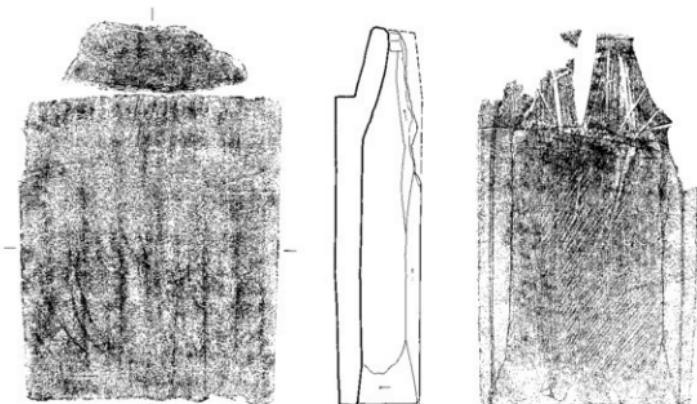


T25

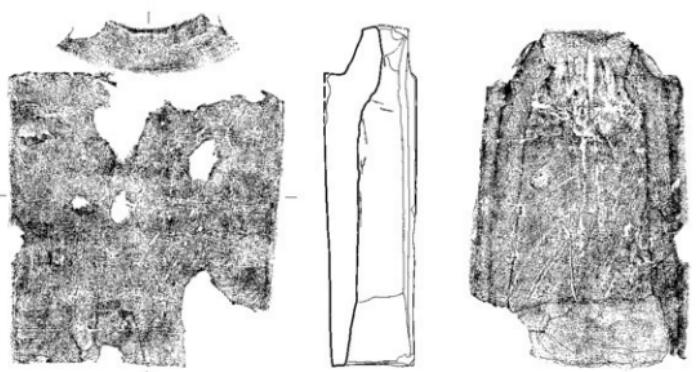


丸瓦(4)

図版60 円光寺遺跡出土遺物



T26

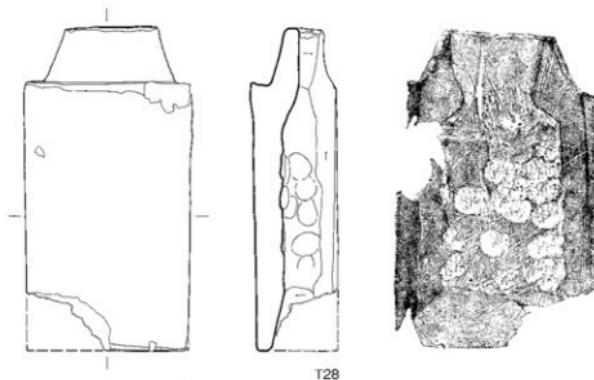


T27

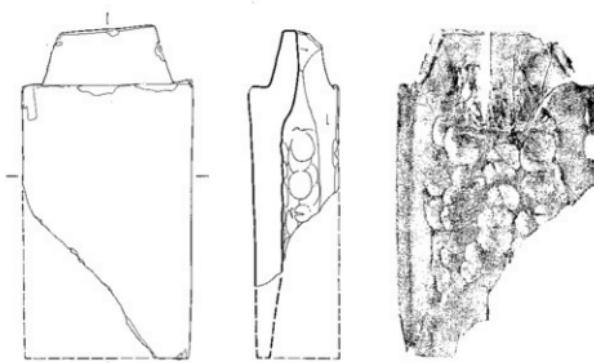


丸瓦(5)

図版61 円光寺遺跡出土遺物



T28

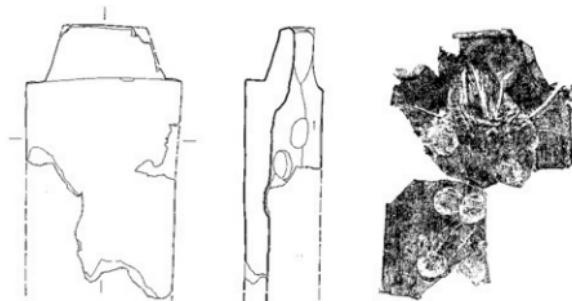


T29

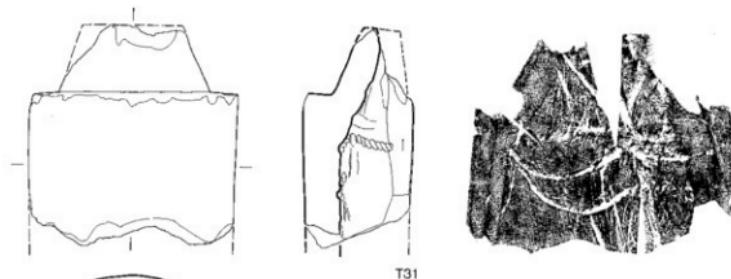


丸瓦(6)

図版62 円光寺遺跡出土遺物



T30



T31



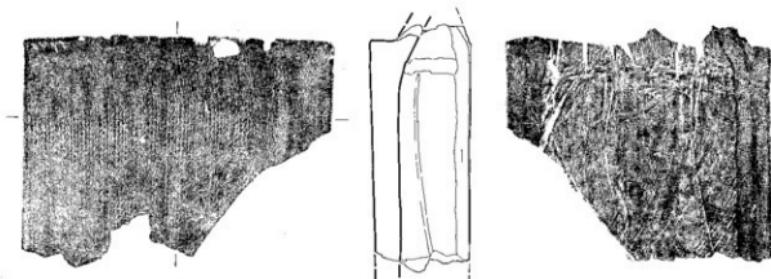
T32

T33

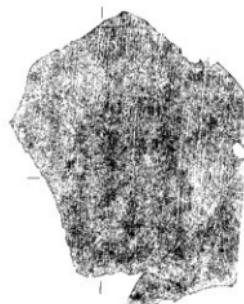


丸瓦(7)

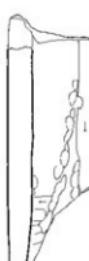
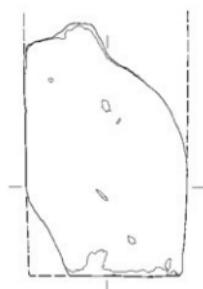
図版63 円光寺遺跡出土遺物



T34



T35

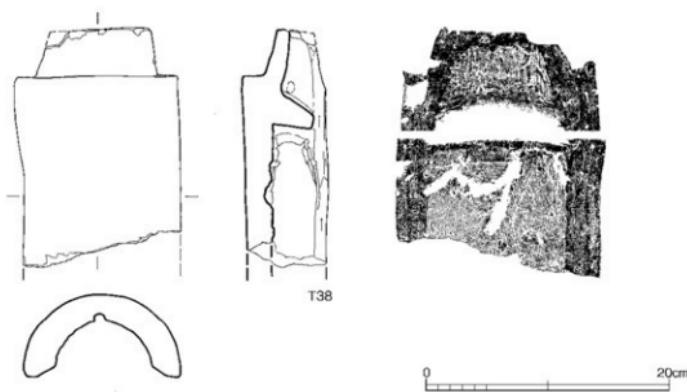
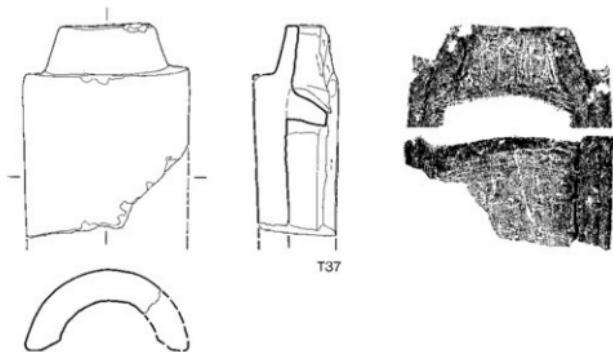


T36

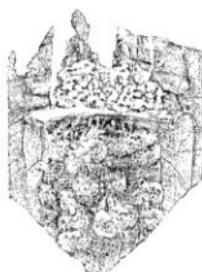
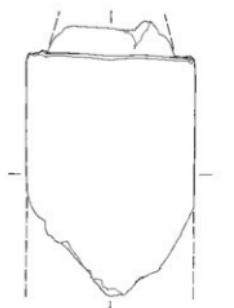


丸瓦(8)

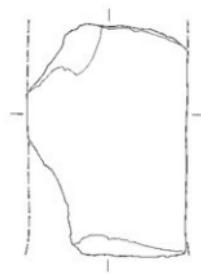
図版64 円光寺遺跡出土遺物



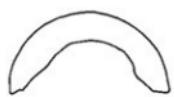
図版65 円光寺遺跡出土遺物



T39

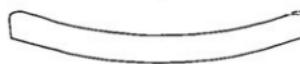


T40



丸瓦(10)

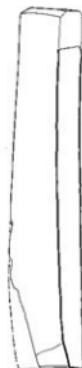
図版66 円光寺遺跡出土遺物



T41



T42



T43

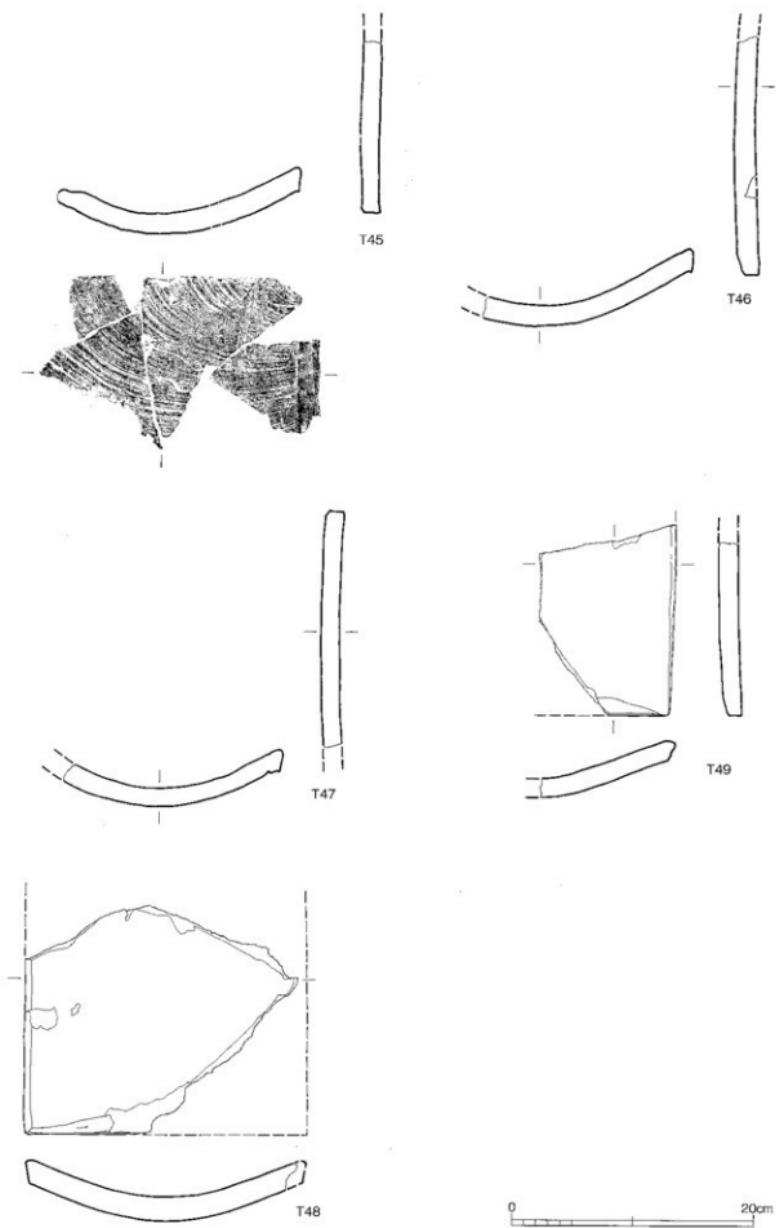


T44



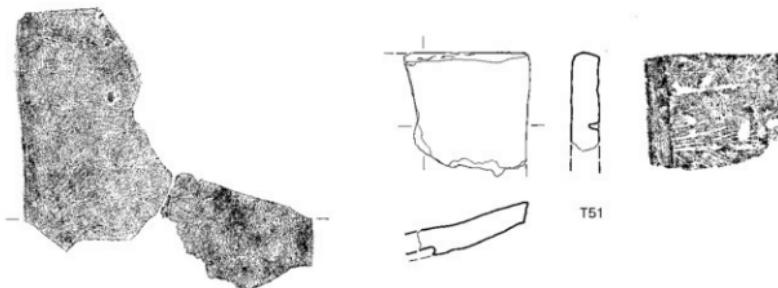
平瓦(1)

図版67 円光寺遺跡出土遺物

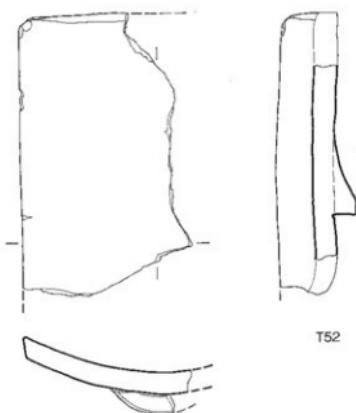


平瓦(2)

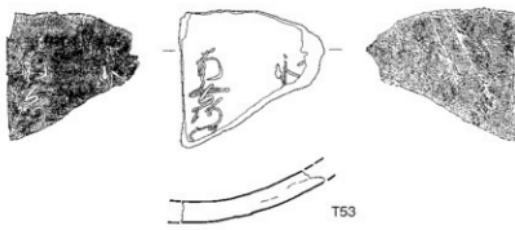
図版68 円光寺遺跡出土遺物



T51



T52

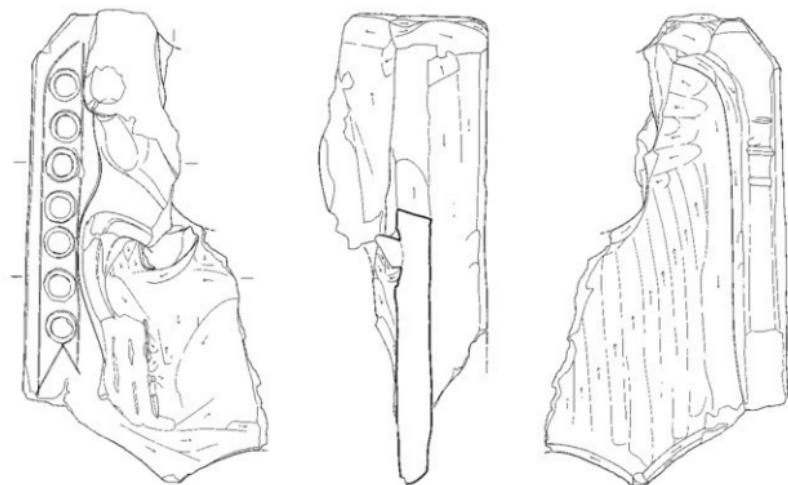


T53

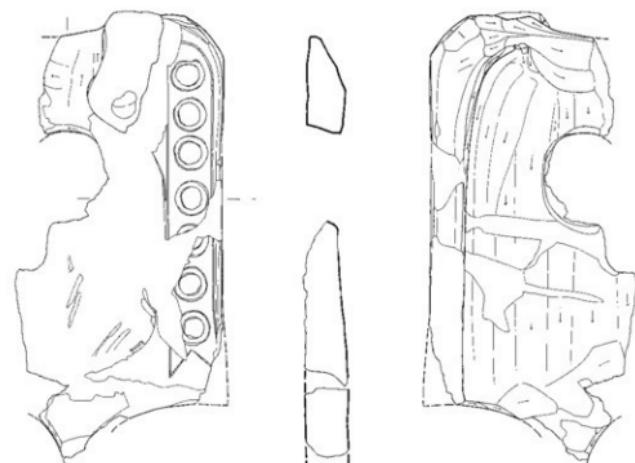
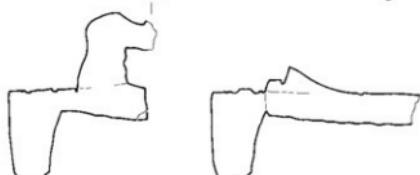


平瓦(3)

図版69 円光寺遺跡出土遺物



T54



T55

0

20cm

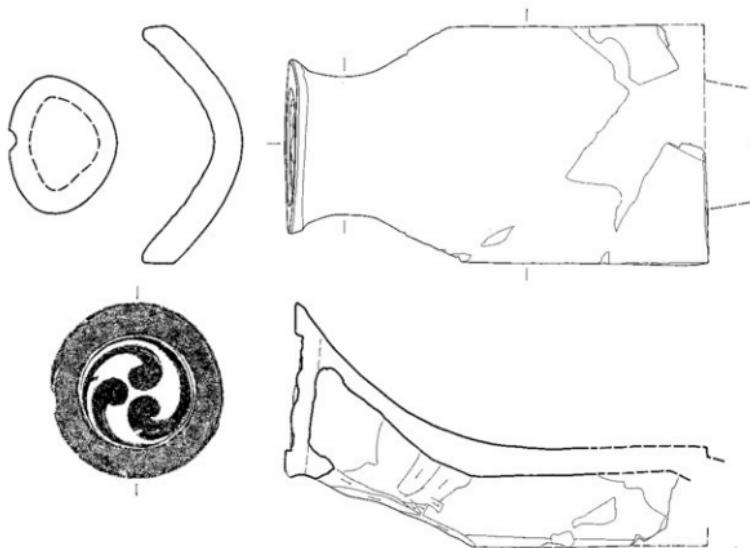
鬼瓦(1)

図版70 円光寺遺跡出土遺物

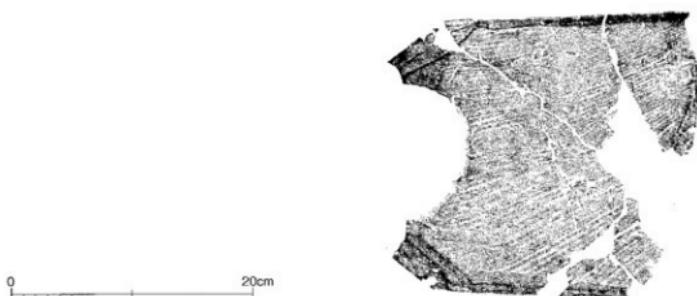


鬼瓦(2)

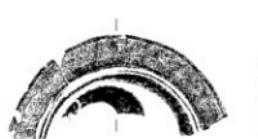
図版71 円光寺遺跡出土遺物



T64



0 20cm



0 10cm

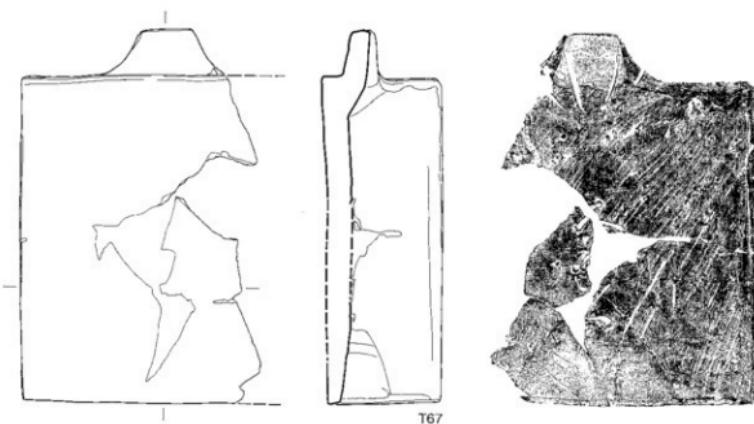


T65

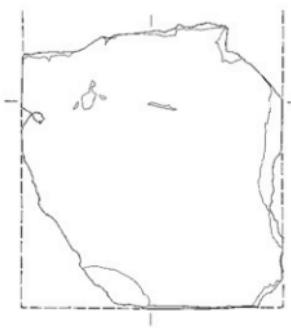
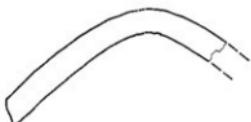


T66

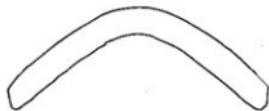
図版72 円光寺遺跡出土遺物



T67



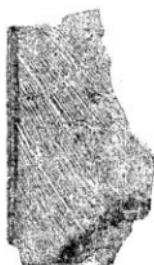
T68



0 20cm

雁振瓦(1)

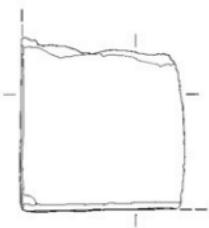
図版73 円光寺遺跡出土遺物



T69



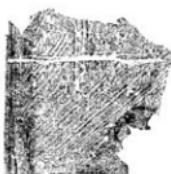
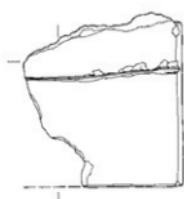
1



T70



1



T71



雁振瓦(2)